
シルバークエスト3 ~そして温泉へ...~

藤原ファルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルバークエスト3〜そして温泉へ…〜

【Nコード】

N3316F

【作者名】

藤原ファルス

【あらすじ】

ようやくのシリーズ3作目です（笑）今回、介護士プランとアリッサばあちゃんは、他国へと赴きます。新しい人物達も色々出てくる予定です。しばらくは仕事が忙しくなるため、今回はのんびり更新していきませんが、よろしくお願いいたします（uーu）

「ええっ！？ちよつと待つてくださいよ！！」

ブランは思わず大きな声を上げざま、椅子から勢いよく立ち上がった。

「ブラン君、まだ説明の途中ですよ。席についてください」

くわせ者の施設長、ツールースが眉間にシワを寄せて注意をしたが、ブランは不満気な顔のまま、席につく様子を見せない。

「おいブラン、今はまずいって。とりあえず会議終わってから話そうぜ」

隣に座った先輩介護士のフロントが、ブランの袖を引き、小声で話しかける。

彼の言うとおり、今は老人ケア施設『太陽の家』の月1の職員会議の真っ最中であり、会議室の口の字型に並んだ机のまわりには、ずらりと職員達が並んでいた。

『太陽の家』には、施設長のツールースの他にブランやフロントら介護職員が7人、栄養士と事務員が1人ずつおり、計10人の常勤職員が働いている。

他にもパートの介護士や調理師、警備員などがいるが、職員会議に出席するのは、常勤職員だけである。

会議では、主に来月のシフトや行事予定の確認、入退所する利用者の日程や段取りなどについての話し合いが行われるのだ。

ちなみに、個々の入居者の細かな支援については、また別に「ケース会議」というものが必要に応じて開かれたりもする。

「ほら、プランー!」

再びプリントに促されて、ようやくプランは席についた。

「さて、それでは引き続き、来月の温泉旅行について、起案づくりの担当を決めたいと思います。まず」

気まずくなつた室内の空気を振り払うかのように、進行役の介護士が、話を先へと進めていく。

今日の職員会議のメインテーマは、『太陽の家』における年間行事の中でも最もビックイベントとされている「温泉旅行」についての詳細決めである。

当然、「旅行」というだけあって、大勢の利用者を連れて遠出をするわけで、施設内で行う「納涼会」や「月見の会」のような行事に比べても引率する職員の負担や緊張感は格段に大きくなる。ましてや、『太陽の家』唯一の泊りがけの行事であることがビックイベントとされている所以である。

例年であれば、要介護度の高いものや体調の悪い者は居残りとなり、他の利用者全員で近隣の湯治場へ行くという形がとられていたのだが、先ほどツールズ施設長が提案したのは、それとは別のやり方であった。

「今年度は、旅行の行き先を二カ所に分けたいと思います」

つまり、体力や健康状態に応じて、近場と遠方、二カ所の温泉に利

用者を振り分けるといふやり方である。
ここまでは、ブランとて何の異存もなかった。

「今の所考えているのは、アルラ温泉とニーゲルンの里です」

「アルラ温泉」とは、フィン国内にある近場の温泉で、これまで『太陽の家』でも何回も利用している場所だ。

一方の「ニーゲルンの里」は、フィン共和国の北東にある国家、口クス王国にある有名な温泉郷だ。

『太陽の家』のあるフィン首都ヨルムから行って帰るとなると、少なくとも10日近い旅程となるのは確実だろう。

そして、その旅行へいく職員の配置がツールースの口から伝えられた時、ブランに衝撃が走ったのだ。

「ええ：ニーゲルンの里には、フリント君とブラン君の二人で、元冒険者の方々を連れて行っていただきたいと思えます」

ブランは、この春に就職したばかりの新米介護士であり、フリントと言えど、今年で四年目のブランに次ぐ若手の介護士である。

その二人で温泉旅行の一方を仕切るといのは、相当大変なことになるだろうというのが、容易に想像できた。

施設長の無謀な提案に、ブランとフリントは驚きのあまり顔を見合わせた。他の職員達はあらかじめツールースから根回しがあったのか、何の反応もないまま資料に目をおとしながら、皆で軽くうなづいただけだった。

「…というわけで、皆さん協力して行事を成功させましょう。何か質問のある人は？」

気がつけば、会議はすでにツールースによって締めに入っていたため、ブランはあわてて手をあげた。

「ブラン君、君の言いたいことはよくわかってます。その前に私から質問してもいいですか？」

質問に質問で返され、先手をくじかれたブランは、やむなく手を下ろす。

「現在、『太陽の家』に入居している、元冒険者の方は何人ですか？」

「えっと…」

「三人です」

ブランが答えようとする間もなく、施設長が自問自答してしまう。

「これに元行商人のポツテヌさんを加えた四人がニーゲルンの里に行くグループとなります。

特に介助を必要としない入居者四人ならば、二人の介護士で充分すぎる程ではないですか？」

「はい…」

それは確かにその通りだったので、ブランは肯定するしかなかった。

現在『太陽の家』には、定員四十に対し三十九名が入居している。

さすがに旅行に出かけることの難しい、要介護度の高い入居者が十人ほど、留守番の職員二人と残り、

近場のアルラ温泉には二十五人近い入居者と六人の介護士という大所帯で向かうこととなる。

数字だけ見れば、確かにブラン達は贅沢な職員配置であるようにも思える。

「いやあ、でもうちら若手二人じゃないっすか、さすがにちょっと不安っていうか…」

ツールースに追い込まれたブランを見かねたフロントが、短めの濃い茶色の髪をボリボリとかきながら、助け舟を出す。

本来ならば、フロント自身にも災厄が降りかかっているはずなのだが、このやや面長で目の細い若者は、物事を流れにまかせる傾向があり、ブランにとって、そこまで強力な味方というわけではなかつ

た。

「フリント君、話は最後まで聞くものですよ。先ほど私が伝えた配置は、あくまで正社員についてですからね」

「え？」

「メディナさんにニーゲルンの里へ同行してもらいます。もちろん本人にも了解を得てますよ」

「ああ……」

それを聞いてフリントはホツとした表情になったが、ブランは今まで以上に複雑に顔をしかめた。

メディナは、『太陽の家』に勤めるパート介護士であり、いかにも「肝っ玉母さん」といった風貌の中年の女性だ。

彼女は、結婚までの五年間『太陽の家』で正社員として働き、育児が一段落すると同時にパート介護士として復帰し、すでに十年、合わせて十五年のキャリアを持つベテラン介護士である。

当然パートとはいえ、新卒の正職介護士などより何十倍も仕事をこなせる貴重な人材なのである。

「ブラン君。これでもまだ、この人員配置に不満がありますか？」

「……………いえ」

これは、完全にツールースの作戦勝ちであるといえた。

本来であれば、温泉ごとの職員配置を発表する際に、パート介護士

の同行についても話しておくのが道理である。

しかし、あえてそのことは伏せ、若手二人から不満が出た上で、切り札としてメディナ介護士を出すことで、それ以上の反論を封殺したのだ。

「それでは、今日はここまでということ。さ、仕事に戻りましょう」

ツールースの余裕しゃくしゃくの言葉がうなだれるブランの上を通り過ぎていった。

「……ってわけでき、ホントにひどいんだよ!!」

昼間の職員会議の様子を話しているうちに、珍しく語気が荒くなり、思わずテーブルを拳で叩いてしまったブランだったが、今しがた運ばれてきた鍋料理から湯気がもうもうとわき、彼のメガネを完全に曇らせてしまったため、その姿はいささか滑稽なものとなってしまう。

「いいな、温泉だなんて」

「しかもニーゲルンって、メジャーすぎんだろ」

「へ？」

しかし向かいに座った若い男女からは、彼の期待した反応とは全く違ったうらやましそうな視線が送られてきたため、ブランは思わず肩の力が抜けてしまった。

「ちよっ!!二人ともちゃんと話聞いてた??」

ここは『夜夢』。福祉国家フィンンの首都ヨルム市南区にある、なかなか評判のいい居酒屋である。

「十日近くの旅行って…どんだけ贅沢なのよ」

「しかも、その間も給料はしっかり出るんだぜ、ずるいよなあ」

ブランの向かいに座って文句をたれているのは、もうおなじみの彼の幼なじみ、護民騎士のナツプと保育士のミネルバである。

「そういえば、うちの園を利用してるお母さんから、前にあの温泉に家族旅行へいった時の話を聞いたことがあるんだけど」

ミネルバの勤める国立の「ヨルム北保育園」には、騎士団や役人、商人の子どもなどが多く預けられており、結果、お迎えの時にその父母と雑談をする機会の多い彼女は、この幼なじみ三人の中でも一番の情報通なのであった。

「普通の温泉街って、色んな温泉宿が軒を連ねてるって感じでしょ。でも、ニーゲルンは、里自体が巨大な温泉施設になってるんだって
！！」

「へええ」

話がそれたことに落胆していたブランだったが、ミネルバのその情報には、思わず関心を示す声を上げてしまった。

「なんだよそれ。イメージわかねえなあ」

ナツプが、鍋から取り出した鳥肉を口に運びながら、おどけたように眉間にシワを寄せる。

「まあ、あたしも行ったことないから詳しくはわかんないんだけど、とりあえず温泉に入れるのは、里の中心にあるその施設だけなんだって」

「じゃあ、うちらもそこに泊まることになるのかあ」

ブランが自分なりにニーゲルンの温泉をイメージしながら言葉をこぼすのを聞くと、急に向かいに座ったナツプがブランの方に身を乗り出してきた。

「なあなあ。やっぱ、ばあちゃんはお前と一緒に行くんだろ？」

「うん」

「ばあちゃん」とは無論のこと、ブランが『太陽の家』で担当している、元冒険者の魔法使い、アリッサのことである。

「んで、ばあちゃんは今回の件について何か言ってるわけ？」

「いや、それが…」

その話題を振られると、ブランの顔色は目に見えて悪くなった。しかし、この場で話してしまった方が気が楽になるようにも思えたので、彼はその時のいきさつをボソボソと話し始めた。

夕方、ブランが屋上で取り込んだ大量のシーツを両手に抱え、リネン室を目指してよろよろと廊下を進んでいると、向かいから彼女はやってきた。

真っ黒なカーディガンと足首まであるやはり黒のスカート。

かなり大きなスミレ色のストールをぐるぐると肩から巻きつけ、頭にはつばつきの大きな帽子をかぶったその老女は、間違いなく魔法使いのアリッサであった。

「あ、こんにちは」

ブランはいつも通りに声をかけたが返事がない。

「こんにちは！！アリッサさん！！」

もしや耳が遠くなったのではと、シーツのバランスを保ちつつ、今度は大きな声で呼びかけたブランだったが

「うるさい！！聞こえてるよ」

逆にアリッサに一喝されてしまった。

どうやら、彼女の虫のいどころは相当によくないようだ。

「なあ、ブラン」

不機嫌さの裏返しのように、アリッサの顔に皮肉っぽい笑みが浮かぶ。

「あ、はい！！」

「今回の温泉は、あたしら元冒険者は別の所に行くんだって」

「ええ。一応、ニーゲルンの里に行く予定です」

昼の職員会議で決まったことをもう聞きつけているとは、何たる地獄耳かと、密かに関心するブランであったが、無論それをそのまま

口に出すような暴挙はしない。

「なるほど、あたしらみたいならささい厄介者は、ひとつにまとめ
て遠くへやっちまおうって腹かい」

「い、いえっ、そんなことは!!」

施設長ツールズのもくろみは、九割がたアリッサが指摘した通り
なのだが、さすがにブランも施設職員として「はい、その通りです
と答えるわけにもいかなかった。

「そうかいそうかい。ここのやり方はよくわかったよ」

不気味な満面の笑みを浮かべたアリッサが、その右手をスッとあげ
た次の瞬間…

パチッ!!

「うわあああああ!!」

彼女が右手の指を鳴らすと同時に、ブランが持っていたシートが、
噴水のように次々に空中へとふき上がったのだ。

その様子は、さながらカード芸を得意とする奇術師の手妻のよう
でもあった。

「まったく……冗談じゃないよ!!」

あたりに散乱するシートの中で尻もちをついて呆然とするブラン
に捨てゼリフをはいたアリッサは、そのままのしと廊下を曲が
り階段を降りていってしまったのであった。

「ってわけで、それを片づけるのにどんだけ苦労したか……って、ちよっと……!」

ブランの苦労話は、目の前の二人から同情の気持ちと呼ぶ効果はなかったようで、反対に爆笑の渦に巻き込んでしまっていた。

「いやいや、相変わらず苦労してんなあ」

「ホント!! かなりウケるし」

「……今の話に笑えるところなんかひとつもないんだけど」

無然とした顔で反論をしたブランだったが、そのままナツプとミネルバは、過去にブランがアリッサからつけた仕打ちの数々を語って笑うというトークに突入してしまっていた。

仕方なく彼は、自分をなぐさめるため店員を呼び、いつもより強めの果実酒を注文したのであった。

翌日、ブランがその自己責任により二日酔いでの勤務に苦しめられたの言うまでもない。

「あゝあ、あと一週間で出発だなあ」

隣の机でフロントが、温泉旅行の資料に目を通しながらぼやいてい
る。

『夜夢』での飲み会から三日後、ブランは夜勤のため、『太陽の家』
の事務室にいた。

夜間は二人体制の勤務のため、事務室はもとより、施設内にいる職
員は、現在ブランとフロントだけである。

「なあなあ、ブラン」

フロントがこちらを向いて声をかけてくる。

「はい、何ですか？」

「お前さ、やっぱりまだ今回の件は、納得してないわけ？」

「うーん」

「その顔は明らかに納得してないな。確かに最初は俺もどうかと思
ったけど、メディナさんも来るわけだし、もう問題ないんじゃない
の？」

「そうですねえ…」

さすがにブランも、今さら施設長の元におもむいて、職員配置を変
えてくれと訴えるつもりはなくなっていた。

もしかしたら、ツールースの提案は大当たりで、温泉行事は無事に成功し、利用者たちの評判も上々に終わるのかもしれない。しかしブランとしては、その提案が「もめごとの多い元冒険者たちを、新人に押しつけて追い払う」という考えのもとになされている以上、到底心から受け入れる気にはなれなかったのだが。

「んで、アリッサさんの方はどうなのよ??」

「え…」

ブランは、先日の「シーツ噴水事件」以来、アリッサとは関わるタ イミングを逃していた。

無論、彼が担当する入居者であり、折りにふれて顔を合わせてはいたのだが、温泉旅行へ向けての準備で、施設内がバタバタとしていたため、じっくりと腰をすえて話す機会がなかったのだ。

「多分、行かないってことはないと思いますが…」

「しっかし、リネン室の手前まで来てシーツぶちまけられたら相当へこむよな」

「それはホントに!!そもそも、今回の旅行計画だって、僕が決め たわけじゃないんですから。むしろー」

ブランが口をとがらせてアリッサへの不満を述べていると、不意に事務室のドアが開いた。

「おっ!!ちょうど二人ともいたね。夜勤ご苦労様」

部屋に入って来たのは、四十半ばくらい、コロツとした体型の中年

女性だった。

黒い髪をうしろで簡単に束ね、さっぱりとした茶色の服とズボンの上から白いエプロンをしたその姿は、どこからみても専業主婦であるいは下町の商店のおかみさんであった。

「メディナさん!！」

「どうしたんすか、こんな時間に??」

「なあに、若者二人じゃ腹へらしてるかと思ってね。はい、これ差し入れ」

そう言うと、メディナと呼ばれたその女性はニッと笑い、手に持った紙袋を若者達の方に差し出した。

「うわ、おいしい!!」

「俺、正直ミートパイに苦手意識あったんだけど、これはヤバいわ」
パート介護士であるメディナの差し入れの中身は、手作りのミートパイであり、二人の若者からの評価は上々であった。

「そうかいそうかい!!そう言ってもらえりゃ、作った甲斐がある
つてもんだよ」

そう言いながらメディナは、豪快な笑い声を上げた。
朗らかさと頼りがいが同居した、なかなか可愛すべき人物である。

「すみません、こんな遅い時間に」

「大丈夫よ、どうせすぐ近くなんだし」

そう言うと、メディナは再び笑い声をあげた。

本人の言う通り、彼女は『太陽の家』からものの五分とかからない
所にある、家族世帯のためのアパートに住んでいるのだ。

「そついやさ、ブラン」

「はい??」

ブランに呼びかけたメディナの顔は、いくぶん真剣味を帯びたもの
に変わっていた。

「今度の温泉旅行の事で、アリッサさんとゴタゴタしてるんだって??？」

「え?.....あ、はい」

そう聞くとメディナは、ブランとプリントが並んで座っている机の向かいに腰かけた。

「実は.....アリッサさん、今回の温泉旅行の割り振りが気にいらないみたいで、行かないって言い出すんじゃないかってすごく心配なんです」

ブランの言葉を聞いたメディナは、そのふっくらとした顔をあげると彼に質問を投げかけた。

「そうかい。ブランは、なんでそんな心配な気持ちになるんだい？」

「え、それは.....せつかくの温泉旅行だし、アリッサさんにも参加して楽しんで欲しいから.....」

「なるほど、確かにそれは大切なことだ」

メディナは、あくまでも朗らかな表情だったが、その瞳には確かに聡明な光が宿っていた。

「じゃあさ、あなたはアリッサさんに旅行を楽しんで欲しいわけだ」

「もちろんです!..!」

「……昨日ね、ドロシーさんと庭を散歩したんだよ」

ドロシーと言うのは、『太陽の家』の入居者で、アリッサの部屋の隣に住む盲目の老女である。

他の入居者からは、その偏屈な性格と魔力によるトラブルのため距離を置かれていたアリッサであるが、どういうわけか、このドロシーだけは非常に仲が良く、お互いの部屋を行き来することも多かった。

「そんな時に聞いたんだけど、どうやらアリッサさん、ドロシーさんと温泉に行くのを楽しみにしてたようなんだよ」

「あ……」

ブランの目がハツとしたように大きく見開かれた。

「去年の温泉の時、ドロシーさん、出発当日の朝に熱が出ちゃって、しかたなく留守番になったのよ」

「ああ、確かにそうだった」

フロントが思い出したように声を上げる。

「だからさ、アリッサさんとしても今年こそは一緒になって気持ちがあっただと思うのね」

「……………」

思えば、自分はアリッサが行事に「きちんと」参加する事ばかりを考えて、彼女の気持ちを受け止める努力を全くしてなかったなど、ブランは恥じ入るような気持ちになった。

「まあでも、アリッサさん、ニーゲルンには行くと思うから大丈夫よ」

メディナは、確信を持った口調でその理由を話し始めた。

「ドロシーさんの話だと、彼女の部屋に行った時、旅行の準備がしてあったって。まあ、ああ見えてからっとしたところのある人だし、自分なりに割り切って腹をくくったんじゃないかしら」

そこまで言うとメディナは、何か考えをまとめる様子で一瞬間をとり、再び言葉を続けた。

「ブランにあたったのは、まあ……『抗議の意志表面』みたいなものなんじゃないかしら。それを、自分の気持ちがあわかってもらえそうな人……つまりはブラン、あなたにただけで、本当は最初っからあきらめはついてたのかもねえ」

「でも僕は、アリッサさんのそんな気持ちに全く気づけませんでした」

ブランがつつむき気味にボソリと口を開く。

「そりゃさ、最初は仕方ないよ。みんなそうやって現場で悩んで覚えていくことだからね」

「そうだと、ブラン」

いつの間にかフロントは、メディナに便乗して励ます側にまわっていた。

「さてと、あたしはそろそろ帰るとするか。仮眠とる時はちゃんと毛布かけて寝るんだよ。じゃないと、疲れがとれないからね」

メディナがいかにも母親然としたアドバイスを残し事務室を後にすると

「さてと……じゃあ俺、先に仮眠もらうな」

どよんとしているブランといるのが気まずい様子フロントも立ち上がり、そそくさと退出してしまった。

一人残されたブランは、それまでおざなりにしてきた分を取り戻すかのように、メディナの言葉をかみしめ、アリッサへの思いを巡らしていたのだった。

それから二日後の昼下がり、ブランはアリッサの居室を訪ねていた。いくら行事前といっても、何とか時間をとろうとすれば、アリッサと話をする時間はとれたのである。

今まで忙しい事を言い訳にできていたが、実際は自分の気持ちの問題だったのだということに今更ながら気づくブランであった。

色々思い悩んではみたが、結局ブランが思い至ったのは「正直にあやまる」ことであり、それが最も彼らしい選択であると言えただろう。

コンコン

居室のドアをノックすると、中から返事があったので、ブランはそのまま室内へと入った。

「おお！！ブラン君、久しぶりですな」

ブランが驚いたことに、部屋にいたのはアリッサ一人ではなかった。彼女に向かい合って二人の男が座っており、ブランはそのどちらにも見覚えがあった。

ブランに声をかけたのは、茶色のローブを着たでっぷりとした中年男で、頭頂部に球根のような毛が申し訳程度に生え、鼻の下にはちよびヒゲという、なかなかユニークな面相の持ち主である。

「お久しぶりです、ハートストーンさん」

ブランにそう返されると、フィン評議会付き魔道士であるハートストーンは、手布で額を拭い愛想よく微笑んだ。寒い季節でも汗かきの体質は変わらぬようだ。

「はじめまして、あなたがブラン君ですか。この後、挨拶とお礼に伺うつもりだったので、ちょうどよかったです」

すると今度は、もう一方の人物が椅子から立ち上がりブランの方に近づいて来た。

茶色のサラサラとした髪に、貴公子のような美しい顔立ちの青年は、いかにも政治に携わるものが着ているような黒の礼服に身を固めていた。

「レイモンド・ウォルターです」

「あ、はじめまして。弁護士のブランです」

手を伸ばしてきたレイモンドと握手をしたブランは、やや緊張した面持ちで挨拶をした。

レイモンド・ウォルター…フィン評議会の実力者であるウォルター副議長の息子であり、現在は副議長の秘書を務めている人物である。将来は政治家としても期待されており、フィン国内ではそれなりに名の通った若者だ。

以前、レイモンドが、ウォルターの女秘書と閻魔術師のたくらみによって誘拐された際、その解決に力を貸したのがアリッサと、まあ一応ブランであった。

ブランの挨拶が、レイモンドの顔を知っていたにも関わらず「はじめまして」になるのは、彼らが初体面の時、レイモンドは闇魔術師の「時を止める魔法」により、凍りついた状態であったためであり、レイモンドからすれば、ブランには会うのも話すのも初めとなるのであった。

「事件の時は、色々とお世話になったようで……本当にありがとうございます
ございました」

「そんな、とんでもないっ！！僕なんかはただ、付き添いで行った
だけなんで」

レイモンドに心からの礼を言われ、逆にブランは動揺してしまった。
権力サイドの人間でありながら、全く偉ぶることのない態度は、さ
すがウォルターの息子といったところである。

「それで、お二人は何のご用でいらしたんですか？？また何か事件
でも」

「いえいえ、そうではないんですよ」

レイモンドがさわやかな微笑みを浮かべながら、もと座っていた椅
子に腰かける。

と、同時に隣に座ったハートストーンがもごもごと口を開く。

「実はですな、まあ依頼といえは依頼なのですが、先ほどレイモン
ド様がおっしゃったように、何らかの事件が起こったわけではなく、
あくまでそれを事前に防ぐためのー」

「大丈夫、ハートストーンさん。私からお話するから」

えらく時間がかかってしまいそうなハートストンの説明を笑顔で受
け流し、レイモンドは本日の用件を簡潔に述べた。

「今日はアリッサさんに、フィンの議会付き魔道士になっていただきたく、お願いにあがったんですよ」

「ええっ!？」

思わずブランは驚きの声をあげた。

元々、フィン政府というのは、魔法や魔道に対して否定的な色が強く、公職としての雇用は、議会付き魔道士一名のみと法によって定められていた。

福祉産業を促進させ、周囲からとびぬけて近代化してしまったこの国家にとって、魔術などというものは、社会体制の秩序を揺らがす「不確かな要因」とみなされていたのだ。

ハートストンはこの二十年間、この職に一人細々としていたが、実際は事務職を兼ねての採用であり、魔道士らしい仕事はほとんどしていなかったのが実情であった。

「父も非常に強く希望していることなので、必死の説得を試みたのですが、あっさり断られてしまいましたね」

そう言うと、レイモンドはアリッサの方に目をやり、苦笑を浮かべた。

レイモンドの父であるウォルターは、闇魔術師の一件がこたえたらしく、現在は「フィン魔道対策委員会」なるものを組織し、フィンの魔道政策の方針転換を図っている。

そして、議会の承認を得て最初に実行されたのが「議会付き魔道士」の増員であり、今まで一名だった定員が、十名となったのだ。

しかし、フタをあけて見れば、肝心の魔道士がいっこうに集まらず、

現在の時点で新たに採用された者はわずか二名といった有り様であった。

「冗談じゃない。あたしは、お役所仕事なんざまっぴらごめんだね」

アリッサは、とりつく島もないといった様子で、うるさそうに手を振っている。

偏屈な人間が多い魔術師たちにとって「公務員」などという職種は、まったくもって相性が悪いのは確かである。これがもし、どこぞの王室の宮廷魔道士などであれば、また話は変わって来るのだろうが。とはいえ魔術師達の中でも、偏屈度で言えばトップクラスであるアリッサについて言えば、王宮だろうが議會だろうが、彼女が誰かの下に仕えるなどということは、およそ想像がつかなかった。

「さ、用がないならお引き取り願おうか」

「ちよっ！！アリッサさん。もう少し言い方ってものが…」

アリッサは、この来訪者二人を嫌っているわけではない様だが、持ち込んで来た案件については、一分たりとも聞いていたくないという態度を全身で示していた。

「わかりました。それでは、また後日お伺いしますね」

「いつ来ても答えは変わらないよ」

アリッサの邪険な態度にも、全くこたえる様子を見せず、レイモンドは二人に一礼すると、ハートストーンを伴い居室をあとにした。

「レイモンドさん。もう、すっかり元気になったんですね」

かつては、時を止められた、さながら彫像の状態しか知らなかった人物が、今、目の前で、いたって普通に動き、話すのを見たブランは、感慨深いため息をついた。

「ふん」

ブランの感想に対しては、鼻をならしただけのアリッサであったが、今度は、ブランの方にじろりと目をやると、鷹揚に口を開いた。

「それでブラン。あんたは何の用なんだい」

「あつ、それは…」

一瞬口ごもったブランだったが、すぐに本来の目的を思い出し、改めてアリッサの方に向き直った。

「アリッサさん」

「なんだい改まって、気持ち悪いねえ」

「温泉旅行の事で、アリッサさんのドロシーさんへの気持ちに気づけず、自分の考えばかり押しつけてしまって、本当にすみませんでした!!」

ひねりも何も無い、直球で申し訳なかったという気持ちを伝えたブランであった。

アリッサは、眉間にシワを寄せ、いくぶん困ったような顔になった。

「これから施設長のところへ行って、なんとかお二人が同じグループになれるよう頼んでみます!」

「ちょっと待ちな」

今にも部屋から飛び出して、ツールースに直談判に行ってしまうようなブランを、アリッサが呼び止める。

「今さら余計なことするんじゃないよ。あたしはニーゲルンに行くよ」

「いや、でも…」

「つべこべ言うんじゃない!!もう決めたことなんだから、今さら口を挟まれる筋合いはないねえ」

字面だけ見れば辛辣なようであるが、ブランは、アリッサの言葉の中に、いつも通りの皮肉と親しみ親しみが込められているのを感じ、胸につまるものを感じていた。

『温泉か』

「うわぁ!」

いきなり、部屋の机の上に置かれたドクロがしゃべり始めたため、すでに慣れっこのはずだったブランも思わず悲鳴を上げてしまった。

「もう、ブンさん。急に話しかけないでくださいよ」

『すまん』

そのドクロは、目をチカチカと光らせながら、心の声で話しかけてくる。

ブンさんことブン・ラツハは、先の闇魔術師レイロックとの戦いに参戦した、南方の呪術師である。

レイロックの罠により肉体を失ったが、魂を移す術法により、自らが首から下げていたしゃれこうべの首飾りに宿ることとなったのだ。

現在は、『魂の管理者』に指名したアリッサに、南方の故郷へ送ってもらうのを待ちながら、彼女の居室のインテリアとなっている毎日だ。

『俺も、温泉、行けるか？』

「ええ……問題ないと思いますよ。ただ……」

『わかってる。無駄口、きかない』

ブン・ラツハの存在は、当然『太陽の家』の他の職員たちには秘密となっている。

「しゃべるドクロ」などという不気味な代物の存在が、ツールース施設長の耳に入れば、「施設の評判を下げる」という理由で、すぐにゴミ捨て場行きとなってしまうであろう。

「そうだねえ。確かにブン・ラツハは必要だ。是非とも連れて行きたいねえ」

「え？」

アリッサの言葉をブランが聞きとがめると、彼女はニッと不敵な笑みを浮かべ

「なあに、魔法使いの勘だよ」

と意味深な発言をしてのけた。

ブランの背中に一瞬不吉な予感が走った。

旅行当日の朝は、雲ひとつない晴天であった。

結局、温泉郷ニーゲルンへは、1泊12日という、かなり長期の旅程が組まれることとなり、2泊3日のアルラ温泉に行くグループよりも、一日さきがけて出発すること、『太陽の家』と懇意にしている旅行会社から案内人が派遣されることなどが、この数日間でもバタバタと決められた。

「なんじゃ小僧！？その荷物は？」

背中に大きなりュックをしょい、両手からそれぞれかばんを下げ、ふらふらと二階からロビーへおりてきたブランに、威勢のよいしわがれ声が飛ぶ。

「ああ、おはようございます、ガンダルガさん」

「そんな大荷物じゃ、馬車に乗るまでに潰れてしまっただろうが！！」

そう言う中『太陽の家』の入居者である巨漢の老戦士、ガンダルガは、がははと豪快な笑い声を上げた。

無論、馬車は施設の門の前にとめられているので、それは例え話であっただけだ。

「確かに……みなさん荷物少ないですね」

ロビーには、アリッサ、ガンダルガを始め、今回の旅行に参加する一同がすでに揃っており、それを見送りに来た他の入居者や職員で

ごつたがえしていた。

「まあ、ガンダルガ。彼は旅慣れてるわけじゃないんだからしかたなかるう」

顔一面に人のよさそうな笑みを浮かべた、ぽつちやりとした白い口髭を持つ老人が、パイプをふかしながらブランの方に歩み寄って来た。

動きやすそうな布の服の上に、肩からななめにかける大きなかばんを下げている。

「おはようございます、ポッテヌさん」

「ああ、おはよう」

ポッテヌは、ブランが『太陽の家』に就職した月に入居した利用者で、それまではずっと、行商人として大陸各地を行脚していた人物である。

「ふむ、あとで荷物のまとめ方を教えてあげよう」

「ありがとうございます！！」

ポッテヌの親切にブランが礼を言った時であった。

ポロロン…

ロビーになにやら弦楽器を爪弾く音が流れた。

「ああ、フェルナンドさんだ。おはようございます」

ポロロン…

彼らに近いソファに腰掛けているフェルナンドと呼ばれた人物は、ブランへの返答代わりに、手にした豎琴を器用につま弾いた。

皮製の三角帽子をかぶり、肩まで白髪を足らし、体をすすぽりと覆える大きな茶色のマントをはおった、なかなか品のよい顔立ちの老人だ。

「フェルナンド。馬車にのったら、さつそく何曲かお願いするよ」

ポツテヌが豎琴の老人に陽気に話かける。

フェルナンドは、吟遊詩人として諸国を漫遊し、数々の有名な冒険者達に同行した経歴を持つ人物であり、吟遊詩人達の間で知らぬ者はないとされている有名な存在なのである。

今回、ニーゲルンの里へ行く元冒険者の面子というのは、アリツサ、ガンダルガ、ポツテヌ、フェルナンドの4人であり、魔法使い、戦士、商人、吟遊詩人という、高齢であることを除けば、なかなかまんべんのないパーティーであると言えた。

ブランは、ポツテヌとフェルナンドに挨拶を済ませると、ロビーの一番隅のソファアに座っている、アリッサのところへと向かった。

他の三人の老人の周りは、見送りに来た入居者や職員が入れ代わり立ち代わりしてにぎわっていたが、アリッサのいる一画だけは人が寄りつかず、どことなくうら寂しい空気が漂っていた。

しかし、彼女が一人きりだったというわけではなく、向かいのソファアには、ちんまりとした老女が腰かけていた。

「あら、ブランちゃん」

簡素なワンピースに身を包んだその老女…ドロシーは、ブランが近づくとうれしそうに微笑んだ。

彼女は、目が全く見ず、移動するには杖の助けが必要な生活であったが、それを補うかのように研ぎ澄まされた聴覚を持ち、足音を聞くだけで、相手が誰かを判別することができるのだった。

「おはようございます。ドロシーさん、アリッサさん」

「おはよう」

ドロシーは朗らかに返事をしたが、アリッサはいつも通り「ふん」と鼻をならしたただけであった。

「今ね、お互いのお土産は何がいい？って話し合ってたところなの」

「そうですか」

「ドロシー、余計な事は言わなくていいんだよ」

心なしかアリッサは照れくさそうである。

さしもの彼女も、天衣無縫なドロシーの前では、いささか毒気を抜かれてしまうようだ。

「おやおや、みんなお揃いで」

陽気な声でブランたちに近づいて来たのは、パート介護士のメディナである。

彼女は、一同に挨拶をすると、ポンとブランの肩をたたきながらアリッサに話しかけた。

「アリッサさん。旅のキャリアは、あたしやブランよりずっと長いんだから、今回は色々助けてちょうだいね」

「ああ、わかってるよ」

「ロクス王国には行った事あるの??? あっちは何が美味しいのかしら?」

「そうだねえ…」

メディナはニーゲルンの里があるロクス王国のお土地柄について、アリッサとよもやま話を始めてしまった。

引率者が引率される側に頼るのも変な話ではあるが、アリッサがどの引率者よりも旅慣れているのは確かなので、ブランは黙って熟女たちの会話を聞いていた。

どうやら、アリッサとメディナというのも、なかなか相性がよい二人であるようだ。

「皆さま！！準備ができましたので、どうぞ馬車の方へお移りくださいませ」

そのとき玄関の扉が開き、フロントと共に茶色い簡素な礼服の男が中へと入って来た。首からは真っ赤なループタイが下がっている。年は三十すぎだろうか、黒い髪をびったりと固め、黒縁のメガネをしたその男の手には「モリス社」と書かれたロゴ入りの三角旗が握られていた。

「おい、小僧」

ガンダルガが、ブランの側に寄って来てうさんくさそうに質問する。

「あの男は一体誰なんじゃ??」

「ああ、ツアーコンダクターのネルガさんです」

「つあ？混濁?.....なんじゃそりゃ??」

ガンダルガは、子どもが浮かべるようなしかめっ面になった。

「ああ、ええと...『モリス社』っていう旅行会社から派遣された、観光案内人ですよ」

「モリス社」は、大陸各地に店舗を構える大手の旅行会社で、様々な指向のツアーを主催したり、旅行者への案内人の派遣や治安情報の提供なども行っている。

温泉旅行の出発3日前になって、旅先でもめ事を起こされる事を恐れた施設長ツールースにより、急遽雇われたのがネルガというわけだ。

「案内人じゃと??？」

老戦士の目は、今度はメガネの案内人の方へジロリと向けられた。

「わしらに案内人をつけるとは、ずいぶんなめられたもんじゃな」

元冒険者のガンダルガにとって、旅行に案内人など不要、という思いがあるようだ。

「ほらでも、ツアコンの方が長けているのは、あくまで観光についてですから。ガンダルガさん達とはまた、ジャンルが違いますよ」

「そうかのう…」

ブランがなだめたものの、ガンダルガは納得しがたい様子のまま、いかにも不服げに玄関の方にのしと歩いていつてしまった。

「珍しいこともあるもんだ」

「え?」

「あのじじいとあたしが同じ意見とはね」

「もう、アリッサさんまで!!頼むからネルガさんともめ事を起こしたりしないでくださいよ」

アリスサの背中を追いながらブランは、またひとつ旅の不安要素が増えたな、とひそかにため息をついたのだった。

門の外にはなかなか立派な四頭四輪だての箱馬車が停まっており、最後に出てきたアリッサとブラン以外の者はすでにその中におさまっていた。

「ああ、そつだ」

馬車のステップに足をかけようとしたアリッサは、思い出したようにブランを振り返ると、おもむろに指をパチンと鳴らした。

ヒュッ！！

「うわっ！！」

途端に、アリッサの懷から飛び出した黒い輪の様なものが、ブランの首に絡みついた。

「これは…」

よく見るとそれは、中心に金属製のドクロがぶら下がる、不気味な雰囲気を漂わせたネックレスであった。

「アリッサさん、これってもしかしてー」

何かに気づき、アリッサに話しかけたブランの言葉を、当のアリッサ自身が引き継いだ。

「そう、ブン・ラツハだよ。幻術をかけといたから、素人にやただのアクセサリーにしか見えないがね」

「はあ……」

「あたしはね、旅先でも一人で勝手にやりたいんだ。ブン・ラツハはあんたが連れてきな。わざわざ目立たなくしてやったんだから文句はないね」

「……………」

しかし、介護士の白衣とこのまがまがしいネックレスは、絶妙に最悪な組み合わせである。

これなら、本来の頭蓋骨を下げていた方がましなのではないかとブランはひそかに考えた。

「おお、ちょうど出発でしたか！！」

するとそこへ、玄関にいた見送りの人々をかき分けて施設長のツールースが馬車に近づいて来た。

施設の責任者だというのに、行事の見送りに遅刻してきたのは、今回の件への後ろめたさとアリッサへの苦手意識からであろう。

「いやいや、間に合ってよかった！！ちょっと仕事の手間取ってしまつてー」

いかにもな言い訳と愛想のよい笑顔を浮かべ、馬車の入口に近づいて来たツールースの表情が一瞬で凍りついた。

「……ブラン君。それは一体何ですか？」

冷たい眼差しで施設長が指差した先には、例のネックレスがあった。

「えっと、これはですね……」

「あなたも介護士の一人として、この行事には責任ある立場なんですよ、それを物見遊山のつもりでそんな装飾品をつけて出かけようというのならー」

質問を投げかけておきながら、ブランが答える間もほとんどないまま、ツールースは説教モードに突入してしまった。

「ーつまりは、あなたの軽率な行動が、うちの施設とその責任者である私に泥をぬることになるんですよ。まったく…上司として穴があつたら入りたい気持ちですね」

ツールースの話はしばらくは終わりそうもない。この分だと、出発まではまだ時間がかかってしまいそうだ。

「だとさ。ブン・ラツハ」

『ああ』

その時、ブランの後ろでなんともいたずらっぽいやつぱいアリッサのささやきが聞こえ、それに応えるように、ブランの首から下げたドクロの目が光った。

「なんです、今の低い声は???そのネックレス…ぶっ!…!」

ツールースの疑問は、茶色のかたまりによってさえぎられた。突如、植え込みの土が持ち上がり、そこから泥の玉がツールースの顔めがけて飛ばされたのだ。

「なっ！！こ、これは一体……ひいい！！」

彼の恐怖はそこで終わらなかつた、施設長の体はズブズブと石畳の道路へと沈み始めたのだ。

「何だこれは！？誰か！！誰か助けてええ！！」

ブランや玄関先にいる人々が呆然と見守る中、ツールースの体は肩まで地面に沈み、そこでピタリと止まってしまった。

「さあ、施設長殿も望みどおり泥をぬって穴に入ったようだし、いかにげん出発するよ！！」

アリツサは、その場に立ち尽くすブランを半ば強引に馬車に押し込むと、入口の扉を勢いよく閉めた。

馬車の中から一部始終を見ていたガンダルガが、ニヤニヤと楽しそうな表情のまま、御者側の窓を開け声をかける。

「よおし！！出発じゃ！！」

御者にムチを打たれ、馬たちは元気に走り始める。

後には、地面に置かれた生首のようなツールースが残され、いつまでも呪詛の言葉をわめきちらしていたのであった。

馬車での旅は極めて順調であった。

ブランたち一行は、フィン共和国を縦にはしる街道に沿って北上し、4日目には無事国境を越えロクス王国へとたどり着いた。

ロクスは、フィンの北東に位置する、農業・畜産業を主とする国家で、国王ロクシーヌ二世による穏健な統治が行われている。

現在、フィンとロクスの関係は極めて良好で、官民を問わず物的・人的交流が盛んに行われており、国境を越える時も、あらかじめ施設が用意した旅行者用の通行証を見せるだけでなんなく通過することができたのであった。

ロクス国境の街、ベルでさらに一泊をした一行は、翌朝早くに宿を出発し進路を西へとつた。

ツアーコンダクターのネルガによれば、昼過ぎには目的地であるニールンの里に到着することである。

「おや、どうしました??」

馬車の窓からぼんやりと外をながめていたブランは、不意に声をかけられ、あわてて後ろを振り向いた。

「ああ…ポツテ又さん」

彼に声をかけたのは、向かいに座っている元行商人のポツテ又であった。

「長旅で少し疲れてしまいましたかな??」

そういうとポツテヌは窓から見える景色へと目をやった。あたりは、枯れ草と雪のまだら模様がどこまでも続き、遠くに見える山麓は雪で白く覆われている。

フィンは大陸北部にあるとはいえ温暖な気候だが、ロクス以北は「北方」と呼ばれ、一気に寒冷地帯へと様変わりする。

「いや、体は元気なんです。どちらかというとむしろ…」

「むしろ?」

「こんなに順調すぎていいのかなあとと思って」

「ほお!!まるで冒険者のようないいようですね」

ポツテヌは、愉快そうに顔をほころばせた。

「順調結構。せっかくの行事なんだから、トラブルがない方がいいだろう」

ポツテヌの隣にいたメディナも大きくうなづいた。

「ですよね…」

ブランは苦笑を浮かべるしかなかった。

そんな彼の隣ではアリッサが、我関せずとばかりに、何やら呪具のカタログをペラペラとめくっている。

ブランはそんな彼女を見てため息をひとつついた。

つまるところブランにとって「アリッサと行動を共にしているのに平穩である」という状態には、違和感をかんじざるを得ないのである。

彼女行くところにトラブルあり、という心構えで今回の旅行にも臨んだだけに、この平和な数日間ですっかり調子が狂ってしまったというわけだ。

またもうひとつ、貧乏性の彼にとっては、のんびりと馬車に揺られフェルナンドの歌声に耳を傾けたり、ネルガが手配してくれた宿でくつろいでいるにもかかわらず、勤務上は出勤扱いで、それらが給与の一部になってしまふという事が、何とも心地悪く感じてしまふのだった。

「みなさん！！間もなくニーゲルンですよ！！」

その時、御者側の窓をのぞいていたネルガが一同を振り返り声をあげた。

ブランは、馬車の窓を開けて進行方向をのぞき見た。前方には低い山々が広がり、街道はその山の間を縫うように続いている。

「ニーゲルンの里は、低山地に囲まれた盆地なのです」

旅慣れた老人達にというよりは、むしろ物珍しげに外を見ているブラン、フロント、メディナら引率者に向けて、ネルガが解説をはじめめる。

「そもそも、三百年前までニーゲルンは、ありふれた寒村だったそうです。それが、ある事件をきっかけに温泉郷へ姿を変えたと言われています」

「ある事件？」

フロントが、興味深げに問い返す。

ネルガはいくぶん得意げな様子で、たつぷりと間をとってそれに答えようとする。

「ええ、それはー」

「ロジ・マジとヴィシユメイガの戦い」

ネルガの言葉を遮り、あたりに朗々とした声が響く。フェルナンドだ。

「よ、よくご存じですね。さすがは高名な吟遊詩人」

いいとどりをされたネルガは、引きつった笑みを浮かべてフェルナンドの方を見る。

ポロン…

フェルナンドは、それに応える代わりに目を閉じたまま豎琴の弦を爪弾いた。

「では、あらためてその『ロジ・マジとヴィシユメイガの戦い』について話させていただきませぬ」

気を取り直したネルガは、ニーゲルンに伝わる三百年前の事件について話し始めた。

馬車の両側の景色はどちらも切り立った崖となっている。

ここを抜けるといよいよ温泉郷なのだろう。

はるか昔、ニーゲルンは、本当にさびれた、これといった特産品もないただの村だった。

村人たちは、実りの少ない畑をたがやし、かるうじて日々の生計を立てていたそうだ。

その頃、北方を荒らしまわっている恐ろしい妖魔がいた。

『雪妖ヴィシユメイガ』

氷でできた女性の彫刻のような姿のその妖魔は、恐るべき魔力で氷狼たちを従え、北方各地の村を次々と氷漬けにしていったという。

「そして、ニーゲルンもそんなヴィシユメイガの気まぐれによつて狙われた村のひとつだったので。貧しい村人達には雪妖にあらがうすべなど何もない。しかし、幸運なことに、そのとき村に一人の男が滞在していた…」

口を挟まれることを恐れたネルガは、今度は間をとらずにそのまま言葉を継いだ。

「それが『温泉魔導師ロジ・マジ』なのです」

「お、温泉魔導師…!?!」

そこまで、はるか昔の伝説を聞くつもりで耳をかたむけていたブランは、思わず肩をくずしてしまった。

「なんすか、そのご当地キャラみたいなのは」

ブランのななめ向かいでフリントもあきれた声を上げる。

いよいよ英雄の登場かと盛り上げておいて「温泉魔導師」と言われれば仕方のない反応だろう。

「キャラじゃない。ロジ・マジは実在した魔導師さ」

そんな空気の中、ブランは、アリッサがカタログから目を離さぬままボソツとつぶやくのを聞いた。フェルナンドもそれに無言でうなづいている。

魔法使いや吟遊詩人の間で「ロジ・マジ」は名の知れた人物なのだろうか。

「さ、それではつづきにいきますよ」

ネルガが幾分あせった口調で話を再開する。目的地につくまでに切りよく話を終えたい様子である。

ヴィシユメイガと氷狼たちによって奇襲を受けたニーゲルンであったが、ロジ・マジとの激闘の末、彼の用いた温泉魔法により、氷狼たちはすべて消滅し、ヴィシユメイガもニーゲルンのはずれに古く

からある遺跡「ユガルタの迷宮」の奥深くに封印された。

ロジ・マジ自身もいずこへともなく姿を消し、村には彼が雪妖との戦いでつくりだした巨大な温泉が残されたという。

「その温泉を観光資源にすることによってニーゲルン村は、一大温泉地である『ニーゲルンの里』へと変貌をとげたというわけです」

そうネルガが話をまとめた直後、馬車の両側の景色がひらけ、一行の前にニーゲルンの里がその姿を見せた。

「おおつ、すげえ」

窓の外を見ながらフロントが感嘆の声をあげる。

それもそのはずだ、そこに広がる光景は今までのロクス王国のそれとは一変していた。

「なんだか魔法にでもかけられたみたいだねえ」

メディナが、何とも言えない面持ちで馬車の窓を開けると、外から気持ちのよい風が車内に吹きこんできた。

もはや、雪と枯れ草のまだら模様はどこにもなく、辺り一面には青々と草が生い茂り、様々な野草が花を咲かせていた。

まるで、季節が冬から春へと一瞬で変わってしまったかのようである。

「本来、北方の盆地というのは冷え込みが厳しいのですが、ここニールガは、地熱の力で温暖な気候を保っているのです」

ニールガの解説を聞いているブランの隣では、アリッサが何やら面白くなさそうに鼻をならしていた。

どうやら、彼の説明に納得できないところがあるようだ。

「皆さま！！右手をご覧ください！！」

そんなアリッサの様子に気づくことなく、ニールガは馬車の右側を手でさし示した。

里を取り囲む山肌の一部が崖のようになっており、そこに巨大な扉が張りついているのが見える。

金属製とおぼしきその扉は、三階建ての家屋ほどの高さでそびえ立っており、その周辺には、無数の石柱が地面から突き出していた。

「あれが、先ほどの逸話に登場した『ユガルタの迷宮』です。三百年前にヴィシユメイガが封じられて以来、その扉は閉ざされたままとされています」

三百年もの間、開くことのなかった扉の向こうには、一体どのような世界が広がっているのか……そのような事を考え、ブランは思わず身震いをした。

「この後みなさまには、ニーゲルンの中心街に入ってください、『ロジ・マジのほこら』を観光したのち、夕方には宿に到着となります」

「おお、見えてきた。久しぶりですなあ」

外をのぞいていたポツテヌの言葉を聞き、ブランは同じように馬車の窓から前方に目を向けてみた。

両脇の景色の変化にばかり目を奪われていたが、彼らの正面にはすでに、にぎやかなニーゲルンの温泉街が迫りつつあった。

ニーゲルンの里の中心には「湯くゲルン」と呼ばれる巨大な温泉施設がある。

鮮やかな緑色のレンガで外装され、庭園に囲まれた五階建ての建造物で、その大きさは、ちよつとした小国の王城をしのぐほどである。あちこちから煙突が突き出し、もうもうと煙が立ち上っているところだ、この建物が決して王城などではなく温泉施設であることを証拠づけていた。

この「湯くゲルン」を円形にとり囲むようにニーゲルンの街は展開しており、そこに立ち並ぶのはサービス業の店舗がほとんどである。飲食街、歓楽街、屋台村、お土産村などがブロックごとにひしめいており、「湯くゲルン」から放射状に伸びた道によって、それらは比較的しっかりと区画分けされていた。

ニーゲルンの中心街に到達した『太陽の家』一行は、そのように伸びた道の一本から脇に入り、屋台村のはずれにある小さな森の前に馬車を停めていた。

どこもかしこも、にぎやかな人ばかりで埋め尽くされているニーゲルンの中心街において、この一角だけは、開発から取り残されたように閑静な森がたたずんでおり、一本の砂利道がその中へと続いていた。

馬車からおりた六人：ブラン、アリッサ、ネルガ、ポツテヌ、フェルナンド、メディナらは、これからこの林の中にあるという「ロジ・マジのほこら」に向かう予定であった。

ちなみに老戦士のガンダルガはというと、早朝にベルの街で馬車に

乗る際「ニーゲルンの宿に着くまでは決して起こさないように」と言い、出発早々さっそく高いびきをかきはじめ、馬車の激しい揺れに目を覚ますこともなく、ここまで眠りこけていた。ガンダルガの担当であり、このような史跡にもあまり興味のないフリントも、馬車の中に残ることとなった。

メリメリメリ…

「何だろっ？？」の音…」

「この先 ロジ・マジのほくら」と書かれた標識の脇を通り、砂利道を進んでいたブランは、思わず足を止めた。他の者たちも同じように怪訝な顔をしている。

どうやら木が倒されている音のようだが、あまり気持ちのいいものではない。

そしてその音は、彼らの進むべき方向から聞こえてきていた。

「あ、アリッサさん!!」

一同が立ち止まる中、アリッサだけは相変わらずのふてぶてしい表情のまま足も止めず、そのままスタスタと先に進んで行ってしまった。

「ちよっ!! 待ってくださいよ」

あわててブランは彼女の後を小走りで追いかけていった。

ものの五分とかからぬうちに一行は「ロジ・マジのほこら」にたどり着いていた。

しかし、彼らの前に広がっていたのは、なかなか奇妙な光景であった。

「これは一体……」

それは、案内人のネルガとっても想定外の事態だったようで、驚きの表情を隠せないでいる。

確かに目の前にはそれらしき木製の小さなほこらがあったのだが、問題はそのうしろ側にあった。

ほこらの後方には、等間隔に杭が並び、進入禁止を示す黄色いロープが張りめぐらされていたのだ。

ロープの向こう側の土地には、おびただしい数の「切り株」が広がっていた。

本来ならば、今来た道と同じように自然森が広がっていたのだろう。だが、今やほとんどの木は切り倒され、すっかり丸ぼうずにされてしまっていた。

メリメリメリ……

そして、残されたわずかな木にも、労働者風の男達が群がり、巨大なノコギリや縄を使い、それらを次々と引き倒している。

「すみません。ここは、あまり人の訪れない静かなスポットとして予定に入れていたのですが…」

ネルガが、ブランにだけ聞こえるようにささやく。

辺り一面に切り株が広がり、木々が悲鳴のような音を立てて倒されていく光景は、とても「静かなスポット」とは言い難かったし、何より、見る者を何となく不安に、落ち着かなくさせるものがあつた。

ブランが、ネルガに対し何と答えようか考えていると、元行商人のポッテヌが口を開いた。

「おや、どなたかこちらへ来るようですよぞ」

彼の言葉どおり、ロープの向こうの切り株の間を抜け、何人かの男たちがこちらへ歩いてきた。

「どうもどうも！観光でいらした方ですか??」

先頭に立ち、満面の笑顔でこちら近づいてきたのは、赤黒い長衣をおつた四角い顔の中年男だつた。

両脇には、見るからに屈強そうな傭兵とおぼしき男二人を従えており、中年男自身もまた、なかなかにがっちりとした体格の持ち主であつた。

「はじめまして。ここニールゲルンの村長をさせていただいている、ガロンと申します」

男は、いかにも愛想を振りまくような様子を見せながら、ロープをまたぎ越え、こちらに手を差し出してきた。

「ようこそ！温泉郷ニーゲルンへ！」

「お初にお目にかかります。モラリス社のネルガと申します」

「二丁ゲルン村長の差し出した手を握り返したのは、ネルガであった。

「モラリス社……ではやはり観光で。今日到着されたのですか？」

「ええ、先ほどこちらに着いたばかりです。このほこらを見学してから『湯くゲルン』に向かうつもりだったのですが……」

「そこまで言ってネルガが言葉を濁すと、すかさずゲロン村長は大仰に頭を下げた。」

「いや、誠に申し訳ない。ほこらのとり壊し工事が前倒しになった件についてはあらかじめ観光各社に通達を出しておいたのですが……何ぶん急な事だったので、伝わりきらなかったようだ」

「そう言っただけで頭を上げたゲロンは、申し訳なさそうに一同を見回した。」

「このほこら、壊してしまっんですかな？」

「ポツテ又が残念そうな表情でゲロンに問いかける。」

「馬車の中で、行商人を引退してからは、各地の史跡を訪ね歩くのが趣味になったとポツテ又が話していたのをブランは思い出した。」

「ええ。もはやここを訪れる観光客もほとんどおりませんし、これだけの土地を遊ばせておくのは実にもったいないのでね。もし、皆さんが来るのが半年遅ければ、ここに建つ巨大カジノで遊んでいた

「だく事ができたのですが」

そう言うとガロンは、自分の言った冗談が面白かったのか、豪快な笑い声をたてた。

人ごみも賭け事も苦手なブランにとっては、何故わざわざ静かな名所をつぶしてまでカジノをつくるのか理解できないものがあつたし、目の前で笑っている油ぎつた中年男性をあまり好きにはなれなかつた。

「まあ、ほこらの中の『ロジ・マジ像』は、湯ぐゲルンの展示室にでも移そうかと思えますがね。その方がロジ・マジにとっても幸せでしょう。まあ、私に言わせれば、ロジ・マジなどというのはあくまで物語の中の人物で、実在したとは到底思えません」

ブランはアリッサの方に目をやった。

いつもの彼女ならば、このような物言いをする男には、容赦なく皮肉を浴びせるか、魔法攻撃を浴びせるはずである。

しかし、今日の彼女はどうしたことが、ムツスリとはしているものの、何やら神妙な表情のまま沈黙を保っていた。

むしろ、彼女の後ろにいるメディナの方が苦虫を噛みつぶしたような顔で、何やらガロン村長に一言いいたそうであつた。

「しかし、このような言い方をしては失礼かもしれませんが、皆様はある意味、幸運だといえますぞ」

「と、いいいますと？」

ポツテヌに問い返されたガロンは、両手を広げニヤリと笑ってみせた。

「おそらくは、あなた方がここを観光する最後のお客様となるでしょう。これは、帰ってからの話の種になるんじゃないですか??」

「そりゃつまり、明日にはここを壊しちまうってことかい??」

メディナが、不満げな表情のまま村長にたずねる。

「まさしくその通り!!」

ガロン村長は、むしろ誇らしそうにその疑問に答えてみせた。

「今日中に森の北側の伐採がすべて終わるので、今後は皆さんが歩いてきた南側に作業を移すんです。明日は手始めに、そのほこらを打ち壊します。つまり、ほこらを見学できるのは今日が最後！いや、実に運がいい」

ガロン村長は、ブラン達に「最後にはほこらを見た観光客」という附加価値をアピールする事によって、この殺風景に変わり果てた史跡を見せられた事を帳消しにする作戦のようだ。

「そうですね……まあ、ここに立ちっぱなしもなんですし、そろそろほこらの見学に移りましょうか」

ネルガがそのように皆に促した時、不意に一行の後ろからしわがれた声が響いた。

「ガロン！！これは一体どういふことじゃ！！」

驚いたブランが振り返ると、そこには四人の老人と一人の少女が立っていた。

「ガロンよ、この森の有り様について説明してもらおうではないか」先頭にいた老人が、少女に体を支えられながら一步前へと進み出た。どうやら、どこか体を悪くしているようだ。

薄い紫色の長衣をはおり、手に杖を持ったそのリーダー格らしき老人の後ろには、同じ様に腰の曲がった三人の老人がガロン村長の方を睨みすえていた。

年は四人とも七十過ぎであろうか。

同じ老人の集まりであっても、彼らは『太陽の家』の元冒険者達に比べると、ずいぶんと落ち着いた雰囲気を漂わせていた。

もつともそれは、「枯れている」と言いかえることもできたのだが。

「お義父さん！！このような所までこられるとは。ご無理はなさらないでください」

言葉とは裏腹に、ガロンの顔には冷笑が浮かんでいた。

そして、それまで後ろに控えていた二人の傭兵が、威圧するかように一歩前に進み出て、村長の両脇に立ったことにブランは気づいた。

「長老会の意向はあらかじめ伝えてあつたはずじゃ！！それをよもやここまで無視しようとは！！」

紫の長衣の老人は、興奮したようすでガロンに言葉をぶつけた。

老人にとっては、ここまで来ること自体が相当難儀だったようで、ゼイゼイと肩で息をするたびに、かたわらの少女が心配そうに背中をさすっている。

しかし、ガロン村長は、余裕の笑みを浮かべ、目の前で必死な姿をさらす老人に穏やかに話しかけた。

「確かに村議会の規定には『長老会の意向を尊重すること』という一文がありますが、それは議会が老人方に絶対服従するという意味ではありませんよ。今時、それはあまりにも時代錯誤というものでしょう」

ロクス王国では、国王と貴族達による王制がしかれていたが、地方都市や村々には議会を置くことが許されており、ある程度の権限を

与えられていた。

「何をぬけぬけと！！村議会を牛耳り、私物化しておきながら、よくもそのようなことが！！」

老人はさらに声を張り上げて、ガロンを非難した。その、はげ上がった額には汗が浮かび、後頭部から肩まで伸びた白髪は乱れて、さながら老いた落ち武者のような様相を呈していた。

「おじいちゃん！あんまり怒っちゃだめ！」

それまで黙って大人達のやりとりを聞いていた、老人のかたわらの少女が、たまりかねたように口を開いた。

年は十二、三といった所であろうか。

赤みがかった茶色い髪を三つ編みにたらし、うぐいす色のワンピースを着た、いかにもおとなしそうな印象の女の子である。

「そうですね、お義父さん。それに周りをよく見てください。観光客の皆様の前で取り乱して、ニーゲルンの名をおとしめるのはやめていただきたい」

ガロンからの棘のある指摘を受けると、少女に支えられた老人は、幾分落ち着きを取り戻し、ブラン達の方に向き直った。

「うむ……観光中の皆様の前で醜態をさらしてしまいましたな。誠に申し訳ない」

すると、そこへすかさずガロン村長が口を挟んだ。

「どうもご迷惑をおかけしました。こちらは私の義父で、ニーゲルン長老会の頭をつとめるニコライです。隣はその孫……つまりは、私の娘のミミです」

父親からの紹介を受けたミミは、顔を真っ赤にしてブランたちに頭を下げた。

どうやら、顔も性格もガロンにはあまり似なかったようである。

「さあ、お義父さん。彼らに家まで送らせますので、今後無理な外出は控えてくださいよ」

ガロンが目くばせすると、両脇にいた傭兵たちが素早くニコライへと近づき、両側から強引にその肩をつかんだ。

「結構じゃ!!お主らの世話になる筋合いはない!!こら、離せといっ!!」

「やめて!!おじいちゃんに乱暴しないで!!」

しかし、ミミが叫ぼうが、後ろの老人達が抗議の声を上げようが、傭兵たちは全く耳を貸すことなく、主の命令を遂行しようとしている。

ブランは、さすがに介護の道を選んだだけあって、とうてい目の前で行われているニコライへの扱いに黙っていることはできなかった。

「ちょっと!!」

ブラン、そしてほぼ同時に隣のメディナが、傭兵たちを止めようと口を開いた時、意外な事が起こった。

ポロポロン

それまで、黙って成り行きを見ていたフェルナンドが、突然手にし

た豎琴をかきならしたのだ。

その場にいた全員は、思わず手を止め、彼の方に目をやった。

皆の視線が集まったタイミングを逃さず、老詩人は勢いのある、しかし悲しげな曲を奏ではじめた。

唐突さと、そして確かに見事としかいいようのない演奏の腕前によって、一同は結局、曲が終わりフェルナンドが一礼するまで棒立ちすることとなった。

パチパチパチ…

曲が終わった後の沈黙を破ったのは、ガロン村長のゆったりとした拍手だった。

「いや、実にお見事でした。どうやら、これ以上ここで事を荒だてるのは無粋のようですね。……ドース、ダイン、行きますよ」

ガロンに名前を呼ばれた二人の傭兵は、ニコライ老を解放すると、その場に背を向けて立ち去っていく雇い主の後を追っていった。

「旅の方、助けただきありがとうございました」

ニコライが頭を下げると、フェルナンドは返事代わりに豎琴をやさしく鳴らしてみせた。

「モラリス社の方、皆様は湯ぐゲルンに泊まられるのですかな？」

「ええ、そうです」

ニコライに問われたネルガが返事をする。

「では、後ほど改めてお礼に伺わせていただきます。ミニ、行くぞ」

そう言うと、少女と長老達は元来た道へと消えていった。

「……さて!! それでは皆さん、いよいよほこらの見学に移りましようか!!」

ネルガのいくぶん空々しい声があたりに響いた。

「こりやすごいなあ」

馬車からおりたブランは、思わずため息をついた。

彼の目の前には、ニーゲルンが誇る温泉施設「湯くゲルン」がどっしりと居を構えていた。

もう日が暮れかけており、湯くゲルンから立ちのぼる無数の煙が、オレンジ色の空に不思議なシルエットとなって映し出されている。

「いやあ、夜になる前に到着できましたね」

ネルガがホツとため息をもらす。

村長達のもめ事に巻き込まれたため予定が押し気味だったのだろう。

もっとも「ロジ・マジのほくら」の中というのが、緑色の石の台座の上に、古ぼけた木像が置かれただけというシンプルさだったため、見学自体に時間はかからなかったのだが。

木像のロジ・マジは、つるりとはげ上がった頭に、膝までのローブをきた聡明そうな老人であった。

しかし、木像自体にはあちこちにひびや痛みが見られ、その上すっかりほりをかぶっていたため、ブランの中には、なにやらむなし印象だけが残っていた。

「おおっ！！相変わらずでかいのう！！」

その時、ブランの後ろで、久しぶりにばかでかい声がした。

「小僧！！中で迷子になったりするなよ！！」

そう言つて、目覚めの一発、高らかな笑い声をあげたのは、今朝から今まで馬車でひたすら爆睡をしていた老戦士、ガンダルガである。たっぷり睡眠をとつて絶好調のようだ。

「そつえば、ガンダルガさんは、ここに来るの初めてじゃないんですよね??」

「無論じゃ！！通算6回目かのう」

ガンダルガは、冒険者時代から温泉好きだったようで、今もかつてのパーティー仲間とよく旅行に出かけている事をブランは思い出した。

「……おやおや、残念だねえ。温泉の効能に『馬鹿に効く』なんてのがあれば、あんたも相当マシになつただろうに」

それまで、ブランが心配になるくらい沈黙を保っていたアリツサだったが、ガンダルガの覚醒に合わせて、得意の皮肉も復活したようだ。

「ちよつ！！アリツサさん！！なんて事言つんですか！！」

「よいよい小僧。わしは今すこぶる機嫌がよいからな。アリババのたわごとなどに怒つたりはせんよ」

「『ハゲに効く』がなかったのも残念だねえ」

「なんじゃと！！！！この老いぼれ魔法使いめ！！！！」

ガンダルガの「怒らない宣言」は、あえなく一瞬で破られてしまった。

ブランはフロントと目配せすると、お互いが担当する相手のそばへ行った。

「まあまあ、ガンダルガさん。せっかくこれから温泉に入るんですから」

「じゃがなあー」

「アリッサさん、ここは馬車の出入りが激しいですから、とりあえず移動しましょう」

「んなこたわかってー」

二人の若い介護士は、なかなか見事な連携プレーを見せ、それぞれの文句を聞きながら、巧みに二人をグループの先頭と最後尾に引き離すことに成功した。

「では、皆さん私についてきてください！！はぐれないように気をつけてくださいね！！」

ネルガが旗を振りながら一同に呼びかける。

そうしている間にも、湯々ゲルン前の駐車場には、大小様々な馬車が到着し、そこから降りるたくさんの人々でごったがえしていた。

「まったく……あのジジイの笑い声は、うるさいったらありゃしないよ」

皆の後ろを歩きながら、アリッサの愚痴を聞くうちに、ブランは何やらうれしい気持ちになっていた。

「ん???... ブラン、何をお前はニヤニヤしてるんだい?」

「ああ、すみません。いや、アリッサさんが元気になってよかったなあって」

「はあ???」

「いや、さっきまでアリッサさん、全然しゃべらなかつたじゃないですか。話しかけても生返事だったし」

「そうかねえ」

「やっぱり、何だかんだでガンダルガさんと一緒の方が元気が出るんですね.....ぶっ!!」

アリッサが指を鳴らした途端、何かスリッパのようなもので頭をはたかれた衝撃がブランに走った。

「目覚めの悪くなるようなこと言っつんじゃないよ。さっきはちょっと気になることがあったから考え事をしてただけさ」

「いてて.....気に.....なること???」

「ああ、あのほこらなんだがね」

そう話すアリッサの顔には、珍しく困惑の色が浮かんでいた。

「では、これから部屋の鍵をお渡しします。男性は337号室、アリッサさんとメディナさんは415号室ですよ。夕食は、一時間後に415号室の方と一緒に食べる形となります。それまでは部屋でおくつろぎいただいても結構ですし、先にお風呂に入っていただいてもかまいません。それから」

ロビーの一角で、ネルガが『太陽の家』の者達に、これからの流れを説明している。

恐ろしく広いロビーの各所には、フロントはもちろんのこと、土産物屋、ちょっとした喫茶コーナー、レストランの入り口などがあり、どこもたくさんの人がうろついていた。

ここまで、アリッサと話しながらやって来たブランだったが、結局彼女の懸念については、はっきりしないままだった。

どうやら彼女は、この里の温暖な気候や、ロジ・マジのほくらについて、何らかの「ひっかかり」を感じているようなのだが、それを解き明かすことができない様子だった。

こう見えて、この皮肉好きの小さな老女は、魔道大公ノルンにも一目置かれるほどの強力な魔法使いである。強い魔力を持つ彼女ですら、つかめない何かがこの里にあるというのだろうか。

「ブラン、移動するぞ」

フロントにつながされ、ブランは、今は漠然としたことで思い悩む

よりも、目の前の引率業務に集中するべきと、頭を切り替えることにした。

「ではまた、明日の朝九時にロビーでお会いしましょう」

会社の宿泊施設に泊まることになっているネルガに別れを告げ、一行は男女別にそれぞれの部屋へと移動を開始した。

「ぶっつ」

男部屋の皆の荷物を一カ所にまとめたブランは、ようやくテーブルの前に腰をおろした。

337号室に着くなり、ガンダルガ、ポツテ又は食事前にひとつ風呂浴びるぞと、プリントを伴い、またたく間に飛び出して行ってしまった。

そんなわけで、部屋にはブランとフェルナンドが残されていた。

フェルナンドは、いかにも吟遊詩人らしく、窓際に座り、外を眺めながら豎琴をいじっている。

「フェルナンドさんは、お風呂大丈夫なんですか？」

「ボロン」

「そうですね、今あわただしく入るより、後でゆっくり行きたいですよ」

「ボロン」

ブランは、全く音楽などには疎かったのだが、不思議とフェルナンドの奏でる豎琴と会話することができた。

もっとも、ブランに限らず、フェルナンドは大抵の者と豎琴で意志疎通することができたので、それは、この老詩人のなせる技だったのであるうが。

「それにしても、珍しい部屋だなあ」

改めて部屋を眺め直し、ブランがつぶやく。

湯ぐゲルンには大小さまざまな様式の部屋があるのだが、今回彼ら
が利用する部屋は、東方式の落ち着いた雰囲気のものだった。

床は、薄い緑色の草を乾かし細かく編み込んだようなものが一面に
敷かれ、光沢のある茶色い柱や壁に掛かった縦長の紙に墨で書かれ
た異国の文字を見ていると、はるか東方にまで旅に来たような気分
になってしまう。

「へえ……これは何て読むんだろう。きっと東方の賢人の言葉とか
なんだろうな」

ブランが「一網打尽」と大きく書かれた掛け軸を眺めているその時
だった。

コンコンコン

部屋の扉が小さな音でノックされた。

扉を叩く音は、かなり控えめだったので、もし部屋にガンダルガなどがいて、大声で笑っていようものなら、確実に聞き逃されていただろう。

ガチャ

「あ、君は……」

「こんばんは！！おくつろぎの所、すみません」

部屋の入口に立ち、ぺこりと頭を下げたのは、ガロン村長の娘、ミミであった。

「何かご用ですか？？」

ブランが笑顔でたずねると、ミミは律儀にもう一度頭を下げながら、おずおずと用件を話し始めた。

「あ、あの……先ほどは、ご迷惑をおかけしてしまい、本当に申し訳ありませんでした」

「ああ、それなら気にしなくて大丈夫ですよ。皆さん神経の太い方たちですから」

ブラン自身にしても、魔物と化した青年や闇魔術師につくられた不

死の怪物などに比べれば、村人同士の小競り合いなどにはあまり驚かなくなっていたのは確かだった。

「いえ！せつかく温泉に遊びにいらしたのに、イヤな気持ちにさせてしまうなんて……もてなす側の人間として失格です」

「はあ」

ミミは、いかにもおとなしそうな少女であったが、どうやら観光地の首長の娘として、小さな自覚が芽生え始めているようだ。

「本当なら、おじいちゃんがお詫びに来るつもりだったんですが、家に帰ってから体の具合が悪くなってしまっ」

「そっか、それは大変だったね」

ブランとしては、仕事柄、ニコライ老の体の事や息子のガロンとの関係について気になるところだったので、思い切って、目の前の少女にたずねてみることにした。

「えっと…ミミちゃん。君のお父さんとおじいちゃんは、仲があまり良くないのかい??」

それを聞くと、ミミは一瞬表情をかたくしたが、すぐに話す決心がついたようで、ブランの目をじっと見つめたまま口を開いた。

「お母さんが死んでから、お父さん…変わってしまったんです」

部屋に入り、ブランの向かいのテーブルに座ったミミは、ポツリ、ポツリとニーゲルンと彼女の家族が抱えている問題について話し始めた。

窓際では、相変わらずフェルナンドが空気のようにたたずんでいる。おとなしい性質である上に、何を言うにもまだ子どもである彼女の話は、筋道がしっかりとしなない部分もあったが、ブランは辛抱強くその話に耳を傾けた。

元々ニーゲルンには、村議会ができるはるか以前から「長老会」と呼ばれる政治的な組織があったようだ。

土地の長老達により構成されるその会の意向には、村議会といえども従わなければならないという暗黙の了解ができていたという。

長老達の頭であるニコライの家に婿入りしたガロンは、その才を買われ、ニーゲルンの村長を任されるまでになった。

その頃は、長老会と村議会の関係もすこぶる良好で、様々な観光事業が企画され、街をにぎわせていた。

しかし、2年前にミミの母親……つまりはニコライの娘でありガロンの妻でもあった女性が事故死して以来、ニーゲルンを代表する二人の男の関係は、急速に悪化していった。

ガロンは、村議会を自分に従う者たちで固めると、長老会に対立する姿勢を見せ始め、歓楽街の拡張や巨大カジノの建設、収入の少ない史跡の廃棄など、長老会としては許し難い計画を次々と押しすすめていったようだ。

ガロンの裏切りに激怒したニコライ老だったが、間もなく体調を崩し、ミミの助けなしでは、満足に外も歩けなくなるとともに、頭を失った長老会は力をなくしていった。

父親は家に帰って来なくなり、彼への憤怒と亡き娘への悲しみを交互に繰り返す祖父を看護する毎日は、ミミにとって相当辛いものだったようだ。

「だけど、やっぱりお父さんのやり方はおかしいと思うんです」

この発言をする時だけ、ミミの口調は、きっぱりとしたものになった。

「うん…確かにそうだね」

先進的な国家であるフィンに暮らすブランにしてみれば、公的な議会の他に「長老会」などという古くさい組織が幅をきかせていた事自体に疑問を感じないわけではない。

しかし、それを差し引いても、ガロン村長のやり方は、あまりに独裁的であるように感じられた。

「それに……あの森とほこらは、私にとって大切な……場所だから……」

幼い頃にミミは、毎日のように「ロジ・マジのほこら」へ母と出かけ、森の中で遊んでいたという。

おそらく彼女にとっては、亡き母との思い出が残る場所なのだろう。

「大切な場所」という言葉を聞き、ブランはふと、自分が小さい頃

に過ごした施設の事を思い出していた。

暖かい日差しの中で走り回る、まだ幼い自分と三人の子ども達……

「ブランさん??」

ミミに声をかけられ、追憶の世界から呼び戻されたブランは、思わず目をしばたかせた。

「う、うん」

「ブランさんに話せたおかげで決心がつきました。……私、明日ほこらに行つて……父にもう一度、工事をやめてもらえるよう……説得してみます」

「うん」

ブランは思わず、苦い顔になってしまった。

ミミの気持ちはわかるが、彼女を一人である場所に行かせるのは、危険な気がしてならなかった。

無論、実の親子であるし、ミミに何らかの危害が加えられることはないと思うのだが、夕方に会ったガロン村長やその取り巻き達からうけた「嫌な感じ」が、彼をどうしても不安にさせていた。

アリッサのように、魔力によって邪悪な存在を感知することはできないが、今回、彼が感じたそれは、いわば「福祉職の直感」から来るもので、裏づけこそなかったが、妙に自分の中で説得力があった。

「よし」

ブランは、ひとつ頷くと、ミミの方に顔をあげた。

「ミミちゃん、明日は僕も一緒についていくよ」

「ええっ!?!」

「おじいさんに無理をさせるのはよくないからね。だからって、一人で行くのは不安でしょ??」

「そんな!?!……これ以上迷惑をかけるわけにはいきません。皆さんには温泉を楽しんでもらわないと」

それを聞いたブランの口から、自分でも思いがけない言葉が出てきた。

「それなら大丈夫。温泉よりも、もめ事の方が大好きな人がいるから」

「え？」

「その人も一緒に連れて行くよ。きつと強い味方になってくれるんじゃないかな?? まあ、かなり怖い賭けになっちゃうかもしれないけど」

「ええっ??」

ブランの思いつきは、いわば火種のある所に火薬を持っていくようなものなのだが、何故か彼には、今回それが必要であるように思えていた。

「さ、今日は遅いからもう帰りな。ああ、明日の工事はどれくらいに始まるの??」

「はい、えっと、九時には始まると…」

「わかった、じゃあ八時半に森の入り口で待ち合わせしよう」

「あの、でもー」

ポロン…

尚もミミが、食い下がるうとした時、フェルナンドの豎琴がまるで少女を安心させるかのように鳴らされた。

「大丈夫、お行きなさい」

久しぶりに口を開いたフェルナンドの声には、やはり朗々とした美しさがあつた。

老詩人に笑顔で諭されたミミは、一瞬、どうしたものかと迷った様子を見せたが、「それじゃあ……よろしくお願いします」と頭を下げると、337号室を後にした。

「あ、何かありがとうございます」

ブランに礼を言われたフェルナンドは、例によって返事代わりに豎琴をかき鳴らした。

「……そろそろ食事に行きましょうか。この時間に来ないってことは、ガンダルガさん達は、直接415号室に向かったんでしょう」

老詩人に声をかけたブランは、不意に先ほどのミミとの約束が、明日のネルガとの集合時間に丸かぶりであることに気づいたが、そのことで悩むのはひとまず止め、夕食へ向かうことにした。

「ああ、ここにいたんですか」

ブランに声をかけられ、ソファーにふんぞり返った老女が、不機嫌そうにこちらを振り返る。

「なんだいブラン、そんな息を切らせて。みつともないねえ」

「ちよっ！！そんな言い方はないでしょう。アリツサさんが来ないから食事が始められないんですよ」

…フェルナンドと共に415号室に行ったブランだったが、部屋にはすっかり食事の準備が整えられており、アリツサを除く全員が集まっていた。浴衣姿ですっかりくつろいだ様子のガンダルガが、さつそくとばかりに声をかけてきた。

「小僧っ！！アリババはまだ来んのか！！お前が担当なんだから、しっかり見張つとかんか！！」

「いや、ちよつと待ってくださいよ。僕は下の部屋で、皆さんがとつちらかした荷物を片づけてたんですよ」

「それはそれ、これはこれじゃ」

「そんな無茶苦茶な…」

「そして、わしはわしなんじゃ！！わははははは」

ガンダルガの馬鹿笑いに、ブランは、抗議の声をあげる元気すらなくしていた。

「多分、一階のロビーが売店にいるんじゃないかね」

助け舟を出してくれたのは、パート介護士のメディナだ。

「ロビーですか、ありがとございますー!」

「あたしが呼びに行こうか??」

「大丈夫、いつてきますー!」

…そんなやりとりがあり、ようやくブランは、ロビーの窓際に座り、地元の観光案内が書かれた冊子を読んでいるアリッサを発見したのであった。

「わかったわかった。すぐに行くよ」

アリッサはつるさそうに手を振ると、重たい腰をあげかけた。

「ちょっとストップ!」

「あ?」

「あのですね……上に行く前をお願いしたいことがあるんですが……」

「……何だい?」

立ち上がりかけた姿勢のまま、アリッサが怪訝そうな表情を浮かべる。

「夕飯に遅れちまうよ、いいのかい?？」

「……はい」

それを聞くと、アリッサはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、どかりとソファアに腰かけた。

「何だっつてんだ、言ってみな」

「ほう」

明日の朝、ミミに同行し「ロジ・マジのほこら」へ一緒に行つて欲しいという頼みを聞いたアリッサは、満足げな表情になった。

「そいつはなかなか面白いねえ」

仕事の依頼以外で、人からものを頼まれることを限りなく嫌うアリッサだったが、今回の反応はいつもと違っていた。

「あたしも、あの場所は色々と気になつてたからちよつとよかつた。ブラン、あなたにしちゃ出来な頼みじゃないか」

「はあ……」

微妙な誉められ方をしたブランだったが、とりあえず力強い味方を得られ、いくぶん安心できたのは確かだった。

「だが、明日の予定はどうするんだい??勝手な行動は、規則違反になるんじゃないのかい??」

普段、さんざん施設の規則を破っているアリッサが、自分の事を棚にあげ、ニヤニヤと問いかけてきた。

「それは……夜のミーティングの時に何とか話をつけてみます」

「ほう、下っぱのあんたが何と言って説きふせるつもりなんだい?」

「それは…えと…」

「例えばあたしが、もう一回あのほこらに行きたいとタダをこねてるとか??」

「あ!!それいいですね!!」

「なるほど。あたしはうまくダシに使われるってわけか」

「いえ、そんなつもりでは…でも、日頃アリッサさんがワガママなおかげで、それなら説得力が…いてっ!!」

口を滑らしたブランに容赦なくスリッパ魔法が飛ぶ。

「さて、そろそろメシにするかね」

立ち上がって、スタスタと階段を目指すアリッサの後ろを、赤くなつた額をおさえながら、ブランはヨタヨタと追いかけていった。

カポーン

「ふう……」

お湯につかりながら、ブランは深いため息をついた。

彼が今いるのは、湯々ゲルンの地下にある薬湯「癒やし湯」である。

湯々ゲルンの一階の一部と地下には、温泉施設の名に恥じない様々な風呂が用意されている。

天然温泉を利用した大浴場に露天風呂、体の症状に応じた何種類もの薬湯、泡の出る風呂に蒸気風呂、季節の花を浮かべた風呂など、とても一回では入りきれない種類の多さだ。

時刻はもう深夜を回っている。

豪華な夕食と、それに続く男性部屋でのどんちゃん騒ぎの飲み会、さらには就寝直前のスタッフミーティングと、ブランには怒涛の夜だったが、それもようやく一段落ついたのだった。

フロント、メディナと行ったスタッフミーティングで、ブランは、アリッサが壊される前にもう一度だけほこらを見に行きたがっている事を伝え、明日の午前中に別行動で「ロジ・マジのほこら」に彼

女を連れていけないかと提案してみた。

「フリント、明日午前の予定って何だっけ？」

「えっと……湯ヶゲルン近くの建物で陶芸体験っすね」

「だったら、構わないんじゃないの?? ネルガさんにはあたしから伝えとけば……ねえ？」

「そっすね」

とまあ、あっさりと提案は受け入れられ、ブランは胸をなでおろしたのだった。

カポーン

鮮やかな緑色のお湯からは、絶え間なく湯気が上がっている。

「明日は、どうなるんだろうっな」

温泉の薬効を体を感じながら、ブランは、誰に話すこともなくつぶやいた。

『ほんとにな』

「わっ!!--」

突然顔の下から声がしたため、ブランは悲鳴をあげざるをえなかった。

「ちよっ、ブンさん！いきなり話しかけないでくださいよ」

ブランは、首にかかった銀のドクロに向けて必死でささやきかける。

『ここなら、大丈夫』

ブンさんこと、ブン・ラツハの言うとおり、確かにこの薬湯にはブラン以外誰も入っていないようだ。

たとえ人が入ってきたとしても、もうもうと大量の湯気があがっているので、ブランとブン・ラツハの会話がすぐに怪しまれる心配はないだろう。

「すみません。うっかりはずすのを忘れてました。サビたりしません??」

『銀に見えるのは、アリツサの魔法。本当は、違っ』

「ああ、そうでしたね」

『本当は、ただの、頭蓋骨』

「……それはそれで、ダシとか出てきそうでちよっといやだな……」

『ん?』

「あー!!いえいえ、なんでもないです」

自分の首から下がったものと会話する機会など今までなかったので、どうにもしつくりと会話が進まないブランであったが、ブン・ラッハは構わず話を先に進めてきた。

『あのほこら、気になる』

「え？それって今日の午後に行った…」

『ああ。あそこだけ、精霊の力、乱れてる』

呪術師であるブン・ラッハも、やはりあの場所には何らかのひっかかりを感じていたようだ。

「それって、アリッサさんには話したんですか??」

『ああ、食事の時、念を使って、話し合った』

「そっか、どつりでアリッサさん、難しい顔して食べてると思っただけ……あれ？ってかそんな便利な魔法があるなら、僕との会話も声に出さないうで伝えてくださいよ」

『魔力ない者、聞き取れない』

「なるほど……。それで、アリッサさんと話して、何かいい結論は出たんですか??」

『いや、わからない、ままだ』

「ふうん……」

明日の朝、魔力を持つ者達を悩ませるその場所に行くことになって
いるブランだったが、ミミの悩み事については共感できても、アリ
ツサヤブン・ラツハの懸念については、いまいちピンとこないの
であつた。

翌日は、曇一つない快晴だった。

朝早く「湯ヶゲルン」を出たブランとアリッサは、馬車を使わず目的地を目指した。

「あ…おはようございます…！」

森の入口に着くと、そこにはすでにミミが待っていた。

「あの、今日はわざわざありがとうございます…」

ミミは、初めて話すアリッサに深々と頭を下げたが、アリッサの返事は実にそっけなかった。

「こっちの好きでやってるこつた。さ、行くよ」

そう言うなり、砂利道をザクザクと進み始める老魔法使いの後ろを、ブランとミミが横ならびに追いかける。

「ごめんね、ミミちゃん。あんな言い方で」

「いえ、そんな…！」

「あの、口と態度は思いつきり悪いけど、きつとミミちゃんの力になってくれると思…わあああ…！！！」

前に行くアリッサが、こちらを振り返りもせず指を鳴らした途端、ブランの足をツタがからめ取り、彼は前のめりに転んでしまった。

「だ、大丈夫ですか！？あ、鼻血が…」

「平気平気、お約束だから。あれ？」

鼻を押さえながらミミを見上げたブランは、彼女の首から下げられた「あるもの」に目をやった。

「ミミちゃん。その箱って…」

それは、ひのきでできた六面体の小箱で、表面には奇妙な文様が刻まれていた。

「あ……これはお母さんからもらった物なんです」

ミミは、うれしような悲しような表情で、胸元の箱をそつとなでた。

「ニーゲルンの長老をつとめる、うちの家系に代々伝えられている守り箱で、母の前はおばあちゃんが持っていたんですよ」

「へえ、そうなんだ」

「あの……ブランさんの首かざりには、何か由来があるんですか？」

「えっ!？」

いきなりの答えづらい質問に、ブランは動揺を隠せなかった。

「えっと…南方のもので…」

何と説明しようかとブランが口をもごもごさせていると、いつの間に戻ってきたのか、アリッサがこちらを不機嫌そうににらんで口を開いた。

「遅い」

「あ、すみません！…ってアリッサさんが転ばしたんじゃないですか」

アリッサは、ブランの不平を無視して、今度はミミの方へ向き直った。

「おい、娘」

「は、はいっ！…」

「今から何があっても、その箱だけは手離すんじゃないよ」

「え？」

「わかったね」

「は、はい！！わかりました」

言うだけ言うと、アリッサは再びスタスタと歩き始めたため、残りの二人もあわててあとを追いかけた。

やがて、森がひらけ、目の前に切り株だらけの土地が広がってきた

が、そこにはすでに「ロジ・ヌジのほじら」はなかった。

「ああ……」

ミミが悲しそうな声を上げる。

ほこらの屋根と外壁は、すでに屈強な男たちによって打ち壊されていた。

ロジ・マジ像には、その緑色の台座ごと縄がかけられ、今まさに引き倒されようとしていた。

「よし！！そのままだ」

「慎重にやれよ！！」

荒々しい声が飛び交う現場から少し離れた場所では、二人の傭兵を従えたガロン村長が、満足そうにその作業を見ていた。

「お父さん！！」

たまらなくなつた様子でミミが、父親の方へかけ出す。

「お父さん！！やっぱりこんなこと……」

ズズーン

その時、大きな音とともにロジ・マジ像と台座が地面の上に倒れた。

「おおっ！？なんだこりゃ」

「台座が…」

現場の男達から驚きの声があがる。

それまできれいな緑色をしていた石の台座は、倒された途端に灰色に変わり、そのまま一気に崩れ落ち、灰の山になってしまった。

「アリッサさんこれは…」

「まだまだ、こんなもんじゃ終わんないよ」

ブランの問いにアリッサが険しい顔で答える。

これから何が起るのか見極めようとしているようだ。

ゴゴゴゴゴゴゴ！！！

「うわぁー！ー！」

「じ、地震だぁあー！」

突如、耳をつんざくような地鳴りとともに地面が激しく揺れはじめた。

「じっ、これはー！？」

尻もちをついたガロン村長が、呆然と前方を見つめる。

「ゴゴン！！！！」

「うわぁー！！」

「穴だ！！急に穴が！！」

「助けてくれえー！！」

ほこらのあった場所を中心に地面が崩れ、民家が一軒すっぽり入るくらいの穴ができたため、作業をしていた男達の半数近くがそこに吸い込まれてしまった。

「……………止まったか」

アリッサのつぶやき通り、穴ができると同時に地震はピタッとおさまった。

「おいっ！！おおーい！！」

「うわっ！！この穴、底が見えないぞ」

「おいっ！！聞こえるなら返事してくれ！！」

男達の同僚への呼びかけもむなしく、穴の中からは何のいらえもない。

「いかな…」

アリッサはそう小さくつぶやいた後、穴の周辺にいる男達に驚くほど大きな声で呼びかけた。

「お前たち、そこは危険だよ！！とっとと離れてこっちに来るんだ！！！」

アリッサの呼びかけに、こちらを振り向いた彼らだったが、声の主である老女を見ると、どうしたものかと顔を見合わせてしまった。

その時、低い風のうなりのような音が穴の中から聞こえはじめた！！

ヒュウウ……

「なんだ?? 穴から風が」

「うわっ、寒いつ!!」

ロジ・マジのほこらがあった場所にできた穴から、冷たい風が吹き上がりはじめた。

風は強くなったかと思うと、次の瞬間には一気に弱まり、なんとも落ち着かない吹き方であった。

「お前たち!! 早くこっちへ!!……ええい、仕方ない!!」

再び、穴の周辺の男達に声をかけたアリッサだったが、もはや効果がないと悟るやいなや、すばやく手を動かし印を切りながら、何やら複雑な呪句を唱え始めた。

「ちよつと君、彼女はいつたい何を……」

「しっ!」

アリッサの様子に気づいたガロンの言葉をブランは遮った。

「今、魔法を使うために集中しています。大きな声を出さない方がいいです」

「魔法！？それじゃ彼女は魔術師なのか」

「そうです。とにかく静かにしててください」

普段アリッサが魔法を使う時は、指を軽く鳴らすだけである。

今のように複雑な手順を行うのは、彼女が本気の時：つまりは、相
当な危険が迫っている時だといえた。

「おっ??？」

「風が止んだぞ……」

穴の中から吹いていた風が鳴り止むと同時に、アリッサの術法が完
成していた。

ヴヴヴヴヴヴ

「なっ、なんだ!?!」

ガロン村長がうわずった声を上げる。

彼の周囲は、ドーム状に鈍く光っていた。

それはアリッサおなじみの結界であり、ガロンだけでなく、彼の傭
兵やミニ、比較的こちら近くにいた労働者達、アリッサ自身とブラ
ンの周りにも、無数の光るドームが出現した。

「アリッサさん、大丈夫なんですか??一度にこんな結界を張って」

以前の経験から、ブランはアリッサが無理をしているのではないかと不安になった。

「まあ、楽じゃないのは確かだね」

額に脂汗を浮かべながらアリッサがそうつぶやいた時だった！！

ゴオオオオオツ！！！！

穴の中から一気に冷気が吹き上がった！！

「こ、これは…」

吹き上がる冷気とも吹雪ともいえるものの勢いに、思わず目を閉じたブランだったが、再び目を開いた時、その口からは驚愕の声がもれた。

「ひいっ」

近くでは、腰を地面につけたままのガロン村長が、悲鳴をあげている。

ほんの一瞬で、辺りの景色はすっかり一変していた。

周辺の森と切り株と地面は、雪と氷で覆われており、穴の周辺で冷気をまともに浴びた男たちは、もの言わぬ氷の固まりに変わりはてていた。

アリッサの張った結界の中だけは、かろうじてその洗礼を免れたように、まるで、まるい形の茶色い地面が、白くなった大地の中にポツポツと点在している。

『フフフフフ……』

冷たく不気味な笑い声があたりに響き渡った。

穴の上…すなわち中空に、冷気の乱気流が渦巻いており、その中心には、女性の形をした氷の彫像が浮かんでいた。

『人間共よ、ごくろうであった』

しかし、それはただの彫像ではなかった。

冷気に包まれているため、その全貌をはっきりと見てとることはできなかったが、氷でできていながら、その髪や手足は、明らかになめらかな動きをみせている。

『ほう、ずいぶんと変わったものだ』

言葉の調子から、ブランはその怪異が、あたりの景観について感想を述べているのだと感じた。

「そりゃ三百年も経ちゃ、変わって当然だろうが」

ブランの隣でアリッサが皮肉たつぷりにつぶやく。

印を結び、おそらくは全魔力を駆使し複数の結界を維持しながらも、皮肉だけは普段通りに言つてのけるのが、いかにも彼女らしいと言えるだろう。

「三百年！？そ、それじゃまるで……」

アリッサのつぶやきを聞いたミミの口から、驚きの声があがる。

そして、少女が予感した言葉を老女ははっきりと口にしてみせた。

「あいつはヴィシユメイガ……雪妖ヴィシユメイガだよ」

「そ、そんな!?!…まさか…」

ガタガタとあごをふるわせながら、ガロンが恐怖に満ちた声を上げる。

『その魔女』

ガロンや労働者たちの悲鳴には全く反応を見せぬまま、雪妖はアリツサの方に顔を向けた。

声とも思念ともつかぬ彼女の言葉は、ブランの耳と頭の中でキンキンと不快に鳴り響いた。

『ロジ・マジはどこにいる?』

「さあね、とつにくたばっちまったんじゃないのかねえ」

『……………』

「それから、あたしは魔女じゃなくて魔法使いだ。そこんとこ間違えないようにね」

古代の妖魔が相手でも、自分のこだわりにはしっかりと文句をつけるアリツサに、ブランは半ばあきれ半ば感心してしまう。

『……………まあよい』

ヴィシユメイガは、その話題に興味を失ったかのようにすこし高い位置に浮かび上がった。

『これより北の地は、すべて我が版図となる。人間どもよ、凍てつく恐怖にせいぜい泣きわめくがよい』

「ド、ドース、ダイン！！何とか奴を」

「やめときな！！」

傭兵達にヴィシユメイガへの攻撃を命じたようにしたガロンを、アリツサが鋭く制する。

「ケンカは相手を見てから売るもんだよ。とつとあの世に行きたいってんなら話は別だが」

しかし、二人の傭兵達は、アリツサの忠告を聞くまでもなく、すでに戦意を完全に喪失しており、棒立ちになったまま膝を震わせていた。

『まずは忌まわしきこの地に、制裁を加えねばならぬか…』

雪妖がニヤリと不敵な笑みを浮かべた直後、うねうねとさまよっていた彼女の髪は、一瞬にしてハリネズミの様に鋭く尖り膨れ上がった。

「さて、どう出てくる気だい」

ブランの隣でアリツサが、いまいましてげにつぶやく。

『さあ、楽しんでくるがよい!!』

「ああっ!!」

その時、ヴィシユメイガの髪は、無数の毛針となり、ありとあらゆる方角へと鋭く照射された!!

「……あれ？」

「……何ともないぞ」

ヴィシユメイガからの攻撃にひるんだ一同であったが、それはどうやら皆の感じた「毛針ですべてを刺しつらぬく」ものではなかったようだ。

「結界が攻撃を防いだんですか??」

一同の中では比較的冷静なブランが、アリッサに問う。

「いいや違う。まあ見てな」

『グオオオオオ!!!』

「ええっ!?!」

地面に突き立った無数の毛針は、ヴィシユメイガと同じ氷でできた狼へと次々に変身していったのだ!!!

『グオオオオオ!!!』

氷狼たちは、獰猛な唸り声を上げ、皆の結界のまわりをころつきはじめた。

「どうやら奴は、今の攻撃で、この里じゅうに氷狼をばらまいたよ

うだね」

「なっ……なんだと!?!」

ガロンが先ほどまでとは違った種類の悲鳴をあげる。

「何てことを!?!今この里にどれだけの観光客がいると思ってるんだ!?!」

商魂のたくましさが恐怖心に勝ったようで、ガロンは上空にいる妖魔に大声で文句を言い放った。

『……人間どもよ、せいぜいあがくがよいぞ』

もとの髪に戻ったヴィシユメイガは、ガロンの抗議を無視したまま、上空へと一気に飛んで行き、そのまま見えなくなってしまった。

「アリッサさん、これは……」

困惑顔のブランの問いに、老魔法使いは憎々しげな表情で上空を見上げた。

「おそらく奴は、大規模な天候を操る術を使っつもりだろう」

「天候を?」

「ああ。もつすぐこの里は、かつてない豪雪に見まわれるだろうね」

「ええっ!?!?」

「ま、今のあたしらにゃ、目の前の問題を片づける方が先だがね」
アリッサの言うとおり、彼らの周囲には、十数匹の氷狼たちがうろ
ついている。

不安と恐怖に満ちた人間達のはるか上空では、すでに空がじわり、
じわりと曇りはじめていた。

「ノルン様」

薄暗い部屋の中央に、黒いフードとマントに包まれ、肩ほどの高さの杖を手にした魔道士の上半身が浮かび上がる。

無論それは実体ではなく、おのが主への報告をするため、魔道の力で現れた映像であった。

「やはり……雪妖だったろ」

一段高い、様々な宝玉がちりばめられた座所に腰をおろしている美しい顔立ちの青年が、映像の魔道士に向かって話しかける。

肩までたらしめた黒髪に、深い紫色のローブをはおったその人こそ、魔道王国ドルククロスの若き大公、ノルン・セタ・フォビュアである。

「はっ……ノルン様が北方ロクスにて感知された高エネルギー体の正体は、雪妖ヴィシユメイガに相違ありませんでした」

映像の魔道士は、フードを深くかぶったままボソボソと報告を続ける。

「ヴィシユメイガは現在、ニーゲルン上空にて大規模な術法を展開しておりますこれが成功しますとー」

「哀れニーゲルンは、一夜にしてすべて雪の下に埋もれてしまっわけか」

「はっ」

「……ご苦労だったね。引き続き監視を続けるように」

「はっ」

魔道士の映像が消えるのと入れ替わりに、別の映像がノルンの前に現れる。

「ノルン様」

「やあ、ギリウス」

刈り上げた短い白髪にしわ深い額、黒眼鏡が印象的なその老人は、大公付きの筆頭魔道士、ギリウスである。

「すでにお聞きになっていると思いますが……」

「ああ、ニーゲルンの件だろ」

「さよう。北方を統括する我らとしては、何らかの対策を打たねばなりませんまい」

「そつだねえ……」

ノルンは目を閉じたまま、どうしたものか考える様子だったが、不意にいたずらっぽい笑みを浮かべてみせた。

「やはり、私が直接出向くわけにはいかないんだろうね」

「はい。ノルン様ご自身が一番よくわかりと思われませんが、『現世不介入』の原則がございますゆえ」

ドルクロスにおいて、最高統治者である魔道王グリムス及び三人の魔道大公は、その神に近い魔力をいたずらにふるうことがないよう、現世への直接干渉が、国法によってかたく禁じられているのだ。

黒眼鏡のため、表情が読みとりづらいギリウスだが、軽く咳払いを
すると、ボソボソと言葉をついだ。

「まあ確かに、ノルン様が行かれれば、雪妖ごときたやすく滅する
事もできましようが…」

「そうだろ」

「しかし、そのような事をすれば、他の二大公から非難の嵐が来る
事は確かでしょう」

「スヴェン老もフィングル老も頑固だからね」

「まあ、それは…」

「おまけに恐ろしく地獄耳ときた…おお、塔の結界を強化しといた
方がいいかな」

「これは…おたわむれを」

「どうやらノルンは、この老魔道士と話す時には幾分くだけた口調に
なるようだ。」

「さて、本題に戻ろう。ヒースはこっちに戻ってるね」

「はい」

「それでは、ヒースを団長として、その下に火炎魔法が得意な魔道士15名をつけ、ニーゲルンに飛ぶよう命じてくれ。人選はまかせよ」

「かしこまりました」

「ニーゲルン近郊にて待機し、雪妖がニーゲルンから移動を開始したら人家の少ないポイントを見つけて、そこで滅するように」

「ははっ」

「失敗した時は速やかに撤退すること。もし、そうなたらグリムス陛下にお頼みして、おかかえの火炎魔道団を派遣してもらおうしかないだろうね」

「さようですな」

「それに」

「はい？」

「いや……何でもない。下がっていいよ」

「かしこまりました」

ギリウスの映像が消えると、室内はより薄暗さを増した。

ノルンは小さくため息をつくとき、先ほどギリウスに言いかけた考えについて思いをめぐらした。

彼の魔道士の直感は、今回の事件が思いもよらぬ形で解決するであろう事を告げていた。

有能な予知者を呼んだり、自ら先見の術を行うことで、その詳細を知ることもできたが、それらをする気にはなれなかった。

「まあ、何が起こるかとかと拝見させてもらうでしょう」

まるで、彼のよく知る皮肉屋の老魔法使いのような言い回しだと、ノルンは思わず苦笑をもらした。

ジジジ

「ノルン様」

その時、別の魔道士からの映像が浮かび上がり、ノルンは一瞬の追憶を終え、公務へと引き戻されたのだった。

一方のニーゲルン…

氷狼たちは、アリッサの結界に触れることができないようで、うろと人間達の様子を伺いながら歩きまわっている。

「うわああ！！助けてくれえ！！」

緊張に耐えられなかったのだろう。悲鳴を上げながら労働者の一人が、結界を飛び出し、街の方へと狂ったように走り出した。

「ぎゃあああああ！！……ひいひい……たす……」

あわれな男は、たちまち氷狼たちに飛びかかれ、体じゅうに鋭い氷の牙と爪を食い込まされ、一瞬で絶命した。

「いやああ！！」

氷狼には、殺意はあれども通常の狼のように獲物の肉を食す習慣はないようで、赤く染まったボロ雑巾のごとくなりはてた男の姿は、ミミのような少女が見るにはあまりにも酷であった。

このままでは、パニックに陥った皆が結界を飛び出すのは時間の問題であり、たとえそうならなくとも、そう長くかからずアリッサの魔力は底をついてしまうだろう。

ブランがそのような懸念におちいった時―

「みんな聞きなっ!!」

再びアリッサがあらん限りの声で一同に呼びかける。

「今から結界を解除する!!一瞬やつの気を引くから、全力で逃げるんだ!!」

気をのまれた様子の一団だったが、そんな事にはお構いなしに、アリッサはさっそく行動にうつった。

「5……4……3……2……1……今だ!!」

アリッサが結界の印を解くと光のドームがいつせいに消え失せる。すかさず彼女は、自由になった両手の指を同時にパチンと鳴らした。

『グギヤアア!!!!』

たちまちアリッサ達に一番近い所にいた氷狼の足元から、炎の渦が巻き起こり、あっという間に獲物を包み込んだ!!

他の氷狼達も激しく炎に反応し、警戒しながら体をそちらへ向ける。

「今だっ!!逃げるんだ!!」

アリッサの絶叫を聞き、炎をポカンと見ていたガロンや男達は、ハッと我に帰ると四方八方へと全力疾走をしはじめた。

「ちよっ、ブラン!!何をするんだい!?!」

ブランは無言を言わずアリッサをおぶると、ミミの手をとり、元

きた森の方へと駆け出した！！

「ちょっと、下におろしな！！年寄り扱いするんじゃないよ！！」

「ダメです」

背中の老女が発する怒りの声に耳を貸すことなく、ブランは氷の森の中を、来た道から外れないようよう気をつけながら走り続けた。

アリッサがかなり無理を重ねた状態なのは確かなので、何と言われようと、これ以上の負担を彼女にかけるつもりはなかった。

「きゃあああ！！」

ブランの隣を走るミミが後ろを振り返り悲鳴をあげる。

氷狼が一匹、うなり声を上げながら彼らの後を追いかけてきたのだ。その距離はぐんぐん縮まっていく。氷狼の口元が赤く染まっているのが、すでに犠牲者が出たであろう事をものがたっていた。

「ブラン！！あたしを下ろすんだ。一発ぶちこんでやるから」

「でも……」

ブランが躊躇している間に、氷の魔物は、三人のすぐ後ろに迫ってきた。

「いやっ……」

氷狼がミミめがけて飛びかかるうとしたその時、両者の間に小さな影が出現した。

「あっ！！あれは」

それは、赤い体に炎をまとったトカゲの様な生き物だった。

赤いトカゲは、口を開くやいなや、激しい炎を氷狼にむけて吐き出した。

『グオオン！！！』

突然の不意打ちに、氷狼は逃れるすべもなく炎に巻きこまれ、あっけなく溶け去ってしまった。

「ブンさん！！」

ブランが、首から下がったドクロに安堵の声をかける。

『ああ、まかせろ』

銀色のドクロの落ちくぼんだ瞳が明滅する。

「えっ…今のは??」

「いいから！！とにかく逃げるよ！！」

新たな怪異におののくミミだったが、いちいち説明している時間はなかった。

「さあ……」

ブランは再びミミの手をつかむと、森の出口まで一気に走り抜けた。

「あ……」

そこで、ブランは思わず足を止めた。

氷の森を疾走している時には気づかなかったが、ニーゲルンの街にはしんと雪が降り始めていた。

ブラン達は、ひとまず湯ヶゲルンを目指し、雪の降る温泉街をひた走った。

何より他の入居者や職員の安否が気になるところだったし、もし全員が無事であれば、今後の行動を決めねばならなかった。

街にはすでに雪が積もりはじめ、徐々に白さが増す景色のなかで、道路脇や店の軒先には、逃げ遅れ氷狼の犠牲になったのであろう、赤い塊と化した「かつては人であったもの」が点在していた。

しかし、それらもそう長くないうちに、白い世界の中に飲み込まれてしまうだろう。

つい数刻前までは、活気にあふれていたであろうニーゲルンのメイNSTリートは、文字通り人っ子ひとりいないゴーストタウンへと変わり果てていた。

おそらく、あの短時間で里から脱出する余裕などはなかったであろうから、住民達は固く閉ざした扉の中で息をひそめているのだろう。

ブラン達が、湯ヶゲルンの駐車場につくまで、二度にわたる氷狼の襲撃があったが、幸いどちらも相手が単体だったため、ブン・ラツハの火の精霊の力で、どうにか撃退することができた。

「ああっ！！」

しかし、ようやく駐車場についた一行から最初に出た声は、ミミの

悲鳴であつた。

湯くゲルンの駐車場には、ゆうに10匹を超える氷狼達がうろついていたのだ!!

「どうしましょう」

思わずブランが問いかけると、アリッサは彼の肩からひょいと降り、不敵な微笑みを浮かべた。

「仕方ない、正面突破するしかないだろ」

駐車場の氷狼達は、すでにアリッサ達に気づいており、じりじりと半円を小さくするように、獲物との距離をつめていた。

「あそこだ」

アリッサがあごで示した方向は、なるほど氷狼達の布陣が、もっとも手薄であった。

彼女は、ブランとミミに手早く指示をくださった。

「あんたたちは、合図をしたら、あそこを通過して入口まで全力で走るんだ。ブン・ラッハ」

『ああ』

「あたしは右、あんたは左だ」

『わかった』

やりとりが終わるやいなや、アリッサは印を切りはじめる。

『グオオツ!!』

たちまち、先ほどアリッサが示したルートの手先に炎の渦が巻き起こり、狼達が悲鳴を上げて飛びのいた。

『ワオオツ!!』

それとほぼ同時に、左手には例のトカゲが現れ、猛烈な炎を吹き始めた。

「今だよ!!」

アリッサの合図で、三人は、炎の壁に挟まれた道を必死で駆け抜けた!!

しかし、入口まであと少しというところで、両側の炎は完全に消えてしまい、勢いを取り戻した氷狼達が、後ろから猛追をかけてきた!!

「ちっ!!」

ブランの隣をかけるアリッサが青白い顔で舌打ちをする。もはや、魔力も体力も限界なのだろう。

氷狼の獰猛な声が、三人の耳に不気味なくらい近く聞こえたその時

ヒュッ

何かがブランの目の前を飛んで行った。

ドカアアン!!

思わずブランが振り向くと、そこにはバラバラになった木の樽と、

おそらくはそれをぶち当てられ、転倒した氷狼が横たわっていた。

「ほれ小僧！！さっさと走らんかあ！！」

なじみ深い声と共に次の樽が飛び、二番手に来ていた氷狼にこれまた正確にぶち当たった。

「ああっ！！ガンダルガさん！！」

いつの間に来たのか、湯々ゲルンの入口には、肩に樽を抱えたガンダルガが、ポツテヌとともに立っていた。

「建物の入口に結界が張ってある、今のうち早く中へ！！」

ポツテヌが、こちらへ呼びかける。

氷狼達は、次に飛んで来るであろう樽を警戒し、足を止めていた。

ブランたちが、最後の力を振り絞って湯々ゲルンの入口へすべり込むと、すかさずガンダルガとポツテヌが、金属の枠がついたガラス製の扉をバタンと閉めた。

「はいはい、失礼いたしますよ」

腰をおろし、湯ぐゲルンの玄関ロビーで息を切らせているアリッサ達の脇を、黒いフードとマントを身につけた若者が通り抜けていった。

若者は、玄関の扉に護符のようなものをペタリと貼りつけると、それに手をあて何やらブツブツと呪句を唱え始めた。

「よし、これでひとまずは大丈夫…と」

その明らかに魔術師風の若者は、もと来た方へとスタスタと歩いていってしまった。

「あいつは？」

アリッサが、近くにいたポツテヌにたずねる。

「ああ、彼はキャト君。ロクス大学で魔道サークルの会長をやっているそうだよ」

「大学生ですか」

ブランが思わず声をあげる。

「ああ。サークルの卒業旅行でここに来たようだね。いや、彼らがいてくれて実に助かった」

ポツテヌの話では、街に氷狼達が現れるという異常事態になったため、現在、湯々ゲルンのロビーは、観光客達の緊急の避難所になっているのだという。

そう言われて改めてロビーを見回すと、ゆうに百人をこえる人々が、不安そうに各々の属する集団に分かれ、たたずんでいた。

「おじいちゃん!！」

突然ミミが大声をあげた。

ソファーに横たわり毛布をかけられたニコライ老を発見したのだ。老人のまわりには使用人らしきもの達が数人立っている。

ミミの祖父が無事だったことに胸をなで下ろしたブランは、自分の同行者達の安否をポツテヌにたずねた。

「あの、他のみなさんは??」

「ここにいるよ。メディナさんとフリント君、それにフェルナンドは二階で怪我人の手当てを、ツアコンの彼は、喫煙所じゃないかな」ひとまず、皆が無事であることがわかり、ブランは胸をなで下ろした。

ポツテヌの話によると、近くの施設で陶芸体験をする予定だったネルガと太陽の家の面々は、湯々ゲルンの玄関を出た途端に氷狼と遭遇したという。

その時は、ガンダルガが自慢の大剣をふるい、事もなく氷狼を壁に

叩きつけ粉々にしたようだが、街の中心に妖魔が出現するという異常事態であることには変わりなかったもので、ひとまず湯ヶゲルンに戻り様子を見ることになったのだという。

「いやあ、氷狼を見た時のフリントやあの…ツアコンってやつ
の抜かしようは、なかなか見ものだったぞ！」

そばで話を聞いていたガンダルガが愉快そうに笑い声をあげた。

しかし、山の奥地や秘境の密林、はたまた魔道王国ドルクロス
の版図ならばいざしらず、この時代、普通に生活している庶民が魔物に
遭遇する事は極めて稀であり、その点でフリントやネルガの反応は、
仕方ないものといえただろう。

「まあ、何はともあれ、ここで君たちを待つことになったんだよ」
ポツテヌによれば、いつとき湯／＼ゲルンのロビーは、混乱する宿泊
客や、避難してきた住民、運ばれてきた怪我人などで騒然とした様
子になっていたようだ。

幸いな事に、キャトを始めとする魔道サークルの面々がいたので、
ポツテヌが彼らに頼み、ロビー周辺に護符による結界を張ってもら
い、ひとまずの安全が確保されたいらしい。

「本当は、建物全体に結界を張ってもらえばよかつたんだが…」
ポツテヌが、キャト達の方を見ながら苦笑を浮かべる。

学生達の魔力と護符の力でどうにか張った結界は、ロビー周辺とそ
の上に位置する二階部分を覆うのが精一杯だったようだ。

「はっ、そりゃ学生どもには無理な話だろ。まあ、一応結界の形に

なってるだけありがたいがね」

アリッサが、回りを見回し、なかなか手厳しい評価をくだした。

「彼らの中でも、キャト君はなかなか優秀なようだよ。ロクス王室付きの魔道士団から内定をもらっているようだし」

ポツテヌが、苦笑を浮かべたままやんわりとフォローを入れる。

結果が完成した後は、メイナの仕切りとガンダルガの叱咤とフェルナンドの歌によって、ようやく騒ぎはおさまり、今の状態に落ち着いたのだという。

「ともかく、今は二人とも体を休めた方がいい。アリッサ」

そう言うとポツテヌは、肩から下げたかばんから、銀色に鈍く光るスキットルを取り出し、アリッサへとほおり投げた。

「何だいこりゃ？」

キャッチしたアリッサが怪訝そうな顔で問い返す。

「ウイスキーだ。魔力回復薬を溶かしてある」

「……こりゃ高くつきそうだね」

「場合が場合だからな、ツケにしとこう。落ち着いたら、詳しい話を聞かせてもらわんとな」

「ハッ」

そう言い残すとアリッサは、風呂で一杯やるつもりなのか、地下へ続く階段の方へと降りていってしまった。

アリッサにしる、ガンタルガやポツテヌにしる、このような事態でありながら、普段通りの落ち着いた様子であるのが、ブランをある種感心させ、また安心させた。

「いち早く危機を感知し、一人で何とかするつもりだったのだろう」
アリッサの背中を見送りながら、ポツテヌがつぶやく。

「え？」

「いやいや、どうも今まで彼女のことを誤解していたようですなあ」
商人風的笑顔に戻ったポツテヌが、ブランを振り返る。

「『太陽の家』での付き合いだけじゃ、彼女の事をただの鼻つまみ者と思いつけていたかもしれない。まあ、やはり人間、一ヶ所にとどまればかりではいかんということかな」

「ポツテヌさん……」

「さ、ブラン君も風呂に入って体を温めなさい。私もちょっと一服してこよう」

悠々と立ち去るポツテヌを見送りながら、ブランは彼の残した言葉に共感を覚えた。

（そうだ、僕もアリツサさんと外で冒険をするようになってはじめて、彼女が施設のみんなが思ってるような冷たい人じゃない事に気づけたんだ）

ガラス越しに、先ほどまでしんしんと降っていた雪は、いつの間にか唸るような吹雪へと変わり、ロビーのガラスに容赦なく叩きつけられていた。

薬湯に入り、ひとまず元気を取り戻したブランは、一階のロビーに併設されている食堂へと足を運んだ。

腹を満たしたら、すぐに二階で怪我人の手当てをしているメディナ達に合流するつもりだった。

幸いな事に、湯ぐゲルンに避難した者たちは、当面、寒さと飢えを心配する必要はないようであった。

食堂の入口で、宿泊客達の質問攻めにあっていた湯ぐゲルン従業員の話によると、建物内部は、温泉の熱を利用した暖房設備が整っており、食べ物も、少なくとも1ヶ月分はあるという事である。

広い食堂内では、やはりロビーと同じように、宿泊客や地元住民らしき人々が、不安そうにいくつかのかたまりに分かれ、様々な情報や憶測をささやき交わしていた。

「俺たちは一体どうなっちまうんだ??」

「せつかくの旅行なのになんでこんな事に…」

「なあに、すぐにロクス軍の精鋭部隊が救援に来るさ」

「何でそんな事がわかるんだ?」

「これだけの異変だ、すぐに近隣から首都ロクスへと早馬が飛ぶだろう。ニーゲルンはロクスきつての観光地、金の成る木をむざむざと枯らしはしないはずだ」

「なるほど」

「あの若い魔術師達が張った結界のおかげで、狼共は中に入れないようだし、ここは待ちの一手だ」

「ふむ、確かにもっともだな」

鳥肉をはさんだパンとスープがのった盆を受け取り、席につき食事をはじめたブランだったが、一人である分、周囲からの声がよく耳に入って来た。

その結果、ブランは二つの事に気がついた。

ひとつは、皆今回の出来事は、異常気象に乗じた魔狼たちの襲撃だと考えているようで、伝説となっている強力な妖魔ヴィシユメイガの復活には気づいていないという事、いまひとつは、この異常事態をとりまとめようとしている人物が、誰一人いないという事である。

とりわけ重要な問題は、後者であるように思われた。

このような緊急時に、統率力のあるリーダーがいるといたないとは大違いである。

今は『太陽の家』の面々が何とか湯々ゲルンの人々をまとめているが、ひとたびパニックが起これば、どうしようもないだろう。

ニコライ老はそのような状態ではないし、ミミはその役目づくにはまだ幼すぎる。

ガロン村長に至っては、ブランに言わせれば、この場になくてもむしろよかったと思えた。

(あの雪妖を倒さなければ、ここを抜け出せないとしたら…)
それは相当に絶望的な話ではないだろうか。不吉な思考がブランの脳内をよぎった。

確かにアリッサは強力な魔法使いであるし、ガンダルガとて歴戦の強者である。

しかし、二人だけでヴィシユメイガに立ち向かったところで、結果は見えているだろう。

ポッテヌやフェルナンドが戦闘に向いているとは思えないし、魔道サークルの面々はしよせん学生である。

(これからどうなってしまうのだろう…)

結局のところ、月並みな疑問に立ち戻ったブランは、スーアの最後のひとすくいを口に運んだ。

「ブラン、もう元気になったかい」

背後からの声に振り向くと、パート介護士のメディナが立っていた。

このような状況でも、いつも通り気丈な様子の彼女は、ブランが元氣そうな事を確認すると、顔をほころばせた。

「どうやら大丈夫そうだね」

「ええ。すみませんご心配をおかけして」

「なあに、気にすることはないさ」

メディナの肝のすわり具合を見てみると、ブランの中にあつた不安も、いくぶんは軽減されていた。

「食べたばつかのところで悪いんだけど、すぐにロビーへ来てくれるかい」

「ロビーですか？」

「ああ、とりあえず『太陽の家』の面子でミーティングをする事になつたんだよ」

ブランがメディナと共にロビーへ行くと、コの字型に置かれたソファーに、アリッサ、ガンダルガ、ポツテヌ、フェルナンド、フリント、それにツアコンのネルガラがぐるりと腰かけていた。

窓の外はもはや完全なる猛吹雪となり、一步前に何があるかもわからない有り様になっていた。

「……これじゃあ、もう怪我人が運ばれてくることもないだろうねえ」

メディナが小さな声でつぶやく。

彼女は先ほどまで、湯ぐゲルンの二階にある広間を解放し、ここに常勤している医師とともに、氷狼に襲われ、逃げたり運ばれてきた怪我人達の手当てをしていたのだ。

今は、軽傷のものの手当てを終え、手に負えなかったものはすでに旅立ってしまったため、二階は落ち着いているということだった。

「みなさま。この度は、このような事態になってしまい、まことに申し訳ありませんでした」

一同が席に着くと、ネルガが、青ざめた顔のまま頭をさげた。

「旅行者の安全を第一に考え、みなさまを誘導するべき立場のわ、私が……その……」

おそらくは、ネルガ自身も事態を受け止めきれないのだろう。この場にいなながら心ここにあらずといった様子がありありとうかがえた。

「まあ、それはお前さんのせいじゃないだろ」

ブランが驚いた事に、ネルガをあれだけ毛嫌いしていたガンダルガの口からフォローの言葉が出た。

本心はどうあれ、不安や不満を他人にぶつけず、この場にいるみなに頭を下げたネルガの態度に好意をもったのかもしれない。

「し、しかし、天候などについて、もう少し入念にサーチしていれば」

「どれだけ準備をしても、予想を超える事が起きることもあるからねえ」

「そうですね。それに今回は、直前になって急をお願いしたんですし」

ガンダルガの反応が連鎖したのか、本来のフォローポジションであるブランとポツテヌが、すかさず言葉をかける。

「ああ……」

悲痛な声でそうもらす、ネルガは両手で頭を覆い、体を折り曲げうなだれてしまった。

「フロント、二階にネルガさんを連れてって、少し休ませてもらえるかい？」

「あ、はい……わかりました」

メデイナに声をかけられたフリントが、覇気のない返事をする。

実のところ、氷狼に襲われた恐怖と、医師とメデイナに叱咤されながら怪我人の手当てに動きまわった疲労により、彼の体力・精神力はあっけなく限界に来ており、もはや思考停止状態に近い様子であった。

「落ち着くまで側についてあげとくれ」

「はあ……そうします」

すっかりしよげこんでいるネルガを、無気力になったフリントが連れて行き、ブランが一人、人生の大ベテラン達に囲まれる構図となった。

ブランが驚いたことに、彼らが発する場の空気は、急にギラギラとしたものに変わりはじめ、特に元冒険者の面々からは、何やら闘志のようなものが感じられたのであった。

「さあて……どうする、皆の衆」

ニヤリと口火を切ったのは、やはりガンダルガであった。

「確認しておくが、この異変はヴィシユメイガの復活によるもの…
…なんだな??」

「ああ」

周りを気にして声をひそめたポツテヌの質問に、そっけなくアリッサが答える。

メディナが、驚いて口を開きかけたが、言葉になるには至らない。

「ならば話は簡単じゃ。奴を倒すかここから脱出するか、ふたつにひとつ!」

ガンダルガが威勢の良い声を張り上げる。

「ここで、救援を待つという手はないんですか??」

ナチュラルに老戦士の言葉をスルーしつつ、ブランがポツテヌに問いかける。

「それはあてにならん。まあ、相手の実力を考えれば、例えロクス
スの全軍がここに駆けつけたとしても、氷漬けにされて全滅するの
がオチだ。あと、この事態に介入してくる可能性があるといえればド
ルクロスだろうが…」

そう言うとポツテヌは、意見を伺うまなざしをアリッサに向けた。

「ここは、すでに奴の結界内だ。たとえドルクロス^{ドルクロス}の連中が来たとしても、わざわざここに飛び込んでくるようなマネはしないだろうよ」

「なるほど……」

ポツテヌがもつともらしくうなづく。

「おそらくあの連中なら、ここが滅ぶのをゆっくり待って、奴が他の土地に移動する所を狙ってくるだろうねえ」

「そんな……！だってここには――」

「人が大勢いるって??ハッ、連中が気にしてるのはただ一つ、魔道の秩序についてだけだよ」

アリッサ得意の皮肉だが、的を得てるであろう物言いに、ブランは何も言い返せない。

「それに、今は氷狼まかせにしているようだが、いずれ奴はここを狙ってくる。そしたら、こんなチャチな結界なんかすぐに吹き飛ばんじまつさ」

「……………」

一同に気まずい空気が流れる中、それまでずっと黙っていたフェルナンドが、口から言葉を紡ぎ出した。

「……………氷の狂霊が望みしこと……………全ての生物の熱量死……………狂霊に憑かれし土地……………その最後の息吹き絶えるまで……………氷の呪縛やむこと

なし……」

「何だい???今のは」

メデイナが、隣に座るポツテヌにささやきかける。

「ああ、おそらくはヴィシユメイガが北方で暴れまわっていた時代の伝承だろう。アリッサの言葉を裏付けたんだな?フェルナンド」

ポツテヌの問いに老詩人は豎琴で応え、再び言葉を紡ぎ始めた。

「狂霊を鎮めしは、かのロジ・マジ……ユガルタ深く沈む闇……地上に祀られしは光……すべてはミズル版画の如く……」

「何だい、ミズル版画ってのは??」

ブランが驚いた事に、芸術におよそ関心などないであろうアリッサが、意外な部分に質問をぶつけた。

「ああ、紙版画の技法のひとつだな、白と黒のシンプルなやつでね。以前は、ロクスやスラトニアの土産物屋でよく見かけたが、最近では廃れてしまったようだ」

ポツテヌが元行商人らしい博識ぶりを披露した。

「なるほどね……」

「当時、ヴィシユメイガ退治にまつわる紙版画が出回っていた……と、いったところかな??」

ポツテヌの問いかけに、フェルナンドは、今度は軽く首をかしげただけであった。

「おいつ、お主ら!!!話題がそれとるぞ!!!とつとつと作戦会議に戻らんか!!!」

業を煮やしたガンダルガがいきなり大声を上げたため、近くのソファアーにすわる人々が、驚いてこちらを振り向く。

「ガンダルガさん、わかりましたから落ち着いてください」

「なんじゃ小僧、わしに説教たれるつもりか!!」

「ちよっ!!そんなつもりは全然」

「いいよブラン。説教ついでに、このクソジジイに一発食らわしてやんな」

「ああっ!!アリツサさん、余計な事を言わないでください」

「なんじゃと、アリババ!!」

老戦士と老魔法使いのおなじみのケンカは、しかし、意外な人物の声によって中断された。

「あのっ……すみません」

振り返った一同の目に入ったのは、ガロン村長の娘、ミミであった。

必死で大きい声を出したらしく、息を切らせていた少女は、皆からの視線が一気に集まったことに動揺し、顔を赤らめた。

「あの……おじいちゃんから、みなさんに……お願いしたいことがあるそうなので……すみませんが、こちらへ来ていただけますか?」

ニーゲルン長老のニコライは、先ほどと同じソファアで、腰から上を起き上がらせ、肘掛けで体を支えていた。

皆で押しかけるのもどうかという事になり、ブランとアリッサとポツテヌが、長老からの頼み事を聞く事となった。

「孫の命を救っていただいたこと、まことにまことに感謝しております」

ニコライ老は、深々と頭を下げたが、その行動自体が体に負担だったようで、軽く咳込んでしまった。

「よもや……よもや、あの雪妖が復活する事があるうとは……しかも、身内である愚かな男のために!!」

ミミから事情を聞いた様子のニコライは、苦々しい顔で義理の息子……つまりはガロン村長を罵った。

「かさねがさね厚かましいとは思いますが、皆さまにどうしてもお願いしたい事があり、こちらに来ていただきました」

「それは一体何ですか?」

朗らかな口調でポツテヌが問いかける。

「皆さまにはどうか、ミミのする事を手伝っていただきたいのです」

長老は、ブラン達三人をゆっくりと見回し、切々とした声で訴えた。

「まずはこれを…」

ニコライは、懐から茶色い小袋を取り出すと、そこから束ねられた3つの鍵を手の上にすべり落とした。

「これは…」

それは、かなり古ぼけてはいたが、それぞれ赤・青・緑色をした、金属製の鍵であった。

ニコライは、それを傍らのミミの手に握らせた。

「これは、われらの祖先が、ロジ・マジ様によって託されたものなのです」

「ええっ!?!」

ブランが思わず大声を上げたために、先ほどのガンダルガのごとくロビー中から視線を集めてしまった。

あわてて言葉を飲み込んだが、隣からはアリッサの舌打ちが聞こえた。

「その話、続きを聞かせてもらえますかな??」

「はい、実は…」

彼の話によれば、三百年前、ヴィシユメイガを封印したロジ・マジは、ニコライの祖先である、当時のニーゲルン長老頭に二つの品を預けた。

ヴィッシュメイガが復活した時に使うようにと渡されたそれは、三色の鍵と「木の箱」だったという。

「それってもしかして…」

ブランがミミの方に目を向ける。

「はい。孫娘が首から下げているこの木箱です」

「これがその扉か……」

ブランの声が廊下に反響する。

目の前の赤く塗られた金属製の扉の前には、先ほどニコライから渡された鍵を握りしめたミミが立っており、ブランの後ろには、『太陽の家』の面々が興味深そうな顔で並んでいた。

長老のニコライから、ロジ・マジの伝承にまつわる話を一通り聞いた一同は、さっそくその裏づけをとるべく、湯ヶゲルンの地下に足を運んだのだ。

「まことに情けない事なのだが……わしにわかるのは、その赤い鍵の使い道だけなのだ」

これからミミが「する事」についてポツテヌに尋ねられたニコライ老の答えは、いささか頼りないものだった。

三百年前、ロジ・マジによって、ヴィシユメイガ復活の際に使った託された品々とその使い道は、ニーゲルン長老頭の家系によって代々受け継がれ、守られてきたのだという。

その詳細については、里の者はもとより、その家に婿や嫁にきた者にも決して明かしてはならないという決まりがあり、したがって、婿入りしたガロン村長などには、鍵の秘密も木箱の意味も全く知らされていないのだという。

「本来ならば、自分の後を継ぐ者が十五になると第一の鍵の使い道を、二十になると第二の鍵の使い道、二十五で第三の鍵、そして三十になった時に木箱の意味と、最後の秘密を教わることになっておったのだが…」

ニコライ老の父、ミミにとって曾祖父にあたる人は、ニコライが二十才になる直前にはやり病で早逝してしまったため、ニコライ老は、第一の鍵についての伝承しか聞く事ができなかったのだという。

「『第一の鍵は赤の鍵』、湯々ゲルン地下の最も奥にある扉を開くためのものです。そこを開いた後、どのような事がおこるかは、想像もつきません。どうか皆さまには、わが孫娘とともに、ニーゲルンを救う手助けをしていただきたい」

そんなわけで、ブランといくつになっても好奇心旺盛な太陽の家のベテランチームは、ミミについて件の扉の前にやってきたのだ。

様々な風呂が並ぶ湯々ゲルン地下一階の廊下の隅に、目立たぬ古ぼけた木のドアが存在している。

そのドアを開けると、明らかに今は使われてない、ほこりがかつた薄暗い通路が続き、その突き当たりに、赤く重々しい雰囲気を漂わせた、くだんの扉がどんと構えている。

一階のフロントでもらったキーで木のドアを開け、薄暗い通路の奥に集結した面々……ブラン、アリッサ、ガンダルガ、ポツテヌ、フェルナンド、メデイナの視線は、今や目の前の少女、ミミに集中していた。

いきなり病床の祖父から重要な役割を託されたミミは、当然心の準備もないまま状況に流され、落ち着かない様子だったが、ここで手を震わせていても仕方ないと気づいたのだろう、束ねられた中から赤い鍵を選び出すと、扉の鍵穴にそれを差し込んだ。

ガチャリ

無事に鍵が開き、ミミはそのままドアノブに手をかける。

「では、中に入ります」

ミミの言葉を聞き、ブランがアリッサにささやきかける。

「一番にミミちゃんを入れちゃって大丈夫ですか??」

「まあ、いきなり矢が飛んできたりはしないだろうよ」

アリッサが不謹慎な事をニヤニヤと答える。

「ちよっ!!何てことをー」

「ロジ・マジが村人に託したということは、そこまで危険な役割ではないだろう」

すかさず、ポツテヌがフォローを入れる。

「それに、こういうのは『託された者』が行かないと進めない場合もあるんだ、ごちゃごちゃわめくんじゃないよ」

アリッサにビシツとしめられて、お約束通りブランはうなだれた。

ギイイイイイイ……

重い扉が、ミミの手で徐々に開かれていく。

驚くべき事に、ずっと……おそらくは三百年近く誰も入ることのなかったであるつ室内からは、ボワツと明かりがもれていた。

ミミを先頭に、一行は中へと入っていった。

「なんだいこりゃ」

部屋に入って最初に上がったのは、メディナの気の抜けた声だった。それもそのはずで、部屋の中央には、湯気がもうもうとあがる温泉があっただのだ。

壁に空いた穴の下に「とい」のようなものが設けられ、そこからお湯がチヨロチヨロと湯船へ流れこんでいた。

床と壁は石のタイルで埋められ、部屋の隅には、木の棚が並び、その中にはガラス製の瓶が並んでいる。

部屋の天井には、半球型の半透明なガラスが取り付けられ、内側から鈍い光を放っており、これが三百年間、ずっとこの部屋を照らしていたのだとすれば、魔道の力による手妻なのかもしれない。

「なんだかねえ。もうちょっと冒険小説のような展開を期待したんだけどさ」

メディナの元も子もないつぶやきが部屋に響く。

「まあよいではないか。ワシがここでひとつ風呂浴びとる間に、お前たちが手がかりを探せばよい!」

ガンダルガの冗談とも本気ともとれない発言にアリッサがすぐに反応する。

「そりゃいいや。ブラン、介助してやんな」

「何をアリババ！！わしゃまだ一人で入れるわい！！」

「ちよつと、二人ともこんなとこまで来てケンカは……ああ！！」

仲裁に入ろうとしたブランだが、湯気でメガネが曇り始めたため、動くに動けなくなってしまう。

ポロン…

ゴタゴタした空気の間を縫って、美しい豎琴の音が部屋に鳴り響く。

一同がそちらを振り返ると、フェルナンドが、入ってきた扉を指差していた。

裏側も赤く染められた扉には、何やら見慣れぬ文字が刻み込まれていた。

「これは……うぐっ」

文字に顔を近づけたブランを雑に押しつけて、アリッサがそれをにらみつける。

「ふん、魔道文字の類じゃないようだね……フェルナンド、読めるかい」

アリッサに呼ばれた老詩人は、改めて文字を見つめると、コクリと

頷き、節をつけて読み始めた。

「赤き鍵、第一の鍵。ロジ・マジがこの地にもたらした、最初の温泉を守る鍵」

「ふむ……これは、おそらく伝承の原文。三百年の間に色々と言い換えられたようだが……何はともあれ、この温泉が、ニーゲルンの温泉第一号のようだな」

「へええ」

ポツテヌの言葉に、ブランが思わず感嘆の声を上げる。

「もし、ロジ・マジがこの地に温泉をもたらさなければ、ニーゲルンは、今でもただのうら寂しい寒村だったのかもしれない」

ポツテヌが歴史のロマンに思いをはせてる背後では、アリッサが現状への不満から悪態をついていた。

「まったく……答えがわかってから答え合わせをさせられても、しかたがないねえ」

「とりあえず、この部屋を調べてみますか??何か次の鍵を使う手がかりがあるかもしれませんし……」

ブランがおずおずと提案すると、それまでのやりとりに痺れを切らしたガンダルガが、温泉のへりに片足をのせ、大声を出す。

「ようし!!それでは皆は、早速部屋の探索をするんじゃない!!とにかくわしは、風呂へ入るからーおおっ!?!?」

ガンダルガのわがまま宣言が終わらぬうちに、アリッサが指を鳴らすと、彼の足元に何らかの力が加わったようで、彼は派手に体をのけぞらせると、湯船の中へ見事に落っこちた。

ドッポ〜ン！！！！！！

「ちよっ！！アリッサさん、なんて事するんですか！！」

いつもの事ながら、ブランが悲鳴を上げる。

「いいじゃないか、希望をかなえてやったんだから。あたしゃ、じじいの裸見ながら探索作業するのなんざごめんだよ」

「そういう問題じゃないでしょ！！最近の調査だと、お年寄りの死因で、入浴時の転倒ってのが増えてるんですよ。何も風呂場で転倒させなくても！！」

「ハッ、あんなんであのじじいがくたばるわけないだろうが」

二人の水かけ論に、水をさしたのは、メデイナのつぶやきだった。

「……………上がってこないね。ガンダルガさん」

「た、確かに……」

温泉の底は、湯気のためにハッキリと見えなかったが、少なくとも大柄なガンダルガが入っても余りある深さのようだ。

「ガンダルガさ〜ん!!!」

ブランが、湯船に呼びかけてみるが、やはり応答はない。

「……とうとうヤツも逝ったか」

「ちよっ!!!やめてくださいよ!!!」

しみじみと手を合わせるアリッサに文句をつけるブランの顔色は、見る見る青白くなっていく。

「救いどころのないじじいだったが、せめて最期くらいは悼んでやらな〜」

ザババア!!!

しかし、アリッサの期待を裏切るかのように、湯船の中心から坊主頭が勢い良く浮かび上がった。

「こおりゃああ、アリババ!!!いきなり何をするんじやい!!!」

「おやおやガンダルガ、無事だったのかい」

いつもならこのまま、紛争勃発となるところだったが、意外にもガンダルガは、湯船から上がると、咳払いをしてみせた。

「まあよい……今回はかりは見逃してやろう」

「おやおや、何だか気持ち悪いね。打ちどころが悪かったのかい？」

「ふん、何とでもいうがよい。皆の衆よ!」

そういうとガンダルガは、アリッサに向けていた顔を一同に向けた。

「第二の扉を発見したぞ!」

「ええっ!?!それってまさか……」

「うむ、この湯船の底に青い扉があった。わしがこの目でしかと見届けたっ!」

ガンダルガのでかい声が、室内に響き渡った。

彼の威勢のよすぎる宣言に、何と返答したものかと、皆が微妙な空気がなってしまうが、ようやくポツテヌが口を開いた。

「ふむ。では、なんとかして、湯船のお湯を抜かないといけませんな」

「しかし、この深さじゃ、全部汲み出すのは相当大変だよ」

湯船に視線を送りながら、メディナが眉間にシワを寄せせる。

「おそらく、部屋のどこかに湯を抜く仕掛けがあるはず。民間人に託した以上、それ程難しいものとは思えないが……」

ポツテヌの言葉にガンダルガが声を上げる。

「よしっ！―それではさっそく部屋の搜索じゃ！―」

「あ、これじゃないですか??」

民間人向けの仕掛けは、ほどなく民間人であるブランによって発見された。

床にはめ込まれた金属製のフタをあけると、そこにはハンドル式のバルブが2つあった。

「ふむ……おそらく片方がお湯が流れ込むのを止めるもの、もう一つがお湯を抜くものでしょうな。ブラン君、どちらかを適当に回してもらってよいかな??」

後ろからのぞきこむポツテヌに促され、ブランは右側のハンドルに手をかけた。

「くっ……………!!」

長い年月がたち、錆び付いているため、回すのにはかなり力を込める必要があったか、ブランはありったけの力で、ハンドルを時計と反対回りにまわしていった。

「あ、お湯が!!」

ミミの指差す先では、壁穴から「とい」へと流れ込むお湯が少しずつ細くなり、やがてそれは、完全に途絶えた。

「ふむ。後はもうひとつのバルブを回せば、お湯が抜けますな」

ポツテヌの言葉に、ブランが、額の汗を拭い、左側のハンドルに手をかけようとしたが―

「なんじゃ小僧！！体力がないのう。どれ、かしてみんか！！」

明らかにブランへの気づかいではなく、自分が回してみたいオーラ丸出しのガンダルガが、ブランを押しつけハンドルに手をかけた。

「無理すんじゃないよじじい。腰がもげるよ」

「なんじゃと！？おのれアリババ、賢いことばかりぬかしおつてええ」

アリッサに焚きつけられた老戦士は、筋肉を盛り上げさせ、全力でハンドルを回しにかかった。

「うおおりゃあああ！！！」

バキッ

「あっ！！」

ガンダルガ渾身の腕力が災いし、ハンドルはポキリと折れてしまった。

「……………」

「……………」

「うおおりゃああああ」

「ガンダルガさん。ハンドル折れたのみんな見てましたから」

再びハンドルを回すふりを始めたガンダルガに、ブランが適切な突っ込みを入れる。

「まあ、かなり錆びついてたようだしな……………どうしたものか」

ポツテヌが眉間にシワを寄せ、白い口髭をなでた時である。

『なんとか、してみよう』

ブランの首から下げたドクロの目が光り、極めて低い声が部屋に響き渡った。

「ブラン!?……何だい今の声は??」

さすがのメディナも驚きの声をあげる。

全員の視線を浴びたブランは、再びメガネを拭いながら、あたふたと適当な言い訳を口にしようとする。

「これはですね……ええ……その……」

『ブン・ラツハだ。よろしく』

しかし、ブランよりもはるかに通る声で、ブン・ラツハが、自身の紹介と、ブランの首に下がるまでのいきさつを話し始めた。

「……なるほど。では、あなたは、ヌーベリアの呪術師ということなのですな」

話を聞き終えたポツテヌが感嘆の声をあげる。

『そつだ』

「いやあ、あそこはまだ足を運んだことのない国のひとつでしてな。いつか行ってみたいと思っていたんです」

群島国家ヌーベリアは、大陸の南方に位置する小さな島々からなる小国で、浅黒い肌の民が住んでいる土地である。

そこでは、魔術の体系も、アリッサやドルクロスの魔道士達が使うそれとは全く違い、精霊の力を借りる呪術が主体となっている。

「ブン・ラッハ。何か手があるってんなら、さっさとやってくれ」

『わかった』

アリッサに促されたブン・ラッハは、一同を戸口に下がらせると、うたうような口調で、何やら呪句をつぶやき始めた。

「あの、ブンさん。僕はこのままで大丈夫ですか??」

ブン・ラッハを下げたまま、湯船の近くに立つブランが不安げな声をあげるが、銀色のドクロからのいらえはない。

「術を唱える時は集中してるんだ。むやみに話しかけんじゃないよ
!!!」

アリッサの小声だが、厳しい叱責が戸口から飛んでくる。

仕方なくブランは、口をつぐみ、不安げな表情のまま棒立ちになる。メガネを拭くことすら気まずい空気だったので、前も見えなくなってきた。

『よし』

「え?」

ブン・ラッハの声にブランが反応したその時である!!

コトコトコトコトコトコトコトコトコトコトコトコト...

ザッパーーーーーン!!!!!!

ブランの体は、大量のお湯に飲み込まれた!!!

すぶぬれになりながらも、ようやく目を開けたブランの視界に飛び込んだのは、湯船から立ちのぼる湯柱と、それによって自発的に外へと溢れ出して行く大量のお湯であった。

「これは……」

『水の精霊に、頼んだ』

ブランが、以前アリツサから聞いた話では、ブン・ラツハのような呪術師たちは、自分の呪力を自然に存在する精霊たちに分け与える事によって、その力を借りるのだという。

彼女に言わせれば「うまい飯を食わせてやるから、しっかり働け」という事らしいが、どうやら今回は、水に住む精霊の力を借りて、このような芸当を行っているようだ。

「ほお、これはすごい」

ポツテヌが感心した表情でブラン……というよりもブン・ラツハに近づく。

「ブン・ラツハさんは、生前かなり強力な術者だったようですね」

『ブン・ラツハの力では、ない。すべては、精霊の、力』

ミミヤメディナはともかく、ポツテヌやフェルナンドにとって「魂の宿ったドクロ」は、そこまで驚くべきものではないようで、すで

に親しげな会話が成立している。

「ほりゃー!!わしの言つたとおりじゃろっ!!」

すでに七割がたお湯が抜けた湯船の一角をガンダルガが得意気に指さす。

そこには確かに、この部屋の入口にあった赤い扉と同じ雰囲気醸し出す、金属製の青い扉があった。

「むっつ!!これ下で降りるんじゃない」

あらかたお湯が外にはけると、早速ガンダルガが、浴槽内の壁面に取り付けられた、等間隔に金属を打ちつけた梯子を発見した。

「ようし、それではまずワシがー」

「待ちなじじい、うかつに先走るんじゃないよ。まずは、この娘に行かせるんだ」

「むっつ……」

まるで悪役の女が発するような、アリッサの一言だったが、確かに理にはなっていたので、ガンダルガはしぶしぶと引き下がった。

もし、ロジ・マジに託された、ニーゲルン長老頭の血筋でないものが先に扉に近づくと、何らかの魔力による罠が作動しないとも限らないのだ。

「まあ、たいていの魔術師どもの手妻なら、あたしが感知してやるんだが……相手が相手だからな」

さすがのアリッサといえども、古の伝説に残る温泉魔導師の力には、敬意を払っているようだ。

以前、ブランが彼女から聞いた話によれば、古き時代には、そこそドルクロスの魔道大公達に匹敵するような、大魔導師が、世界のあちこちにいたようである。

ロジ・マジ像の地下にヴィシュメイガが封印されていたことを、アリッサほどの者が正確に感知できなかった事からして、ロジ・マジの力というのは、恐ろしく強力なものであるに違いない。

「ん、までよ……」

ここでブランは、ひとつの疑問にぶち当たった。

そもそも、行きの馬車で聞いた話では、ヴィシュメイガは、ニーゲルンのはずれにある、「ユガルタの迷宮」の奥深くに封印されていたはずである。

それが、なぜ街の中心地にあるロジ・マジのほこらの下から出てきたのだろうか？

長い年月に口伝が繰り返されるうちに、その内容が変質してしまったというのだろうか？

「おっ、扉が開くよ」

「えっ??？」

自らの思考に集中していたブランは、隣のメディナから声をかけられ、我に返ると、目の前の浴槽の底では、すでに青い鍵を使っただらしいミミが、固い金属製のドアを必死に開いていた。

ミミが開いた青い扉の裏側には、やはり赤い扉と同じ様に文字が刻まれていた。

下に降りたフェルナンドがそれを読み上げると、一同の顔には驚きが走った。

そこには、以下のような一文が刻まれていたのだ。

『青き鍵、第二の鍵。始まりの湯の底を開くもの。ユガルタ深くへと続く扉を守る鍵』

「……………」

ユガルタの迷宮……その入口付近を調査した学者達の説によれば、建造されてから千年は経過しているという。

温泉魔導師ロジ・マジによって、雪妖ヴィシユメイガが、迷宮の最下層に封印されたという言い伝えが、三百年前の話である。

それ以前のユガルタがどのような場所であったか、今や知るものは誰もいない。

正確に言えば、長命な大魔導師の中には、把握しているものがあるのかもしれないが、そのような者達は、もはやあまり現世との接点を持ってはいないだろう。

先出の学者たちからは、何かの墓所ではないのか、いや魔界の入口

があるのではないか、など諸説が飛び交っていたが、いかんせん、迷宮の中に入れない以上、どれも決め手に欠ける空論にすぎなかった。

「何はともあれ、さすがにこの先は危険そうですね…」

ブランの言葉に、答えられる者はいない。

「とりあえず、一度ロビーに…」

ポツテヌが言いかけたその時である！！

「た、た、た、助けてください！！！」

黒い礼服を着た中年男性が、ブラン達のいる部屋に転がりこんできた！！

「ミツクさん！！！」

ちょうど、梯子を登り浴槽から顔を出したミミが声を上げる。

その男が、先ほど湯くゲルンに逃げ込んだ時、ニコライの周りにいた使用人の一人であることを、ブランは思い出した。

男は、恐怖に満ちた表情のまま、一番近くにいたポツテヌにとりすがった。

「口、ロビーに魔物がっ！！旦那様があ！！！」

ここで、時を少しさかのぼってみる。

ブラン達が、湯ヶゲルンに逃げ込んだちょうどその頃…

「うっ……くそっ!!」

ニーゲルン村長のガロンは、とある部屋の片隅で悪態をついていた。ヴィシユメイガのもとから逃げ出したガロンは、ニーゲルン中心街の一角にあるルテラ教の教会に避難し、ひとまずの安全を確保することに成功したのだ。

礼拝堂は、逃げ込んだ人々でごった返していたため、彼は村長という立場を利用し、なかば無理やりに奥の一室を自分用に占拠してしまった。

扉の外には、傭兵のドースを立たせ見張らせているが、もう一人の傭兵、ダインは、すでにこの世にいない。

ここまで来る途中で氷狼に襲われた際、彼に最初の攻撃が加えられたのをいいことに、囷として見殺しにしてきたのだ。

「……なぜ!!なぜ俺がこんな目に!!」

ブラン達に対した時とは全く違う口調で、彼は憤った。

「いつもだ!!いつも、あと少しというところで邪魔が入るんだ!

「！」

そう言うと、彼は部屋に置かれていた椅子を蹴りつけた。

木製の椅子はバキツと乾いた悲鳴をあげると、その足を折られ床に転がった。

「くそ、このままでは、俺の夢が…」

彼には夢があった。

ニーゲルンを、この大陸最大の歓楽都市として発展させ、その帝王となる、という夢が。

そのために、好きでもない長老の娘とも結婚したし、まったく尊敬できない土地の古老達にもペコペコ頭を下げた。

「これが……リリーヌを殺った呪いだともいうのか」

リリーヌとは、ニコライ老の娘であり、ミミの話に出てきた、彼女の母親である。

つまるところ、2年前にガロンは、人を雇い、おのれの妻を事故死に見せかけて殺害したのだ。

理由は簡潔であった。

リリーヌが、ガロンの「夢」ともう一つの顔に気づき、激しくとがめだてしたからである。

その時点でガロンは、まだニーゲルンを完全に掌握していたわけで

はなく、彼女の口からニコライや長老会に、彼のたくらみが伝えられるのは、非常によろしくなかったのだ。

「くそっ!!」

しかし、肝心のニーゲルンが、雪と妖魔の版図となった今、彼のその人間性を捨ててまでの涙ぐましい努力は、すべて水泡に帰してしまっただのである。

と、その時である……

ガシャアアアン!!!

「な!?!……ひっ!!」

ガロンが悲鳴を上げる間もなく、何か黒い塊が、窓のステンドグラスを突き破り部屋に飛び込んで来た!!

バサササツ……バサツ

青い顔をして立ちつくすガロンの周りを飛び回っていたのは、一羽のカラスだった。

バササツ……ガン……バサササツ

しかし、その鳥の動きは、明らかに奇怪で、狂ったように部屋を飛び回り、あちこちに体をぶつけた上、しまいには、部屋の中央に置かれた机の上に激突し、そのまま動かなくなった。

「なっ………これは、死んだ………のか??」

あっけにとられたガロンが、ようやく口を開いた時、さらに恐るべき事が起こった!!

『お邪魔しますよ、村長さん』

「ヒィィ!…!」

突然、カラスがその首だけをくるりとガロンの方に向け、くちばしを小刻みに動かしながら、言葉を発したのだ。

『おやおや、里の長たる人が、そのように取り乱してよいのですか

?……ああ、ちなみにこの鳥は元々死んでいるものを、私の魔力でそちらまで飛ばしただけのもので、特に害はありませんよ」

「ま、魔力??」

「ええ。本来ならば、直接お伺いするのが筋なのでしょうが、何せ今そちらは、ヴィシユメイガの版図となってしまうたでしょ。私としては、つまらない小競り合いは避けたいとこなのですよ」

「なっ……!!」

「いやそれにしても、さすがは古代の妖魔だ。やることのスケールが違いますな。よもや都市を丸ごと氷漬けにしようとは。私などには、想像もつかないことです」

「きっ!!……貴様は一体何者なんだ!!」

ベラベラと口を動かす黒い鳥の合間について、ようやくガロンが恐怖と怒りの入り混じった言葉を投げつけた。

「私ですか?」

カラスの首がカクカクと不気味に動く。

「私は、魔術師。白魔術師のレイロックと申します」

その時、実際にそのような事はなかったのだが、ガロンには、そのこちらを向いたカラスの顔が、ニタアと笑ったように見えたのだっ

「白魔術師のレイロック……だと？」

『ええ』

「白魔術師」とは、結界などの防護魔法や、治癒魔法を得意とする魔術師達、広義では、神官や司祭なども含めた者たちの総称である。そして「レイロック」とは、先日フィンの首都ヨルムを混乱に陥れた、死人の扱いに長けた、闇魔術師である。

つまるところ、この闇の魔術師は、経歴詐称をしてガロンに接触を試みてきたというわけだ。

『このような吹雪の中、わざわざ連絡をとらせていただいたのは、ぜひあなたにご助力したいと思いましたがからで』

「俺に??」

怪訝な顔で応じたガロンだったが、どうやら自分に危害が加えられることがないとわかり、先ほどよりは警戒を薄めた様子だ。

『ええ、実はかねがねあなたの事は存じていましたね。機会を見てお会いしようと思っていたのですよ』

「……………会ってどうするつもりだったんだ??」

『いやあ、私は道楽で、あなたのような「夢」をお持ちの方の支援

をしておりますね。これをお渡ししたいなと思っていたのですよ』
レイロツクの言葉が終わると同時に、カラスの首がガクガクと震え始めたかと思うと、その口から何か黒い玉のようなものが吐き出された。

「これは……何なんだ?？」

『私たち白魔術師に伝わる強力な呪的アイテム……これを身につけることにより、おそらくあなたの失いかけた「夢」を今一度とり戻し、新たな人生を歩む事ができるでしょう』

「何だと??？」

ガロンもそれなりにはしたたかな男だ。

目の前に転がっている玉をうさくさそうに見ると、そのまま嫌疑の表情をレイロツクと名乗る鳥の方へと向けた。

『もちろん、無理には申しません。これをお持ちになるかはあなた次第』

疑いの目などわかっていたとばかりに、カラスの口が能弁に動く。

『それでは、私はこれにて失礼いたします。私の慈善事業をこころよく思っていない連中も多いので、長居は禁物でしてな』

「おい、ちょっと待ー」

『では失礼……』

「おい！！待て！！」

『……………』

ガロンの呼びかけもむなしく、カラスの首はコトリと机の上に倒れ、もはや全く動いたりしゃべったりする事はないようだった。

「……………」
目の前の生物―正確には元々死骸だったものだが―が動かなくなつた後、ガロンは、その脇に転がる黒い玉から視線を合わせたまま、しばらく睨み合っていた。

割れたステンドグラスから吹き込んでくる雪と冷気が、部屋を冷たく満たしていく。

お気づきの方もいるとは思うが、今ガロン村長の目の前にある玉は、以前にキリー村の青年を魔物へと変え、村人たち全員を石へと変えた「イビルストーン」と呼ばれるものである。

もしガロンに、少しでも魔道への知識があれば、鳥の死骸などを使いによこすレイロックという男が、決して白魔術師などではなく、危険な闇の脊族であることに気づけたかもしれない。

またもし彼が、全てを失った直後でなく、いつも通りのいんぎんな冷静さを保っていたれば、このようなうるんな石など見向きもしなかったかもしれない。

しかし、残念な事に現在の彼には、その両方が欠けていた。

「……………!!!」

ガロンは、おもむろに手を伸ばすと、その黒い玉をつかみとった!!!

途端に、彼の中でなにか爆発的な感情の流れが起こったらしい、目を見開き、口から何やら大声で奇妙な叫びを上げると、この中年男は、発作的とも言える動きで、いきなりその玉を飲み込んでしまった！！

「ハアハアハアハアハアハア……………ううっ！！！」

彼の体に変化が起こるのに、時間はかからなかった。

ガロンは、空をつかむように二、三步前へ進むと、今度は急にその身体を後ろにのけぞらせた。

「ぎひい！！！！……………いいつ！！！！……………あつくあつく！！！！」

バリィッ！！！！！！！！

次の瞬間、彼の腹の中央が膨れ上がり、何かがそこを突き破って現れた！！！！

「ぎひい！！！！！！」

それは「手」であった。

非常に長いその「手」は、天井近くまで伸びていくと、やがて真ん中で折れ曲がり床に手のひらがつく形となった。

しかし、異変はそれだけではなかった。

バリバリバリバリッ！！！！

「ぎいやあああ……！！……あん……ふぎあ……！！！！」

さらに無数の「手」が、彼の体のあらゆる部分、腹、胸、背中、足、頬、後頭部などから、彼の皮と脂肪を突き破って、伸びていったのだ！！！！

同刻……

傭兵のドースは、ガロンが籠もっている部屋の前の廊下で、椅子に腰かけて腕を組んでいた。

先ほどから部屋の中で、何か割れる物音や、ドタバタと動き回る音が聞こえていたが、どうせガロンがヒステリーでも起こしているのだらうと考えたこの傭兵は、藪をつついて魔物を出すような真似はせず、知らん顔を決め込んでいたのだ。

しかし、いったん静かになった室内から、今度はメリメリという、尋常でない物音が聞こえるにいたって、彼は仕方なく部屋のドアをノックしてみた。

コンコン…

しかし、返答はない。

「まったく何やってんだか」

ドースは傭兵である。

ガロンが、自分が逃げるために同僚のダインを見殺しにしたことは、むしろ雇い主として当然の事だと受けとめていた。

それよりも彼が気にしているのは、この街からどうやって脱出する

かと、その前に、ガロンからいかに高く給金をふんだくるかであった。

コンコンコン…

「ガロンさん、入りますよ…」

仕方なさそうに扉を開けたドースの顔は、一瞬で凍りついた。

そこには、見るもおぞましい巨大な生物があり、こちらを見下ろしていたのだ。

「なっ……………」

それは、一見すると、異常に足の多い蜘蛛のようであった。

しかしよく見ると、真ん中で折れ曲がって地についている足先は、どう見ても人間の手のようであったし、床につかず、中空をもがくように動いている手も何本がある。

そして何よりドースの目を釘付けにしたのは、その蜘蛛のような生き物の胴体にあたる部分であった。

「ガ、ガロン……………さん……………」

無数の手の中心部に見え隠れする「それ」は、ドースが辛うじて自分の雇い主だと認識できるくらいに変容をとげていた。

全身の皮膚はただれて生々しい赤色となり、その開いた口からは、他の多くの手とは明らかに違う、先端が鋭く尖った緑色の太い触手が一本、口を引き裂かんばかりに生えていた。

また、胸の部分には横に亀裂が入っていて、その隙間から巨大な瞳がドースの方をじつと検分していた。

「ヒッ………」

ドースが逃げ出そうという思考に行きつくよりも早く、その魔物が彼に向けて、数本の腕を伸ばしてきた。

「くそっ！！」

さすがに現役の傭兵だけあって、ドースはとっさに剣を引き抜き、敵からの攻撃に身構える。

ガスッ

「うわあああ！！」

しかし、彼の抵抗は一瞬で終わってしまった。

最初に伸びてきた手が、ドース愛用の剣を握りしめると、他の数本の手が四方から彼に組みつき、その身体をやすやすと持ち上げてしまったのだ！！

「わああ！！助けてくれっ！！！！」

中空で悲鳴をあげたドースを見ると、ガロンの胸の瞳は、満足そうに目を細めた。

ドースは、なおも何とか束縛から逃れようと、必死に手足をバタつかせるが、肝心の剣は、持ち上げられる時にむしり取られ床に落ちてしまい、もはや脱出する事は不可能であった。

その時、ガロンの口から生えた緑の触手が、急に素早くうねり出したかと思うと、そのまるで金属でできているかのような鋭い先端を、あわれな傭兵の方へと向けた。

「おい、やめろよ、やめろ！！！！ああつ、勘弁してくれよあ！！！！……誰か！！おいっ！！おいっ！！何とかしー」

ドースッ

しかし、ドースの叫びが終わらないうちに、彼の腹部には緑色の塊が深々と差し込まれていた。

「くそっ……こんな……??……うひいああ！！」

痛みのうめきを上げる間もなく、ドースの身体には次なる悲劇が襲いかかった。

ジュルルルル……

恐るべきことに、触手を通してドースの血液は、ものすごい勢いでガロンの体内へと吸い込まれていったのだ！！

「ああっ！！……やめっ……くっう……」

気の毒なこの傭兵はあっという間に全身の生氣と水分を奪われ、見るも無残なミイラへと変わり果ててしまった。

ガサッ

全てを吸い取り終わると、ドースを捕まえていた手は、無造作にその乾いた身体を床に投げ捨てた。

(……………ウマイ)

ガロンの胸の満足気な瞳から、思念が声となって発せられる。

(……………もっと……………もっと欲しいぞ)

おぞましい生き物は、自らの飽くなき欲望を満たすため、部屋の壁をぶち破り、礼拝堂の方へと移動を開始した。

……………そこにたくさんのエサがあることを知っていたのである。

再び、湯ぐゲルン…

二番目の扉を開き、湯ぐゲルンの地下がユガルタの迷宮につながっているという事実には驚くブラン達であったが、ニコライ老の身に何事か起こったという知らせを受け、あわててロビーに戻ってきていた。

「うわあ！！これはっ……………」

最初にロビーに着いたブランが思わず声を上げる。

ロビーの中央には、不気味な蜘蛛の怪物が陣取っていた。

その怪物が、正面玄関から侵入してきたであろうことが、破壊の跡も生々しく、外からの吹雪がふきつける入口の様子から察せられた。

「おじいちゃん！！！」

ブランの後ろでミミが絶叫をあげる。

蜘蛛の怪物から生えた無数の手の中の本に襟首をつかまれ、天井近くまで持ち上げられているのは、紛れもなくニコライ老である。すでに意識を失っており、顔色は紫色になっている。

「おじいちゃん……………どうしよう……………おじいちゃん！！！」

ニコライの方へヨロヨロと歩み寄ろうとしたミミの肩を、がっしりとした腕が捕まえた。

ガンダルガである。

「いかにぞ、お嬢ちゃん。うかつに近づけばあんなうちまう」

「あつ……!!」

ガンダルガが示したロビーの床には、干からびた「人間だったもの」が転がっていた。

よく見れば、ロビーのあちこちに、同じようなものが、無慈悲に横たわっている。

「おそらくは、獲物を捕まえた後、あの緑色のやつで体液をーん？
？どうした？？」

急にガタガタと震え始めたミミを見て、ガンダルガが言葉を止める。

「……………お父さん」

「ん??？」

「お父さんよおお!!!!!!」

ミミの絶叫に呼応するかのように、怪物の無数の手が左右に割れ、その中心部があらわとなった。

「じれは…………」

最後にロビーにたどり着いたポツテヌから、思わずつぶやきがもれる。

ミミが絶叫をあげるのも無理はなかった。

おそらくそのショックは、不気味な蜘蛛の怪物を見た時や、その怪物に自分の祖父が捕らえられているのを見た時よりはるかに大きかっただろう。

「ああ！！！！ああ！！！！お父さん！！！！！！！！！！」

それだけ叫ぶと、ガクツと力が抜けた彼女は後ろに崩れ落ちてしまったため、あわててそばにいたメディナがその体を支えた。

気の毒なこの少女は、わずか半日で一生分の緊張と恐怖を味わいつくしてしまったのだ。

(ミ……ミ……)

無数の手の中心にいるガロンの様子は、今は亡き傭兵のドースが見た時よりも、いっそうおぞましいものとなっていた。

彼の下腹部は、異常なまでに膨れ上がり、いまにもはちきれそうであった。

わずかに波打っている様子から、その腹の中には、大量の液体……つまりは、犠牲者達の血液やら体液やらがつまっているのだろう。

(ミミ……い……い……！！！！)

ミミを認識した胸部の巨大な瞳は、すさまじい憎悪の波動を放つと、

再びあまたある手でその姿を覆い隠し、ミミヤや太陽の家の者たちの方へ突進を始めた！！

「危ない！！！」

ブランが思わず声を上げた時である。

ブンッ

怪物の身体が半球状の光に包まれ、その動きが無理やり押し込められたように止まった。

光の中でジタバタともかく蜘蛛の周囲は、いつの間に現れたのか黒いマントとフードの者達がぐるりと取りかこんでいた。

彼らは一様に右手を怪物の方へ向けて突き出しており、その手のひらは鈍く光っていた。

「これは……結界??」

「そうです。みなさん、お下がりにください」

ブランの問いに答えたのは、これまたいつの間にか彼の近くに現れていた、魔道サークル会長のキャトであった。

「うちのメンバーが奴の動きを封じている間に、私が強力な雷撃魔法を唱えます。今のうちに後方へ避難してください」

キヤトは、相変わらず飄々とした口振りで、太陽の家の面々に指示を出した。

もはやロビーには、彼らと人質となっているニコライしか「生きている」「人間はいなかったのだ。」

「奴に雷を打ち込むとして、ニコライさんはどうするつもりかね？」

ポツテヌが眉間にシワを寄せて問いかける。

「問題ありませんよ。私の準備がすむと同時に結界を解除させ、私が術を打ち込む数秒の間に、メンバー達であのご老人の周りに局所的な結界…これはもちろん魔力をはじくものですが…を展開させます」

「数秒……ね」

ポツテヌが、何とも微妙な答えを返す。

「確かに、ロビー入口の結界は破られてしまいましたが。あれは、うすく巨大な結界を展開したからです。これ位の空間ならば、我々のつくる結界に問題が生じることはありません」

「うすむ」

「では…」

キヤトは、これ以上話す事はないとばかりに、術の準備のため仲間達の方へと行ってしまった。

キヤトとポツテヌのやりとりを聞いていたブランは「入口の結界が破られた」と聞き、たまらずポツテヌに問いかけた。

「ポツテヌさん！！今、この玄関に結界はないんですね。それって、外からあの狼たちが入ってくることになるんじゃない？」

「いや、どうやら大丈夫なようだよ」

ブランの懸念に、ポツテヌがロビーの入口を指さした。

吹き飛ばされた扉があった部分には何やら魔道の品らしき縄が張られ、外を向き印を切っているアリッサと、傍らで外を威嚇するように大剣をかまえているガンダルガの姿があった。

「あの二人、いざとなるとなかなかいいコンビなのだ。おお、こちらに戻ってくる。どうやら結界を張り終えたようだ」

ブランたちのところに戻って来た二人は、先ほどまでの連携はどこへやら、眉をつり上げて悪態をつき合っていた。

「全く……人が集中してる隣で汚いうなり声を上げるんじゃないよ」

「何をお！！わしの気迫で狼どもを止めたから安心して結界が張れたんじゃないが！！」

「狼どもはあの化け蜘蛛を警戒して入って来れないだけさ。余計な事をするんじゃないよ」

「さあ、果たしてどうか。さすがに目の前に獲物が来れば、いくら婆さんとはいえ、ガブツと来たかもしれんぞ!!」

見かねたブランが、間に割って入ったが

「ちよつと!!二人とも今は痴話ゲンカをしている場合じゃー」

「誰が痴話ゲンカだつ!!」

両サイドから同時に同じセリフで怒鳴りつけられてしまった。

しかし、それで区切りがついたようで、二人の老骨は、ムスツと腕を組んでお互いそっぽを向いた。

「……まあいいさ。この続きはあの化け蜘蛛を倒してからだ」

「それもそうじゃな。まずは、あの若僧共のお手並み拝見と行くか」

そう言うと二人の元冒険者は、キャトの方へと目を向けた。

怪物のそばで、何やら複雑な呪句を唱えているキヤトの足元には、黄色く輝く魔法陣が浮かび上がり、彼の右手は、おそらく魔力のエネルギーによってだろう、激しく光りはじめていた。

「うまくいきますかね……………あれ??」

隣にいるはずのアリッサに向けて話しかけたブランだったが、そこには誰もいなかった。

見ればアリッサ、ガンダルガ、ポツテヌ、フェルナンドの元冒険者達は、ブランの後ろで頭をよせ集め、何やらヒソヒソと話し合いをしている。

その時、怪物の周りで動きがあつた!!

「ああつ!!」

「け、結界があ!!」

このままでは自分の身が危険だと判断したのだろう、蜘蛛の怪物が今まで以上の力で激しくもがき出し、結界はそれに押されるように、不安定に明滅を繰り返し始めた。

(ぐお……………おおおお!!)

ズガアアアン!!!!!!

「うわああ！！！！」

結界の戒めを突破した数本の手が、そのまま天井をぶち破ったため、ちょうどその真下にいたサークル生の上にながれきが降り注いだ。

不運なその若者は、頭部にがれきの直撃を受け、一瞬で絶命してしまった。

途端に結界の光は消え失せ、おぞましい怪物は、再び自由を取り戻した。

「……………覚悟」

チラリと仲間の遺骸に目をやったキャトだったが、すぐに向き直ると、たった今完成した強力な雷を目標に向けて打ち放った。

強力な雷―実際には、雷の性質を帯びた魔法エネルギーの塊なのだが―は、見事に命中し、怪物の体は稲妻に包まれた！！

「すごい！！…………でも、ニコライさんは！？」

ブランの心配した通り、キャトの魔法は明らかに見切り発動であり、他のサークル仲間達は、ニコライへ結界を張るところか、腰を抜かしていたり、おろおろしているばかりの様子である。が、しかし―

「ああ、よかった！！」

稲妻が収まり、全身からブスブスと煙をあげ沈黙する怪物の一部に

鈍い光に包まれたニコライの姿があった。

「っただらしないねえ」

アリッサの声に後ろを向くと、彼女は二本の指をニコライの方に向けて、ニヤニヤとしていた。

「あの結界、アリッサさんが張ってくれたんですね!!」

「ああ。腑抜け共が腑抜けちまつてるんだから、仕方ないだろ」

「またそんな言い方を」

「それより、これからが本番だよ」

ブランの言葉を制したアリッサのは、意味深に怪物の方へあごをしやくった。

「え？」

再び怪物の方を振り向いたブランの顔に驚きが走る。

(ぐ……………が……………)

あれほどの魔法をくらいながらも、蜘蛛の怪物が活動を再開し始めたのだ。

「うわぁー！！！！」

「きゃっ！！やめてえええ！！！！」

怪物は、間近にいた二人のサークル生を憎々しげにその手でつまみ上げると、のろのろと回りに無数の手を群がらせた…

グキグキグキッ！！！！

その恐るべき力によって、獲物達は体中の肉を裂き骨を砕かれてしまった。

ジュルルル…

そして、肉団子のようになった「その固まり」に緑の触手を突き刺すと、その体液をすすり始めたのだ。

「うっっっ」

ブランが思わずその様子を見て口に手をあてた、その時である。

「今だよっ!!!!」

アリッサの声と共に、ブランの横をもろすごい勢いで「何か」が走り抜けて行った。

「うおりゃああああ!!!!」

それは、大剣を引き抜き全速力で怪物へと突き進むガンダルガであった。

タンッ

彼は大胆にも、怪物に飛び乗ると、その無数の腕をうまく足場に使い、一気にニコライをとらえている手のある場所まで近づいた。

怪物は、突然の無礼な来客をつかまえようとするが、先ほどの雷のダメージが残っているようで、のろのろと思うような動きができていない。

「どりゃあ!!!!」

勇ましい老戦士は、ニコライをがっしりとつかんだ怪物の腕を、気合いもろともぶった斬ると、ニコライの首をその不気味な手から引きはがした。

「やった！！すごい、ガンダルガさん！！」

ブランが感嘆の声を上げると、隣のアリッサは「ハッ」と面白くなさそうに、鼻をならした。

ガンダルガは、枯れ枝の様に動かないニコライを肩に担ぐと、すぐさま怪物の腕を伝って床に降り、こちらに向かって駆け出した。

その時、ようやく本来の動きを取り戻した数本の腕が、ガンダルガを捕まえようと迫ってきた。

ニコライを抱えているため、行き程の速度が出ないガンダルガに、魔の手が迫る！！

「危ないっ！！」

カカンッ！！！！

ガンダルガに迫った怪物の手は、正確には三本あったが、それらはすべて彼の後ろに飛び込んで来た2つの影によって防がれてしまった。

「ふう、こりゃ腰にくるなあ」

「ポロロン」

それは、元行商人のポツテヌと吟遊詩人のフェルナンドであった。

ポツテヌの腕部分には、いつの間にか丸い木製の盾が装着されており、それで敵の攻撃を防いだようだったが、フェルナンドは、ただそこに立っているだけなのに怪物の手をはじいたように見えた。

「あの盾も、フェルナンドのマントも、呪的な護りがかかった代物なのさ」

ブランの疑問が声に出る前に、老獪な顔をしてアリッサが解説をする。

「ふう……………久々に暴れたわい」

こちらに戻ってきたガンダルガが、壁の隅にグッタリとしたニコライ老をおろす。

怪物は、いったんその伸ばした手を収め、途中であった肉団子の「食事」に取りかかっている。

「二階まで動かすのは危険ですな。とりあえず応急手当てをしまし
よう。ブラン君、手伝って」

ガンダルガにつづいて戻って来たポツテヌが、上着の内側のポケットから、いくつかの瓶を出しつつブランに声をかける。

「はいっ!!」

ブランがニコライのそばに腰をおろした時、食事を終えた怪物が二つのカラカラになった塊を床に捨て、その巨大な蜘蛛じみた体躯を改めてこちらに向けた。

若者たちの血を得て、雷によってつけた傷は癒えた様子である。

怪物から溢れ出す悪意の波動に、ブランが思わず目まいを覚えた、その時である。

「おい!!ガロン!!」

アリッサの声がロビー中に響き渡った。

「まあ、そんなにいきり立つんじゃないよ」

怪物の周りをゆっくりと弧を描いて歩きながら、アリッサは持ち前の大きな声を相手にぶつける。

「ガロン！あんたが一番欲しがってるものをくれてやるよ。だから、この場所からとっと立ち去るんだ！！」

そう言うなり、アリッサは指を鳴らした。

「わあ！！」

驚きの声をあげたのは、メディナである。

今まで隣で気を失っていたミミが、いきなり立ち上がり、夢遊病者のようにフラフラと怪物の方へと歩き出したのだ。

彼女が目を閉じたまま進んでいることからして、それは明らかにアリッサの手妻によるものようであった。

「ほら、あんたの娘のミミだよ！！煮るなり焼くなり好きにするがいいさ」

当然の事ながら、アリッサのこの行動にブランは全力で抗議の声を上げようとしたのだが、隣にいたポツテヌに口をふさがれてしまった。

(ミ……ミ……)

アリッサの「ミミ」「ミ」という言葉に反応したらしく、蜘蛛の怪物は怒りの波動をおさめ、代わりに今度は憎しみの波動を放ちはじめた。

あまたある手がふたつに割れ、中心にあるガロンの姿がミミの方を向く。

口から伸びた触手は、極上の獲物を見つけた喜びからか、嬉しそうにしている。

「……ちよっ！……うぐぐ」

必死にもがくブランの耳元に、ポツテヌが小声でささやきかける。

「ここで何もしなければ、全員がああ怪物の餌食になってしまう。まあ……少々荒っぽいやり方だが、あふ二人に任せるんだ」

「……あ」

ゆっくり、非常にゆっくりとガロンの方へ近づくミミの後ろで、アリッサはなるべく目立たぬ様子で口と手を動かし、何らかの術法を準備しているようだった。

そして、アリッサのすぐ背後には、いつの間に来たものか、ガンダルガが厳しい表情で仁王立ちしていた。

そうこうするうちに、ミミは、今やガロンまであと数歩という所まで来てしまっている。

(……………)

邪悪な歓喜に満ちた声と共に、ガロンがそのおぞましい触手を振り上げた時である!!

「おいハゲ!!準備できたよ」

アリッサの声がロビーに響き渡る。

彼女の左手は心なしか鈍く光っているように見える。

「よしきたああ!!!!!!」

気合いの一声をあげるが早いか、老戦士は、アリッサの体を先ほどの木樽のように持ち上げると、彼女をガロンめがけて勢いよく放り投げた!!

空中で左手を突き出したアリッサの体は、正確にガロンの元へと飛んで行った。

グシヤッ

彼女の突き出した手刀は、ガロンの胸部にある巨大な瞳のすぐ下に突き刺さった!!

(……………!!!!……………)

怪物の瞳が見開かれ、声にならない声が波動となってロビーに伝わっていく。

パキパキパキ……………

アリッサの左手を中心に、怪物の体はこぼれた水が広がるような速さで、灰色の石へと化していく。

中心近くの手が、いまましい侵入者をひきはがそうとアリッサの方へ殺到したが、彼女が右手を鳴らすと同時に結界が張られ、すべてはじき返されてしまった。

(がああああ!!!!……………)

ついに、ガロンの本体部分が醜い石像に変わり、それと同時に、この短時間で多くの人をあやめてきた無数の手は、一瞬で灰のようになり崩れ去った。

巻き上がった粉塵は、瞬く間にロビーを満たす。

「アリッサさん!!」

視界のきかない中、彼女のいた方へ見当をつけ駆け寄ったブランは、せき込みむせかえりながらも、ようやく老魔法使いの姿を見出した。

「アリッサさん、それは……!!」

「ああ、イビルストーンだね」

アリッサの右手には、黒い小さな玉が置かれている。

彼女の目の前に転がる、かつてはニーゲルン村長として剛腕をふるった男の石像、その胸に浮かんだ巨大な瞳の中心部分には、その玉がぴったりとハマるへこみがあった。

「また、この石を見ることになるなんて……」

それは、かつてキリー村の哀れな青年が最期に残したものと、全く同じ色と形である。

「まったく……こんなもんがホイホイ出回ってるようじゃ、北方も終わりだね」

軽い不満を述べた後、アリッサが何事かつぶやくと、イビルストーンは粉々に砕け、床に広がる灰の上にバラバラとこぼれ落ちた。

「アリッサさん！その手…」

ようやく粉塵がおさまる中、ブランは、アリッサの左手首が不自然に曲がっている事に気づいた。

「ああ、折れちゃってるようだね。ま、仕方ないさ」

青ざめるブランをよそに、当人はいたってのんきな顔をしている。

「やれやれ、とんだ足止めを食っちゃったね。とつとと本筋に戻るうじゃないか」

そう言うと彼女は、他の老人達の方へと歩き始めた。

「うう……………」

規則的な揺れを感じ、ミミは目を覚ました。

まだ目が慣れないが、辺りは薄暗くどこからか水滴が落ちる音が聞こえてくる。

ミミをおぶい、岩壁に囲まれた狭い階段を降りているのは、老戦士のガンダルガであった。

その後ろに、アリッサ、ブラン、フェルナンドといった面々が続いている。

「おや、目がさめたかい」

足を止めることなく、アリッサが声をかける。

「本当ですか！？よかったあ……」

やはり足を進めながら、ブランが安堵のため息をもらす。

「……………」

覚醒していくと同時に、ミミの中で先ほどのおぞましい記憶がじわじわと形を取り戻してくる。

しかし、今さら泣いたり騒いだりする気力はわいてこなかった。

「あの……父は……」

「死んだよ」

アリッサがぶつきらばつに答える。

ブランが何か言いたそうに口を開くが、そのままうつむいてしまう。

いずれ伝えねばならぬ言葉である。今さら遠まわしに取りつくろう方が、不誠実なことに気づいたのだ。

「…そう……ですか」

ミミは、目を細め無機質な表情になる。

現在、ガロンの石像は湯々ゲルンのロビーの片隅に放置されている。

アリッサの話によれば、一度イビルストーンにとりこまれ、それを失った人間は、例え石化の術を解いたところで、息を吹き返す事はないのだという。

あのおぞましい姿が色を取り戻すくらいなら、むしろ今の姿のままに申った方が、ミミにとっていいのではないかとブランは思った。

ガロンを倒した後は、老人達の話し合いにより、ポツテヌとキヤトが生き残った者たちをまとめ、ロビーでの警戒を続けることになり、アリッサ達が、ミミを連れてユガルタの迷宮を目指すという結論に達した。

現在一行は、先ほどまでいた温泉の底から青い扉をくぐり、どこまでも続いていく階段を降りていた。

ポタツ…………ポタツ…………

相変わらず、水の滴る音が絶え間なく耳に入ってくる。

先頭に浮かぶ、アリツサが指を鳴らして出した光球と、フェルナンドが持つカンテラの明かりだけだ、頼りなく彼らを照らしている。

「おお、扉があるぞお!!」

ガンダルガの必要以上に大きな声が響きわたる。

永遠に続くかと思われた階段も、ついに終着点をむかえたようだ。

彼らの目の前には、巨大な鉄の扉がそびえ立っていた。

ギギギギギ……

鋼鉄製の扉が、ガンダルガの手によって押し開かれる。

ブランの予想に反し、特に鍵などはかかっていなかったようだ。

「いよいよ、ユガルタの迷宮か……」

ブランは、左手にはめた丸い木の盾をもう一方の手でギュッとつかんだ。

それは、ユガルタへと降りるブランに、用心のためと、ポツテヌが貸し与えてくれたものだった。

「素人の盾」と呼ばれるその品は、普通の盾と違い、裏面の円周部分にブランには到底読めない、いかめしい文字がびっしりと刻まれている。

ポツテヌによれば、それは魔術師による加護を得た代物で、装着したものに危害が加えられようとすると、自動で反応し身を守るように動くという驚くべきものであった。

彼が、行商人というなかなか危険な商売をしながら、無事に引退するまで生き残れたのは、この品によるところが大きいらしい。

最後に彼は「複雑な剣技なんかには反応しきれないから、過信はし

ないように」という注意をブランに与えた。

「そんなにビビることはないんだよ。くどいようだが、村人相手に凶悪な試練を与えるわきゃないんだから」

開いた扉をくぐりながら、アリッサがこちらを振り返りもせず、あきれたような声をだす。

彼女の左手は、メイナの処置によって包帯がまかれていたが、果たしてどれほど痛むのか、そのふてぶてしい表情からは察することができなかつた。

「うわあ、天井高いなあ」

おそろおそろの中へ入ったブランだったが、その第一声は、ことのほかシンプルであった。

室内は、彼の言うとおり、民家の三倍近くはあるつかという天井があり、ちよつとした体育館ほどの広さである。

天井も壁も床も、くすんだ青色の石がレンガ状に敷きつめられており、まさに「迷宮の一室」と呼ぶにふさわしいものであった。

「なんじゃ、この扉は」

ガンダルガがいぶかしげな声をあげる。

ブラン達が入った部屋には、合わせて3つの扉があった。

ひとつは言わずと知れた、彼らが入ってきた湯ぐゲルンへと続く扉であり、もうひとつは、部屋の突き当たりに見える緑色の、おそらくは3つ目の鍵を使い開けるべき扉である。

ガンダルガが注視したのは、いまひとつ、部屋の右手側の壁にある木製の扉であった。

それ自体は、それこそどこにでもあるような、幾分古めかしいつくりの扉であったが、一行の目を引いたのは、そこにほどこされていた呪的な印の数々であった。

扉とその周辺には、これでもかというくらいに護符らしきものがびっしりと貼りつけられており、さらにその上には、大小さまざま魔法陣が重なり合いながら、ところせましと描かれていた。

「こいつは……」

アリッサが、彼女にしては珍しく、扉の方へと早足で近づぐ。

「また随分と強力な結界をこしらえたもんだ。上級魔族でもここを抜けるのは無理だろうねえ」

「なんとー!」

アリッサの言葉に、ガンダルガとフェルナンドが驚きの表情を見せる。

「今の時代にこんな芸当ができるやつめはほとんどいない。こいつをつくったのは、おそらくー」

「温泉魔導師のロジ・マジー!」

思わず口をはさんだブランに、アリッサが軽くうなづいた。

「……………あの、確か元々の伝承だと、ヴィシユメイガが封じられたのは、この迷宮の奥だったんですよね??」

老魔法使いが素直にうなづいた事に勇気を得たブランは、ここに来るまでの道々、疑問に感じていたことをアリッサにぶつけてみることにした。

「でも、あの魔物が復活したのは、街の中心のロジ・マジ像の下からだった……………これって、長い年月の間に、言い伝えが歪んでしまったと言う事なんでしょうか」

「ふっ」

アリッサは、ブランの問いに軽く鼻を鳴らすとニヤリと笑ってみせた。

「そこは、あたしもずっと腑に落ちてなかったとこさ」

そう言うと彼女は、クルリと向きを変え、突き当たりにある緑色の扉をじっと見つめた。

「まあ、おそらく答えは、あの扉の向こうにあるんだろうよ」

ガチャリ…

ミミによって、扉に差し込まれた鍵が、重厚な響きとともに横に回される。

少女は、ガンダルガの肩で目覚めて以降、ほとんど表情を変える事なく、一行に付き従っている。

相手が老人達ならいざ知らず、親子の愛憎などに縁がないまま育ってきたブランには、今のミミに一体どのような言葉をかければいいのか、思いつかなかった。

「さあ、すまんがそのまま中に入ってくれ」

そんなミミの様子にはお構いなしに、アリッサが彼女を促す。

ギイイイ……………

ミミが、金属製の扉を少しずつ開いたその時！！

「うわあああ！！！！」

扉の隙間から、ものすごい勢いで白い煙の様なものが吹き出してきたため、ブランが悲鳴をあげる。

「おのれ、罨かあ!!」

いきり立って剣を抜こうとするガンダルガへ、アリッサの声が飛ぶ。

「あわてんじやないよクソジジイ。こいつはただの湯気さ」

「湯気??」

言われてみれば、もうもうとこちら側に流れ込んでくるものの正体は、確かにあたたかな湯気のようにであった。

「また温泉……??」

ミミ達に続き、メガネを拭きながら扉の中に入ったブランの目に飛び込んできたのは「これぞ温泉」と言わなければならない光景であった。

広い室内には、まるで露天風呂のような岩風呂がいくも点在しており、特に中央にあるものは、ちよつとしたプールほどの大きさであった。

どの温泉も、緑色の湯で満たされており、湯気にまじりほのかなよい香りが鼻に飛び込んでくる。

「おっ、あれは何じゃ??」

ガンダルガが、何か見つけた様子で中央の湯船の方へと駆け出した。

「むう、ここからでは湯気が邪魔でよく見えん。よし！ここはひとつ、わしがひとつ風呂あびがてらー」

「おいジジイ、勝手な事をすんじゃないよ」

岩場に片足のせ、湯船の中心に目をこらしているガンダルガに、ようやく追いついたアリッサが文句をつける。

ブランとミミもすぐに二人の側へ来たが、フェルナンドだけはまだ入口におり、扉を調べている様子であった。

「あれは……大きな石かな？確かに気になりますね」

なるほどガンダルガの言う通り、温泉の中央には人の頭位の大きさの丸い石が、湯気の隙間から見え隠れしていた。

ごつごつとした天然の岩場が広がる中で、人工物めいたその石だけが妙に浮いている。

「きゃっ！！」

その時である、突然ミミの首から下げた木箱がカタカタと鳴りだしたかと思うと、パカッと二つに割れて中から何かが地面にすべり落ちた。

それは、布製の巾着のようなものだった。アリッサが拾い上げ、袋の中身を確認する。

「なるほどな……」

アリッサはそれだけ言うと、袋を無造作にミミに渡した。

「……………これは、粉??」

袋には、白いキラキラとした粉がつまっていた。

ポロン…

いつの間にこちらへ来たのか、フェルナンドが豎琴を軽やかに鳴らした。

彼は、振り向いたミミが手に持っている袋を指差すと、その指をそのまま目の前の湯船へと移動させた。

「この粉を湯船に入れろってことですか??」

ブランが問いかけると、老詩人は「ポロン」と豎琴で返事をした。

「そうか!!もしかすると、こいつあ強力な入浴剤かもしれんな。さあ娘、わしがいいる前にささつと入れてくれ」

「ガンダルガさん、そんなわけないでしょう。すでに温泉なんですよ」

ブランがそつなくたしなめるが、ガンダルガは自分の推理に自信満

々の様子だ。

「いやあ、わからんぞ。温泉魔導師の残したものとあらば、温泉の効能をさらに高める伝説の入浴剤ということもあるう。うむ、そうに違いない!!」

「何でそれがヴィシユメイガから街を救う事になるんですか!!」

「温浴効果で力をみなぎらせ、ヴィシユメイガを倒すんじやよ!!
わあははは!!」

この間、アリッサはもはや相手にするのも時間の無駄とそっぽを向いており、フェルナンドは無言でたたずんでいたのだが、ただ一人、この生産性のないやりとりに好意的な反応を示した者がいた。ミミである。

彼女は、目の前で繰り広げられるプランとガンダルガの口角泡を飛ばすやりとりを見るうちに、思わず吹き出し、笑顔を見せたのだ。

「じゃあ、とにかくお湯に入れてみますね」

彼女は、二人をなだめるように声をかけると、手に持った袋を軽く揺らしてみせた。

無論、彼女がこのほんの半日ほどの間に受けた深いショックや傷から立ち直るには長い長い年月が必要なだろうが、若い介護士と年老いた戦士のあまりにくだらない会話を目の当たりにし、ひとまず周囲の人間に気丈に振る舞える程度の元気は取り戻したようだった。まだ幼いとはいえ、この地の首長の血筋であり、力強いことで有名な北方の女性でもあるミミの態度に、プランは半ば安心し半ば感心したのだった。

サアアアア……………

ミミによって投入された粉は、湯船の中であっという間に溶けて消えてしまった。

「……………何も起こりませんね」

「シッ！ー！ー」

ブランのつぶやきをアリッサが制する。

「フェルナンド。その扉の裏には何て書いてあったんだい??」

アリッサが、チラリと入口にある緑色の扉の方へ視線を送りながら、老詩人に問いかける。

フェルナンドは、一呼吸置くと、その渋みがあった声で節をつけながら、アリッサからの質問に答えた。

「緑の鍵、第三の鍵。最後の扉を開く鍵。白き粉にて時を溶かし、逆さの意味を知るべき時」

「逆さの意味??」

「ミズル版画だよ」

ブランの問いにアリッサがニヤリと返事をした、その時である!!

「わあっ!!!!」

突然目の前の温泉から、まばゆいばかりの光がはなたれた!!

「えっ??」

光が収まり、おそろおそろ目を開いたブランは、間の抜けた声を上げた。

一見すると、温泉の様子は何も変わってないように見えたからである。しかし…

「ああっ!!」

温泉の中央に浮かんでいた石に目をやったブランは、驚きの声を上げた。

「ひ、人がいる…」

先ほどまでは確かに、丸い灰色の石だったそれは、今や肌色の目鼻がついた、髪の毛一本ない老人の頭に変わっていたのだ!!

「こつちへ来よるぞ」

老人は、ブラン達の方へとスーツと近づいて来る。

湯気に邪魔されない距離まで来ると、それは確かに「肩まで風呂につかった禿頭の老人」である事がわかった。

ザバア

老人は、無造作に皆の前で風呂から上がると、右手の人差し指を軽く振った。

「あつー！」

途端に、老人の枯れ木のような体にどこから現れたのか、一枚の白い布が巻きつき、簡素なローブとなった。

また驚いた事に、先ほどまで確かに湿っていた老人の体は、一瞬間に乾いてしまっていた。

太陽の家の熟練の冒険者達は、いつもとは違う慎重な表情を見せ、この老人の様子をうかがっている。

「おい、その魔女」

高く乾いた、幾分ひょうきんな声が室内に響く。

老人がアリッサに顔を向けて呼びかけたのだ。

「あたしや魔女じゃない、魔法使いだよ」

アリッサはいつも通りのこだわりを見せ、ぶっきらぼうに返答する。

一見するとわからないが、ふてぶてしい声の中に、いつもとは違う緊張感が混じり込んでいることにブランは気づいた。

「そいつはすまんかった。魔法使いよ」

老人は、アリッサの態度に怒る様子もなく、飄々とお詫びと訂正をした。

「なんだい」

「わしゃどのくらい石になっとったのかのう??」

「まあ、ざっと三百年てとこだね」

「三百年」という言葉で、老人の正体に気がついたブランは、思わず声を上げてしまった。

「えっ!!じゃあ、あなたはまさか…」

「ロジ・マジだ。なんじゃ、そうとわからず呼び戻したのか??」

偉大なる老魔導師は、あごに手をあて意外そうな顔をした。

「ふむ……」

「あんたがかつて、ここの長老に残した伝言は、この娘の代には、ほとんど失われちゃってたのさ」

「……なるほどのし」

「こっちは色々と苦労させられてんだ。あんたが何でこんなやらしいことをしたのか、聞かせてもらおうじゃないか」

アリッサの問いに、ロジ・マジはあっけなく頷いた。

「よかるう。ただし…」

「？」

「その前に皆でひとつ風呂浴びようではないか」

そう言つと、魔導師は軽やかに手を動かした。

「うわああー!!」

急に自分の身体が浮き上がったため、ブランは悲鳴を上げた。

まわりを見れば、他の面々も空中に浮かび上がっている。

次の瞬間、何かものすごい力で引っ張られるのを感じたブランは、思わず目を閉じた。

「え？」

数秒の後に目を開けたブランは、自分が温泉につかっている事に驚愕した。

それは、どうやら同じ部屋の隅にある、ロジ・マジがいたものに比べれば幾分小ぶりな、エメラルドグリーンのにごった温泉であった。

「いやあ、素晴らしい湯加減じゃ！！」

ご機嫌な声を上げるガンダルガをはじめとする他のもの達、そしてロジ・マジ本人もしっかりと湯船につかっている。

服はといえば、どういう手妻か、近くの岩場に皆の着ていた服がきちんとたたまれ置かれていたのだ。

「これが、温泉魔法……」

思わずブランはポツリとつぶやいた。

「さてさて、それでは何から話そうかのう」

老魔導師が、あらためて一同を見渡した。

「まあ、いわゆる恩返しというやつよ」

カポーン……

湯気がたちのぼる中、つるりと禿げあがった老人の乾いた声が響きわたる。

「そもそもは三百年前、わしがもう少して五百才になるうかという時のことじゃ」

当時、ある魔物との戦いで傷つき倒れた彼を介抱してくれたのが、ニーゲルン村の村人達であった。

村の貧しいが穏やかな環境が気に入ったロジ・マジは、助けられた礼にと村の中心部に温泉を掘り起こし、自身も村はずれの小屋に暮らすことにしたのだ。

「無論、感謝の気持ちには変わりなかったが、この村に居座ったのにはもうひとつわけがあった」

すでに「温泉魔導師」として、魔道の世界では高名であった彼の専門は「地脈」についてであった。

「この地には、強力な大地のエネルギーが幾筋も流れており、地脈と魔道の融合を研究していたわしにとっては、夢のような場所だっ

たんじゃよ」

ところが数年後、この寒村に突然の襲撃者が現れた。雪妖ヴィシユメイガである。

当然、ロジ・マジは村を守るためにヴィシユメイガと5日間にも及ぶ激しい戦いをし、ようやく勝利をおさめたのだという。

「しかし、やつはなかなかしぶとくてのう…」

どうにかヴィシユメイガを自分の結界内に封じ込めたロジ・マジだったが、怒り狂った魔物は内側から激しく抵抗し、数日もあれば結界を突き破り、再び外界に現れてきそうな有り様だった。

「そこでわしは、それまで研究してきた術法を試す事にしたんじゃ」
それは「自然結界」と呼ばれるもので、地脈の流れが重なる場所に魔物呼び寄せ、その上に「要石」というロジ・マジ自ら精製した石を置くことにより、地脈の渦を作り、魔物を半永久的に封じるというものだった。

「この結界のすぐれた所はな、大地のエネルギーで魔物を困うため、雪妖の力を欲する邪悪な魔導師どもがいくら探知しようとも、その魔力を見つけることができんのじゃ」

「なるほどな」

アリッサが小さくつぶやく。

「さらには、地脈の渦によって村の気候を温暖にすることができた

「しろう」

「あ、それであんなに暖かかったんだ」

ブランの隣ではアリッサが「それみたことか」というように鼻を鳴らす。

「しかし、後の世になって石が動かされてはいかんじやろ、それで」

「石の上にあんたの木像を置き、あんたをまつる祠を建てさせた」

老魔導師の言葉をアリッサが継いだ。

「さらにあなたが賢いのは、近くにある迷宮の奥まった一室……つまりは、その手前の部屋に、探知してくれとばかりに、強力な魔道の封印を施したことだ」

「うむう」

「あなたの吊した美味しいエサを求めて、たくさんのお魔道士がこの迷宮に来たんだろうねえ。この奥にヴィシユメイガがいるに違いない、どうにか利用してやろう、と」

「じゃが、今も封印が破られてない所をみると、みな痛手を受けて退散したか、迷宮内で朽ち果てたんじゃろう。なんせユガルタ内には古代から生き残る強力な魔物がウロウロしてるからのお。ふおっふおっふおっ」

ロジ・マジとアリッサの問答を聞いて、ブランは改めて、この老人がただの温泉好きな翁ではなく、大魔導師とよばれるに値する人物なのだと感じたのだった。

「ただね、ひとつわからない事があるのさ」

アリッサが目を細めながらさらに問いかける。

「なんでわざわざ石にまでなって、ここにいたんだい？わざわざ面倒な伝承まで残してさ」

「うむ……」

ロジ・マジは、少し考えてから顔を上げた。

「これだけ大規模な自然結界を作るのは、さすがなわしもはじめてでな。それがうまく機能するか、何百年という長い目で見守る必要があったんじゃない。……だがな、ヴィシユメイガを封じた時点でわしの寿命は、持つて後三十年というところだった」

（一般人からすると十分に長いんですが…）

状況が状況なだけに、ブランは突っ込みを心の中だけにとどめておいた。

「それで、非常事態が起きた時に蘇る事ができるようにしといたってわけかい、気の長い話だね」

「まあ、建前はな」

「ああ??？」

「実のところ、わしゃ当時に村の長老だったばあさんに惚れとってなあ。つい、いいところを見せたくなくなってしまったんじゃない」

老魔導師は、子どものようににはにかんで見せた。

「どうやら、その血は途絶えずに受け継がれてるようじゃな」

ロジ・マジは、ミミをチラッと見ると安心したように微笑みを浮かべた。

「その後、地霊どもを使役して村とここをつなぐトンネルを掘らせ、3つの扉を作り、わしは長い眠りにつかせてもらったというわけだ」

そこまで話すと、ロジ・マジを湯船から両腕を突き出し、大きくのびをした。

「おい、じじい！！どうでもいいが、話が長すぎるぞ！！」

自分のことを棚に上げ、ロジ・マジをじじい呼ばわりしたガンダルの顔は、すでにゆでダコのように真っ赤になっている。

「そうじゃな、そろそろ久しぶりに雪妖と会うとするかのう」

「あんだ、勝てるのかい??」

アリッサが鋭い視線でロジ・マジに問う。

「まあ、体もあつたまつたし、何とかなるじゃろ」

老魔導師は、まるで他人事であるかのような話しぶりだ。

「女魔法使いよ、場合によっては、お主に助力を頼むかもしれんぞ。」

手の方はもう問題ないじゃろ」

「……………まあな」

湯船から出した左手をブラブラと振るアリッサを見て、ブランが驚きの声を上げる。

「えっ！！だってその手、折れていたはずなのに……」

「ほっほっほ。さっきこの湯に魔法薬を溶かしておいたからのう。神官どもの治療魔法などより、よっぽど効くぞ」

言われてみれば、確かに、ここまで恐ろしい程にたまっていた彼らの疲労は、いつの間にかすっかりと消え失せていた。

「さて、では上がるか……！」

立ち上がった老魔導師が指を振ると、皆の体は一斉に湯船から飛び出した。

「なんじゃい！！大魔法でビュ〜っと地上に戻れたりはせんのかい
！！！」

長い階段を上りながら、ガンダルガがブツブツと文句をもらす。

ロジ・マジを加えた一行は、再び湯〜ゲルンを目指しもと来た道を
進んでいる。

「そう焦るな、他の大陸に行くわけでもあるまいし。それにわしゃ
空手を扱う魔道は、どうにも苦手なお」

ロジ・マジは困ったようにこめかみをかく。

こうして見ると、まるで「太陽の家」の一員の様に見えてしまう親
しみやすさが、この老魔導師にはあった。

「おい、魔法使いよ」

階段を上りながら、ロジ・マジがアリッサに呼びかける。

「あたしの名前はアリッサだ」

「ではアリッサ、ちと聞きたいのだが……今、魔道の世界はどうな
っておる??？」

「どじつてのは??？」

「ドルクロスの連中は、相変わらず世界の管理者気どりで暗躍してるのかのう??」

その言葉を聞くと、アリッサは珍しくニヤリと嬉しそうに微笑んだ。

「あんだ、なかなかの得た事を言うじゃないか」

「まあのお」

「お察しの通り、奴らの締めつけは以前よりきつくなってるよ。独立して活動してる大魔導師なんてのは、今じゃ聞かなくなっただねえ」

「魔道王は今もグリムスじゃな。ここにおっても奴の波動が伝わってくるからのお。魔道大公は……」

「スヴェン、フィングル、ノルンだ」

「スヴェン!!あの若造が今や魔道大公とはな!!……ノルンという名は初めて聞くのお」

「だろっねえ、奴はまだ二十歳を少し超えたくらいだから」

アリッサがおかしそうに話すと、ロジ・マジは、驚きのあまり目を大きく見開いた。

「なんじゃと!!そのような年で魔道大公に!!いや……それは未恐ろしい」

ブランが後に聞いた話では、ドルクロスの魔道士たちの元締である魔道大公になるのは、100才〜150才が通例であるのだという。

「あのお」

階段を上りながら交わされる魔術師同士の会話にブランが口を挟む。

「魔法使いの方って、皆さん異常に長生きなんですか??」

ブランの疑問には何も答えないうまま、ロジ・マジはアリッサに質問した。

「アリッサよ。こやつはお前の弟子なのか??見たところ何も魔力は感じられんのだが…」

「いえ、僕はアリッサを担当している介護士です」

ブランがあわてて訂正する。

「カイゴシ??それはどんな術を使っんじゃ??」

「そうですねえ、まあ清拭とか、あとは食事介助に入浴介助とー」

「アホが。んなこと言っても通じんだろっが」

アリッサにたしなめられ、ブランはあわてて言葉を選び直す。

「ええっと……とにかく日常生活を一人で送る事が困難な人を手助けする仕事です」

「ふむ。なるほどのう」

三百年間石になっていた老人にどこまで伝わったかはわからないが、ロジ・マジは何やら納得した様子で頷くと、あらためてブランの最初の疑問に答えてくれた。

「魔導師の寿命というのはな……」

魔法使い、魔術師、魔導師に魔道士……呼び方は色々あれど、もちろん血の通った人間である以上、寿命というものが存在する。

彼らのうち九割以上、ほとんどの者たちは普通の人々と同じ位の年月しか生きる事ができない。

しかし、特に強い魔力を持った者……俗に「大魔導師」などと呼ばれる者達は、数百年、時に数千年の命を持つにいたるといふ。

(アリッサさんはどうなんだろう……)

そもそもブランがロジ・マジに先ほどの質問をしたのも、そこが気になったからであった。

入所時に提出された書類が正しければ、現在彼女は74才である。

話の流れでアリッサに直接たずねようかと悩んでいると、ガンダルの声が耳に飛び込んできた。

「おおっ！！見えてきたぞっ」

いつの間にか三十段ほど先に、湯々ゲルンの浴槽底につながる青い

扉が現れていた。

「まさか、ロジ・マジ自ら登場されるとはね」

魔道王国ドルクロス。

霧に包まれた湖の中に立つ「ゾーンの塔」の一室が、魔道大公ノルの居所である。

薄暗い部屋に座る、麗しき大公の前には、老魔道士ギリウスの映像が浮かんでいる。

「これはまことに予想外でしたな。いや、かの温泉魔導師はすでに入滅したか、あるいは異界にでも居を移したものと思われてましたからな」

「まったく。最近の北方はにぎやかすぎだよ」

三大公のうち、北方を統括しているのが、ノルンなのである。

「それで…どうされます??ヒース達への指示に変更を与えますか」

「そうだね、今はまだ待機かな。ロジ・マジが雪妖を滅してくれるならそれでよし。もし動くとしたら、ロジ・マジが敗れた時だね」

「温泉魔導師どのが敗れたとしても、雪妖めは相当消耗しているはずですからな、そこでヒース達に総攻撃をかけさせると」

「し」名答。さすが北の筆頭魔道士」

「これは、おたわむれを」

ギリウスの言葉に目を細め微笑していたノルンだったが、何か面倒事を思い出したように顔を曇らせた。

「ロジ・マジが残ったとしたら、面倒な事になるね」

「さよう、我が国に属さない大魔導師クラスの魔術師が突如現れたわけですからな。我らが何らかの動きを見せぬわけにはまいますまい」

「数百年かけて築いてきた秩序が台無しってわけかい」

ノルンは幾分おどけた様子で首を振る。

「冗談にはなりませんぞ。前例に従い、独立した大魔導師は配下とするか、あるいは――」

「駆逐しなければいけない。わかってるよ」

「ならば結構です」

「ま、とりあえずは、三百年越しの戦いの行く末を見せてもらうとしよう」

ノルンが右手で軽く空をなでると、そこにニーゲルンの映像が浮かび上がる。

「雪で視界が悪いな……ああ、せっかくだからヒースへの指示は私

が直接だそうかな」

「かしこまりました」

映像の中では、ヴィシユメイガが街の中心の建物に近づいていた。

ようやく湯々ゲルンに戻った一行は、ロビーに一人佇むポツテヌを発見した。

「ポツテヌさん!!」

ブランの声に振り向いたポツテヌは、皆の姿を見ると顔をほころばせた。

「おお、戻ってきたか!!おや、もしかするとそちらは……」

「あんたのことだから察しがついてるかもしれないが、ロジ・マジだよ」

アリッサがぶっきらぼうに伝説の魔導師を紹介する。

「なるほどなるほど。確かにあの木像にそっくりですなあ」

ポツテヌは、大いに感じいった様子で、ロジ・マジに挨拶をした。

「ポツテヌ、現状は一体どうなってるんだい??」

そんな挨拶はどうでもいいとばかりに、アリッサがポツテヌに聞く。

「うむ。まだ結界は破られておらんのだが、建物の周囲におびただしい数の氷狼が現れてな。ガラス越しにこちらを威嚇してくるので、とにかく混乱を避けるために、全員を二階に上げたところだ」

「それであんたはここで見張りをしてたってわけかい」

「うむ。まあ、見張った所で皆が来る前に結界が破られればどうしようもなかったのだがな」

しかし、元行商人の老人に見張りをさせるとは、キャトやフリントのような若者は何をしていたのだと、ブランは腹立ちを覚えた。

「あ、ポツテ又さん。これ、ありがとうございます」

結局使わず終いであった「素人の盾」をブランが返そうとすると、ポツテ又は手を振ってそれを制した。

「いやいや、まだ持っておきなさい。私には他にもいくつか身を守る術があるから」

「でもー」

ブランが遠慮をしようとしたその時である。

ドカアアアン!!!!!!!!!!

アリッサの残した結界もろとも、ロビーのすべてのガラスが吹き飛んだ!!!

「来たようだね」

今や瓦礫の山と化したロビーの入口を見据えてアリッサがつぶやく。

「来たってというのは…」

「雪妖のやつがここを狙って来たってことー」

『ヴオオオオオオオ!!!』

アリッサの言葉が終わらぬうちに、入口からものすごい勢いで、数える事もままならないほどたくさんの氷狼が、ロビーに踊りこんできた!!!

「ああっ!!!」

悲鳴をあげるブランを横目に、ロジ・マジが皆の前に進み出た。

「おお、狼ども。こいつは懐かしい」

「ちよっ!!!ロジ・マジさん!!!そんなのんきな…」

ブランの言葉もどこ吹く風の老魔導師が右手を上げると、一筋の光と共に杖が現れ、その手に握られた。

黒い金属の柄をもつその杖の先端には、石製の獅子の首がつけられていた。

「そら、あつたまれ」

ロジ・マジが杖を一振りすると、獅子の口から大量の熱湯が湯気とともに吹き出した。

『ギヤオオオ……』

湯の固まりを浴びた氷狼達は、またたくまに押し流され溶けていき、ロビーには、湯気と静寂だけが残った。

「ここで奴と戦うのはいかな」

ロジ・マジはそうつぶやくと、杖で地面をトンとついた。

「建物を丸ごと結界で包んどいたぞ。それにしても、わしがいた頃はポロ屋だったのが、今はまるで城のようだよ」

ロビーを見回しながら、ロジ・マジが感嘆の声をあげる。

「よかったあ。これでみんなひとまずはー」

ブランがそうつぶやいた時である。

「ブラン、危ないっ!!」

「へっ?」

柱の陰で難を逃れた一匹の氷狼が、ブランめがけて飛びかかってきたのだ!!

「うわぁー!!」

ガキイーン

ブランは自分の右腕がググツと勝手に動いた事に驚いた。その直後、今度はその腕につけた盾を通して激しい衝撃を感じた。

ブランの首にかぶりつこうとした氷狼の試みは「素人の盾」に阻まれ、あわれな魔物は、直後にガンダルガの剣によって叩き壊された。

「どうやら、まだ返さなくて正解だったようですなあ」

しりもちをついたブランを助け起こしながら、ポツテヌがにこやかに微笑んだ。

「すまんすまん。年をとるとどうにも術が大ざっぱになってしまっ
わい」

ロジ・マジがブランに詫びを入れる。

「いえ、そんなー!」

そもそも、この老人がいなければ、この場の全員が喰い殺されてい
たかもしれないのだ。

ブランに不平を言うつもりは全くなかったのだが…

「はっ、とんだ詰めめ甘さだねえ」

彼の側にいた老女の方から不平が出てしまった。

「いかにも。このような狭い所ではわしの術もつまいこととはたらか
ん。どれ…」

そういつてロジ・マジが杖を一振りすると、アリッサとブランの体
が宙に浮かび上がった。

「……………」

「わわっ!—!おろしてくださいよ!—!」

「アリッサ、そしてドクロの呪術師よ。お主達には力を貸してもら

うぞ」

『気づいておられたか。もちろん、力、貸す』

ブン・ラツハも大魔導師を相手にいつもより幾分うやうやしげだ。

ロジ・マジは二人の助力者を見回すと、自らもフワリと宙に浮かび上がった。

「あの、それなら僕は関係ないようなあああああああ……！」

ブランの言葉が終わらぬうちに、三人としゃれこうべは、ものすごい勢いで湯々ゲルンの外へと飛び出して行った……！

「くおらあ……！！何でわしを置いていくんじゃああ……！！！」

ガンダルガの絶叫が、ロビーに響き渡った。

「あれっ、寒くない…??？」

湯ぐゲルンの外、吹雪荒れ狂う中に飛び出したブランは、とっさに目をつぶったが、吹きつける雪の冷たい感覚に襲われることはなかった。

「結界だ。しかもあつたかい…」

三人それぞれの周りには、球状の結界が張られており雪を防いでいた。

結界内に湯気が漂っている所を見ると、それはロジ・マジによるものであるようだ。

数分もすると、3つの結界は空中で静止した後に、地上に降りた。

「ここは一体??？」

結界の外は、数歩先も見えないほどの吹雪である。

「さ、雪妖が追ってくる前に結界を広げておくかのう」

ロジ・マジが杖を振ると、驚くべきことに3つの結界は、重なり膨らんでいき、ついには周辺一帯をすっぽりと包み、雪を止まらせてしまった。

「あ…!…ここは…」

雪が止んだ景色を見て、よつやくブランは、そこが「ロジ・マジのほこら」の近くである事に気づいた。

切り株はすべて雪に埋まり、森の木々もアリッサの背丈くらいまでは、雪につかっている。

ロジ・マジの結界は、森全体に及んでいるようで、さすがに大魔導師というだけの事はある。

「この結界は、雪と寒さを防ぐためのだけのもんじゃない。すぐに奴はここにくるぞ」

ロジ・マジがそのようにつぶやいた、まさにその時である。

ヒュウウ……

結界内の気温が一気に下がった。

一同が上空を見あげると、そこにはヴィシユメイガが冷たくたたずんでいた。

『久しいのう……ロジ・マジ』

「うむ。お主は馬鹿のひとつ覚えのごとく、死の冷気をばらまいるのか」

『いかにも』

両者とも穏やかな、まるで旧友と語らうような口調だったが、恐ろしい程の緊張感、圧迫感が場に溢れていた。

「わしゃあ、石になつとつたからあつという間じゃつたが、封印された三百年は長かつたじゃろ」

『まあそのう。しかし、そちを氷漬けにすることをひたすらに夢見て、どうにか耐え忍んだぞ』

「そこまで慕われては仕方あるまい。では、決着をつけるとするかのお」

『たわけた事を。そちにわらわを倒すすべはない!』

そう言うつとヴィシユメイガは、自分の真下の地面に、ものすごい勢いで髪の毛を射出した。

たちまち、数百匹はいようかという氷狼が溢れ出る。

「うむう。むざむざと消されるために呼ばれるとは。気の毒な使い

魔どもだ」

ロジ・マジは頭をボリボリとかいた。

「しかし、すごい数ですね」

ブランがアリッサにささやきかける。

「いくら氷狼の数が増えようと、あのじじいにはどつってことないさ……むう??」

アリッサは目を細めて氷狼たちの様子を見始めた。

氷狼達は、次々と重なりつながって、いくつかのまとまりへと造形されていった。

「ほお……こいつはでかいのお」

ロジ・マジが感嘆の声をあげる。

南方に住む象のごとき巨大さになったら頭の氷狼は、こちらに向けて襲いかかって来た!!

「討ちもらしは、まかせたぞ」

こちらへ殺到する巨大氷狼たちを見据え、ロジ・マジがのんびりと振り返りもせずアリッサとブン・ラツハに声をかける。

「仕方ないねえ」

アリッサが一見すると不承不承といった体で返事をしたが、ブランだけは、彼女が実はかなり乗り気であることを感じ取っていた。

「さて……」

雪の中に杖を突き立てたロジ・マジが、素早く聞き慣れない呪句を唱えた。

途端に、地面のあちこちから大量の湯と蒸気が吹き上がり、氷狼達を包みこんだ。

「これは……??」

「間欠泉だよ」

ブランの問いに、アリッサがそっけなく答える。

高い熱と圧力によって、氷狼達は行く手を阻まれ、次々に溶けていった。

「あ、こつちに!!」

直撃を逃れた一頭が、体の半身を溶かしながらも、こちらに向けて突進してきた。

「……………」

無言でロジ・マジの脇に進み出たアリッサは、印を切りブツブツと口を動かすと、右手を迫り来る魔物に向けて突き出した。

ドオオオン!!!!!!

激しい衝撃波のようなものが打ち出され、氷狼の前足は粉々に打ち砕かれたため、敵はバランスを崩し、そのまま地面に横倒しになって動きを止めた。

「すごい、アリッサさん……」

「ああ…今のは、よくあなたの頭をひっぱたく魔法だよ」

出力を上げたスリッパ魔法がここまで威力とは、自分をなぐる時には、くれぐれも力加減を気をつけて欲しいなと願うプランであった。

「ヴィシユメイガよ。使い魔ごときでわしを滅せると思ったか」

乾いた笑い声を上げ、衣をはためかせながら浮かびあがったロジ・マジは、空中でヴィシユメイガに対峙した!!

ロジ・マジが呪文を唱えると、先ほどと同じ様に石獅子の口から大量の湯が吐き出される。

同時にヴィシュメイガも口から猛烈な吹雪を吐き出したため、両者が空中でぶつかり大量の湯気が巻き起こる。

『互角のようだな』

ドクロの目をチカチカ光らせながら、ブン・ラツハがつぶやく。

「ならば、これはどうじゃ???」

老魔導師は、懐から茶色い石をいくつか取り出すと雪妖の頭上に投げつける。

呪句と共に石ははじけ、マグマのシャワーが降り注ぐ。

しかし、ヴィシュメイガは、髪を逆立たせ、射出することでそれを相殺した。

『はっ、変わりばえせぬな。これならばどうじゃ』

ヴィシュメイガが両手を上げると、ロジ・マジを取り囲むように大人の足ほどの無数のつららが、空中に現れ、彼女の合図とともに、その鋭利な先端で温泉魔導師を貫くべく放たれた!!

「なかなか派手なことじゃ」

ロジ・マジは、結界をはってそれを防ぐ。

「ロジ・マジさん。大丈夫ですかね??」

ブランの問いに、アリッサがのんびりと答える。

「ああ。奴の結界はちょっとやさっとじゃ破れないよ。しっかりこれには……」

『長引きそうだな』

「ああ。一週間もここに立ちん坊は、いただけないねえ」

上空では、次々と発生するつららが、ロジ・マジを襲い続けている。

(しばらくは、このまま貝のごとくせんといかんろう)

ロジ・マジがそのように考えた時である。

彼の結界に異変がおこった!!

「むう」

ロジ・マジの目の前にいたのは、一羽のカラスであった。

突然、外から飛び込んできた黒い侵入者は、弾丸のような勢いで、ロジ・マジ目指してまっしぐらに進み、彼の結界にくちばしを突き立てた。

カラスは、全身に結界破りの呪符が貼られていたため、このような芸当が可能だったのだ。

呪符が光を発すると同時に、結界の光はどんどん弱まっていった。

「……どうやら余計な邪魔が入ったね」

上空を見あげながら、アリッサが舌打ちをする。

「ああっ!?!」

空を見ながらブランが、悲鳴をあげる。

雪妖のつららの攻撃が止んだと思った途端に、ロジ・マジが、力なく落下してきたのだ。

そのまま地面に激突するかと思われたが、アリッサが両手の指をならすと、すんでのところで老魔導師の体はピタリと止まり、そのままゆっくりと下に降りていった。

「ロジ・マジさん!!」

あわててかけよったブランであったが、彼の目から見ても、もはやロジ・マジは手の施しようがなかった。

肩、脇腹、太腿はつららによって串刺されており、他にもあちこち鋭い切り傷がつき、とめどなく血が流れていた。

「アリッサさん!!ロジ・マジさんが……」

ブランが、後ろからのしとしと歩いて来たアリッサに悲痛な叫びをあげる。

アリッサは、懐から布袋を取り出すと、中に入っていた粉を荒っばくロジ・マジにぶちまけた。

「アリッサさん??」

「血止めの薬だよ。だが、はっきり言って気休めだ。もう、あたしらにできることはないね」

「そんな……ブンさん!!」

『……………』

ドクロの瞳は軽くまたいただけで、何も語らない。

その時である。

「いやいやいや。意表をつかれてしもうた」

驚くべきことに、瀕死のはずのロジ・マジが杖につかまりながら、立ち上がったのだ！！

「だ、大丈夫ですか!？」

「うむう。魔道使いとして年をとりすぎると、体がこの世の法則に
しばられなくなってくるでな。とはいえー」

ここで、老魔導師は大きくひと呼吸ついた。

「もってあと、一時間というところじゃな」

「……………」

長く長く生き、すでに生死への悟りをひらいてしまった者の、あつ
けらかなとした物言いに、ブランは何も言えなくなってしまった。

「さて、アリッサに呪術師よ。最後にひとつ、わしの術法に協力し
てもらっぞ」

ロジ・マジが、杖につかまりながら、アリッサとブン・ラツハに目
をやる。

「やはり、切り札を持ってたんだね」

「うむ。本当なら、ヴィシユメイガをもう少し弱らせてから使おう
と思っと思ったんだがのう」

そう言つとロジ・マジは、何事か呟き、杖で地面をトンとついた。

途端に、アリッサとブランの周りに半透明のオレンジ色に光る膜が張られた。

「わしが使える中で最も頑丈な対熱結界じゃ。例えわしが滅されようと、しばらくは消えんから安心せい」

「安心するためには、あんたの秘策を聞かせてもらわないとねえ」

アリッサがチラリと上空を見ながら、ロジ・マジにたずねる。

ヴィシュメイガは、勝者の余裕か、微笑を浮かべながら、こちらを見下ろしている。

「わしは、これから強力な熱エネルギーを呼び出す。ただ、そのためには、少しでも多くの魔力が必要だ。わしが合図をしたら、こちらにありったけの魔力を送って欲しい」

「魔術系統のチャンネルは??」

「わしは、系統分けが行われる以前の古き魔術師じゃ。何がこようと問題ない」

「ふん。便利なこつた」

『「こちらも、いつでもいいぞ」』

二人の魔術師の了解をとると、ロジ・マジは、よたよたとヴィシュメイガが浮かぶ真下まで歩き始めた。

『別れの挨拶はすんだか?? まあ、すぐにあやつらも雪と氷の一部となるのだがな』

透き通った声で、雪妖が笑う。

ロジ・マジは、それが聞こえないのか、はたまた応える気力もないのか、ブツブツと何かを唱えている。

『今さら何をしようと思駄じゃ』

三百年前、丸5日もかけて戦った相手であるだけに、手の内は全て知っていると言いたげな口ぶりだ。

しかし、ロジ・マジからのいらえはない。

『ええい、いたぶり甲斐のない。ならば早々に死の門をくぐらせてやるっ』

そう言うと、ヴィシユメイガの目の前に冷気が集まり始め、たちまち、神殿の柱程の巨大なつららが出来上がった。

「ああ!! アリッサさん、ロジ・マジさん危ないんじゃないんですか?? 結界とか張ってあげた方が…」

「死に損ないに張る結界はないよ。あたしらは奴に頼まれたことを実行するまでさ」

言葉は悪かったが、その中にロジ・マジへの信頼を感じとったブロンは、おとなしく口をつぐんだ。

『くらっがよい』

巨大なつららが、ロジ・マジめがけて落下していくー！

ジュッ……

『！っ。』

「ああっー！！」

雪妖の放った氷の塊は、ロジ・マジにたどり着く前に、一瞬にして蒸発してしまった。

そして今や、温泉魔導師の周囲には、おびただしい熱気が発生していた。

周囲の雪は次々と溶け地面をむき出しにし、彼を中心とした茶色い円はどんどん広がっていった。そしてー

「今じゃー！！魔力をー！！」

ロジ・マジの声に応えてアリッサとブロン・ラッハは、自分の持ちうる全ての魔力を温泉魔導師に向けて飛ばしたー！！

「ヴィシユメイガよ、くらうがよいっ!!」

ゴゴゴゴゴ……

二人の魔術師からエネルギーを受けた老魔術師が、両手を空にあげると、大地が割れ、強力な熱エネルギーの柱が天に向けて突き抜けた!!

その勢いたるや凄まじく、森に積もった雪は全て一瞬で蒸発し、切り株や森の木々も、姿を現すやいなやたちまち燃え上がり、またたく間に崩れ落ちた。

エネルギーの中心にいたヴィシユメイガは、全身から冷気を放ちかろうじて身を守ったが、止むことなき熱の波動に、顔を歪めている。

「こいつあすごいね。結界を一步でも出たら、あたしらも消し炭だ」

片膝をつき、苦しそうに息を切らせながらも、アリッサはニヤリとしている。

「アリッサさん。この魔法は一体……」

「地脈さ。ここの地下には、ヴィシユメイガを封じていた地脈エネルギーの渦がそのまま残ってたんだ。んで、奴あそれをすべて熱エネルギーに変換、収束してあの化け物にぶつけてるってわけさ」

さしものアリッサも、大魔術を目の当たりにし、息を切らせながらも饒舌になっていた。

『おおおおおおお！！このようない！！このようない！！！！』

ヴィシユメイガを守る冷気が徐々に薄くなっていく。

「さらばヴィシユメイガ。そして、さらば愛すべきニーゲルンの地よ！！！！」

上空に放たれる熱の柱がさらに収束されついに――

『ああああああああああ！！！！！！！！』

かつて、北の地を震え上がらせてきた雪妖ヴィシユメイガは、その長き生を思えば、悲しいほどの一瞬で溶け去り、消滅した。

それを見届けたロジ・マジは、大きいため息をつくとき、懐から対熱の護符を取り出し、それをゆっくりとふたつに裂きはじめる――

破り終わらぬうちに、彼の身体もまた大量の熱に晒され、伝説の温泉魔導師は、一瞬の火葬を自らの手で終わらせたのだった。

ロジ・マジの死と共に熱エネルギーは収まったが、あたりは局地的に干ばつでも起こったのではないかという有り様になっていた。

「アリッサさん。ロジ・マジさんは……」

「はっ、なかなか見事な引き際だったね」

ふてふてしさの中に一抹の寂しさをたたえてアリッサがつぶやく。

「さて、熱が引くまで結界の外にやでられないわけだ。ここで小一時間ほど茶でも飲むかい??」

アリッサが冗談めかしてブランに話しかけた時である。

カランカラン

「あっ!?!」

「あるもの」が彼らの元に飛んできた。

それは、ロジ・マジが使っていた石獅子の杖であった。

『やれやれ、ようやく入滅というわけか』

「ロジ・マジさん!?!」

声はすれども姿は見えない。

『カイゴシよ。色々巻き込んだ詫びに、この杖をお主にやるっ』

「ええっ！？僕ですか？？」

『うむ。「一人では辛い者を助ける仕事」というのが気に入ったのでっ』

「ありがとうございます！ー！」

『アリッサも達者でっ』

「ああ、あなたにやなかなか楽しませてもらったよ

『うむ。では、さらばじゃ。あの娘によろしくな』

「さようなら、ロジ・マジさん！ー！」

ブランの言葉に應える声は、もはや聞こえてこなかった。

その時ー

ブシューウウウ……

曇りきつた空が、一瞬にして青空へと変わったかと思うと、森であった場所のあちこちから、高らかに温泉が吹き上がった。

ニーゲルンを気持ちの良い冬の風が吹き抜けていった。

それから数日後、ブラン達「太陽の家一行」は、誰一人欠くことなく、ツアコンのネルガの手配した馬車で帰路についていた。

「ニーゲルン。無事に復興できますかね」

馬車の窓から外を眺めながらブランがつぶやく。

雪妖によりニーゲルンが受けた痛手は深く、家の奥に籠もり、何を逃れた人々もいたが、住民・観光客の半数以上が帰らぬ人となった。

「皆さんと知り合えて、本当によかったです。これからは、おじいちゃんと力を合わせて、ニーゲルンを復興させていきます」

出発前、湯々ゲルンの駐車場まで見送りに来た、ミミの気丈な言葉が思い出される。

長老のニコライは、従者の者たちに運ばれ、ユガルタのアリツサ達が入った癒しの湯につきり、どうにか健康を取り戻したが、公務に復帰するほどの気力や体力は、もはや望めないだろう。

街の復興や、亡くなった観光客への賠償など、これからニーゲルンには、長く苦しい道のりが待っている。

近しい人々を亡くした悲しみを抱えながら、それに立ち向かわねばならぬ、ミミを始めとしたこの街の人々の事を思うと、ブランの心は重くなった。

「もはや気候すらも変わってしまったからねえ」

先ほどのブランの疑問を聞いたポツテヌがつぶやく。

「大丈夫さ。森の所にでつかい温泉もできたし、地下には怪我を直しちまう温泉まであるんだろ??いつかまた、みんなで行こうじゃないか」

前向きなメディナの言葉に、ブランは「そうですね」と自分を納得させるように大きく頷いた。

ポロロン……

フェルナンドが、そんなブランの前に何か紙を差し出す。

「え?これは……」

それは、白黒の紙版画であり、老魔導師と雪妖の戦いが描かれていた。

「ミズル版画か。よく手に入れましたなあ」

ポツテヌが関心した声を上げる。

ドルクロスの呪具カタログを見ていたアリッサも目を上げる。

「ブラン君、その絵を逆さまにしてごらん」

「はい………ああっ!!」

それは、逆さ絵になっており、雪妖が老魔導師に、老魔導師が雪妖になっていた。

「ロジ・マジとヴィシユメイガの封印についての暗示………やはり、古くからの伝承をあなどってはいかんというわけか」

ポツテヌがそうまとめると、馬車の中は再び静かになり、ガンダルガのいびきだけが響いていた。

ブランは、フェルナンドに版画を返すと、再び窓の外を眺め始めた。

ロジ・マジの飄々とした姿が目には浮かぶ。

古き時代を生きた者達は去り、もはや版画に描かれた伝承は完結してしまった。

いつか、アリッサさんを見送る日が来る。その時、自分はどのような気持ちになっているのだろうか……

ふとそのような考えが頭に浮かんできたその時――

「パァン!!!」

「いつて!!」

アリッサのスリッパ魔法がブランの頭に放たれたのだ。

「何するんですか、アリッサさん!!」

「いやさ、何かろくでもない事考えてそうだったから、ついな」

ニヤリと笑うアリッサを見て、ブランは、先ほどの事はまだしばらく考える必要はないのかもしれないと、苦笑した。

馬車の景色からは、いつの間にか雪が消え、フィン国の国境が近づいて来ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3316f/>

シルバークエスト3～そして温泉へ...～

2010年10月10日21時03分発行